

長崎県文化財調査報告書 第134集

伊木力遺跡 II

1997

長崎県教育委員会

## 伊木力遺跡 II



1997

長崎県教育委員会



ドングリ貯蔵穴出土状況



銅代出土状況

## 発刊にあたって

伊木力遺跡は、昭和60年の発掘調査により縄文時代の丸木舟、縄文時代前期に属するとされるモモの種子の発見など、全国的にも注目をあびた遺跡です。

このたび国道改良工事に伴い、事業主体である長崎土木事務所より委託を受け、長崎県教育委員会が平成5年からの範囲確認調査をふまえ、平成6年と7年に発掘調査を実施しました。

その結果、縄文時代のドングリの貯蔵穴や多量の土器や石器が出土し、さきの調査とともに縄文時代の生活を解明できる資料を蓄積することができました。

伊木力遺跡については、今回の報告に先立ち、昨年『伊木力遺跡Ⅰ』として弥生時代と中世についてすでに報告したところです。今回は縄文時代を中心に報告しています。

本書が埋蔵文化財の保護・研究の一助として活用されることを切望してやみません。

平成9年3月31日

長崎県教育委員会教育長

中川忠

## 例　　言

1. 本書は、平成5年から平成7年にかけて長崎県西彼杵郡多良見町船津郷で実施した、伊木力遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、一般国道207号特殊改良工事に伴う発掘調査である。
3. 調査は、長崎県長崎土木事務所の依頼により、長崎県教育委員会が実施し、平成5年の範囲確認調査を宮崎貴夫（現、原の辻遺跡調査事務所・係長）と松尾昭子（現、鷹島町教育委員会主事）が、平成6年の本調査を宮崎貴夫と高原愛（現、松浦市教育委員会文化財調査員）が、平成7年の本調査を福田一志（長崎県教育庁文化課文化財保護主事）・高原愛が実施した。
4. 調査は、水田部のA地区と、ミカン畑に利用されている丘陵部のB地区に分割して実施したが報告は『伊木力遺跡I』で弥生・中世を、今回の『伊木力遺跡II』では縄文時代を中心に報告する。
5. 本書の執筆は、土器を古門雅高（長崎県文化課文化財保護主事）が、その他を福田一志（同）が執筆したが、土層については久原巻二（現長崎県教育庁学校教育課係長）の指導を受け、渡邊康行が記録したものを掲載した。
6. 本書関係の資料は、現在長崎県教育庁文化課立山分室に保管している。
7. 本遺跡は1994年発行の『長崎県遺跡地図』によれば船津遺跡であるが、多良見町教育委員会・同志社大学考古学研究室編すでに発行済みの『伊木力遺跡』に併せ、伊木力遺跡の名称を用いることとした。
8. 本報告を書くにあたっては、次の協力を得た。  
荒木美穂、徳永妙子、齊藤いづみ、大平山里子、網谷泰代、近藤千鶴
9. 本書の編集は、福田が担当した。

# 本文目次

I. 位置と環境	
1. 地形	1
2. 周辺の歴史的環境	2
II. 調査の経緯	
1. 調査の経緯	4
III. 層序	
1. 層序	7
2. 層位の構成について	11
IV. 遺構	
1. ドングリ貯蔵穴	12
2. 検出の貯蔵穴について	12
3. 長崎県内のドングリ貯蔵穴	15
V. 遺物	
1. 縄文土器	18
(1) ドングリ貯蔵穴出土土器	18
(2) 第6層出土縄文土器	18
(3) 第5層出土土器	26
(4) 第3層出土土器	28
2. 石器	36
(1) 6層出土の石器	36
(2) 5層出土の石器	41
(3) 3層出土の石器	50
VI. まとめ	
1. 土器について	59
2. 石器について	63

## 挿 図 目 次

第1図 伊木力遺跡位置図.....	1
第2図 伊木力遺跡周辺図（2万5千分の1）.....	3
第3図 伊木力遺跡調査地点.....	5
第4図 A地点グリッド配置図.....	6
第5図 伊木力遺跡調査区上層図.....	9
第6図 I・II区検出の前期（溝B式土器）に伴うドングリ貯蔵穴.....	13
第7図 7号、8号貯蔵穴実測図.....	14
第8図 5号貯蔵穴実測図.....	15
第9図 後期初頭のドングリ貯蔵穴.....	15
第10図 II区検出のドングリ貯蔵穴実測図.....	16
第11図 ドングリ貯蔵穴出土土器.....	19
第12図 第6層出土土器①.....	21
第13図 ②.....	22
第14図 ③.....	23
第15図 ④.....	24
第16図 ⑤.....	25
第17図 第5層出土土器①.....	27
第18図 ②.....	28
第19図 第3層出土土器①.....	29
第20図 ②.....	31
第21図 ③.....	32
第22図 ④.....	33
第23図 6層出土の石器.....	37
第24図 ②.....	38
第25図 ③.....	39
第26図 ④.....	40
第27図 第5層出土の石器.....	42
第28図 ②.....	43
第29図 ③.....	44
第30図 ④.....	45

第31図	5層出土の石器	46
第32図	//	47
第33図	//	48
第34図	//	49
第35図	装飾品	50
第36図	3層出土の石器	51
第37図	//	52
第38図	//	53
第39図	//	54

## 表 目 次

表 1	ドングリ貯蔵穴法量一覧表	17
表 2	土器観察表	34
表 3	伊木力遺跡層位別石器組成表	55
表 4	石器計測表	57
表 5	県内の縄文後期の石器群の変換	66
表 6	報告書抄録	99

## 図 版 目 次

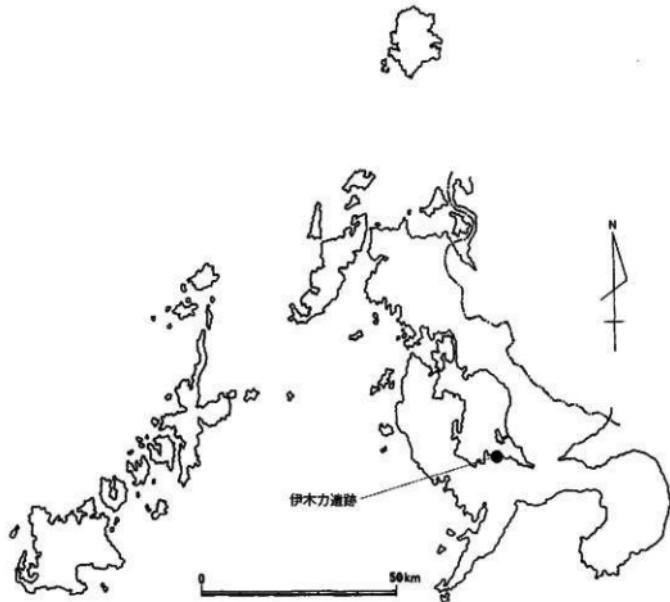
図版 1	調査区遠近景	71
図版 2	II区南側セクション	72
図版 3	I区ドングリ貯蔵穴検出状況	73
図版 4	II区ドングリ貯蔵穴検出状況	74
図版 5	ドングリ貯蔵穴検出状況	75
図版 6	22, 23, 24号ドングリ貯蔵穴	76
図版 7	17, 18, 19号ドングリ貯蔵穴	77
図版 8	20, 21, 25号ドングリ貯蔵穴	78
図版 9	ドングリ貯蔵穴出土土器	79
図版10	6層出土土器 罩B式土器第1類	80

図版11	6層出土土器 磁B式土器第2類	81
図版12	6層出土土器 磁B式土器第3類	82
図版13	6層出土土器 磁B式土器第4類	83
図版14	5層出土土器	84
図版15	〃	85
図版16	3層出土土器	86
図版17	〃	87
図版18	〃	88
図版19	6層出土の石器	89
図版20	〃	90
図版21	5層出土の石器	91
図版22	〃	92
図版23	〃	93
図版24	3層出土の石器	94
図版25	6層出土の石斧と超大型躰石錐	95
図版26	5層出土の石皿と超大型躰石錐	96
図版27	遺物出土状況	97

## I. 位置と環境

### 1. 地形

大村湾は、西彼杵半島、大村扁状地に開まれた地域にあり、伊木力遺跡は、西彼杵半島の付け根、大村湾の南東部に位置する。伊木力遺跡は、地形的にも急峻な山稜に囲まれた狭小な平野を形成する地域にある。ただし、伊木力遺跡周辺は一级河川伊木力川による沖積平野が拡がり、大村湾東側の地形のなかにあってはやや広大な平野を構成している。地質的には矢上地溝帯と長崎地溝帯とに挟まれ遺跡周辺は安山岩質凝灰角礫岩で構成されている。この凝灰角礫岩の浸食により海岸線は砂地を形成しており、古くは船津という名が示すとおり良港であったとされる。伊木力地区の中央には猪見岳の裾の左右の支流を水源とした伊木力川が流れ、この川の堆積作用によって形成された沖積平野と豊富な水源によって、町内でも肩指の水田地帯となっている。現在の海岸線は、後世の埋め立てにより大村湾側に陸地化しているが、本来の海岸線は現在より奥まっていたことが知られる。今回の調査により、繩文前期の貯蔵穴が出土しているが、この付近が当時の海岸線のラインであろうことが予想される。また、今回の調査地点から出土した遺物の包含層は、土石流堆積物であったことは、遺跡の立地



第1図 伊木力遺跡位置図 (1/25,000)

が、現在よりも急峻な谷間が形成され、その近辺に遺跡が営まれていたことを示唆している。

## 2. 周辺の歴史的環境

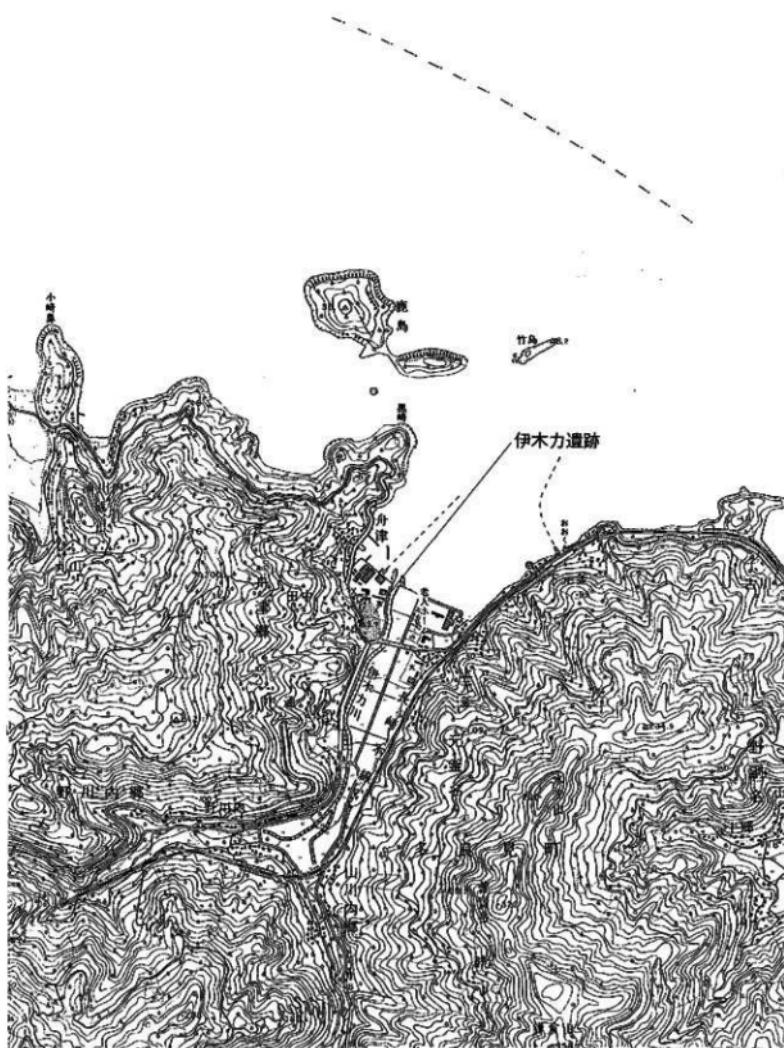
伊木力遺跡は、大村湾の最奥部という位置にあり、県内の他の外海に面した遺跡とは環境上大きく異なる。西彼杵半島南部と大村湾を取り巻く遺跡についてはすでに1990年に同志社大学刊行『伊木力遺跡』に、また伊木力遺跡の所在する多良見町内の遺跡については『伊木力遺跡Ⅰ』として長崎県教育委員会により詳細に記されている。これを参考にすると、大村湾の以東、以西、以南では遺跡の規模や数量が異なることが知られる。この現象については、大村湾以西が急峻な山々に囲まれた地形であるのに対して、以東は大村扇状地を中心とした平野部を控えており、諫早市を中心とする以南では低丘陵地域という地形的な相違によるものであろうことが理解できる。これを時代別に見てみると、大規模な旧石器時代の遺跡は大村湾の以南に集中し、縄文早期に至るまでこの傾向は続くようである。大村湾の南部における旧石器時代の代表的な遺跡として、西輪久道遺跡や柿崎遺跡、牛込A・B遺跡などが挙げられる。また縄文早期の遺跡としては、鹿野遺跡や牛込A・B遺跡がその代表的なものであろう。降って縄文時代の前期から後期になると遺跡数は少くなり、この伊木力遺跡を除いては小規模な遺跡が散見できるにすぎない。晩期の遺跡は湾の以東、大村扇状地を中心に遺跡数も急増してくる。代表的な遺跡としては東彼杵町の白井川遺跡や、大村市の黒丸遺跡などがあげられよう。弥生時代から古墳時代にかけて大村扇状地を中心に展開していくこととなる。弥生時代の代表的な遺跡としては、富の原遺跡や糸丸遺跡があり、古墳時代についても東彼杵町のひさご塚古墳、大村市の黄金山古墳、小佐古石棺等がある。規模的にはやや小さいが、弥生時代や古墳時代になると、大村湾以西から以南にかけて、岬の突端や湾内の小島に墓地を構える傾向がでてくる。多良見町でも諫早市側に位置する化鳳石棺群は弥生時代中期前半の時期、時津町前島は弥生時代中期前半の石棺群と古墳時代の円墳が多数確認されるなど、その立地から墓制について再考する必要がある。

このようなことから大村湾を取り巻く遺跡については次のように概略まとめることができる。

- ①旧石器時代 湾の以南に大規模な遺跡が集中 地形的に低丘陵地帯
- ②縄文時代 早期は旧石器時代と同様に以南に集中 前期から後期については伊木力遺跡以外に大規模な遺跡は形成されない。晩期には大村扇状地を中心に以東に集中。
- ③弥生時代 縄文晚期と同様に大村扇状地を中心に分布
- ④古墳時代 大規模な古墳は湾の以東に分布 小規模なものについては湾内の岬突端や島に分布

大村湾を取り巻く地形環境は先述したごとく、湾の以西が急峻な山稜地帯、以東は扇状地を中心とした沖積地、以南が低丘陵地帯である。この地形環境が遺跡立地に大きく係わったことが想像される。

大 村 滾



第2図 伊木力遺跡周辺図 (1/25,000)

## II. 調査の経緯

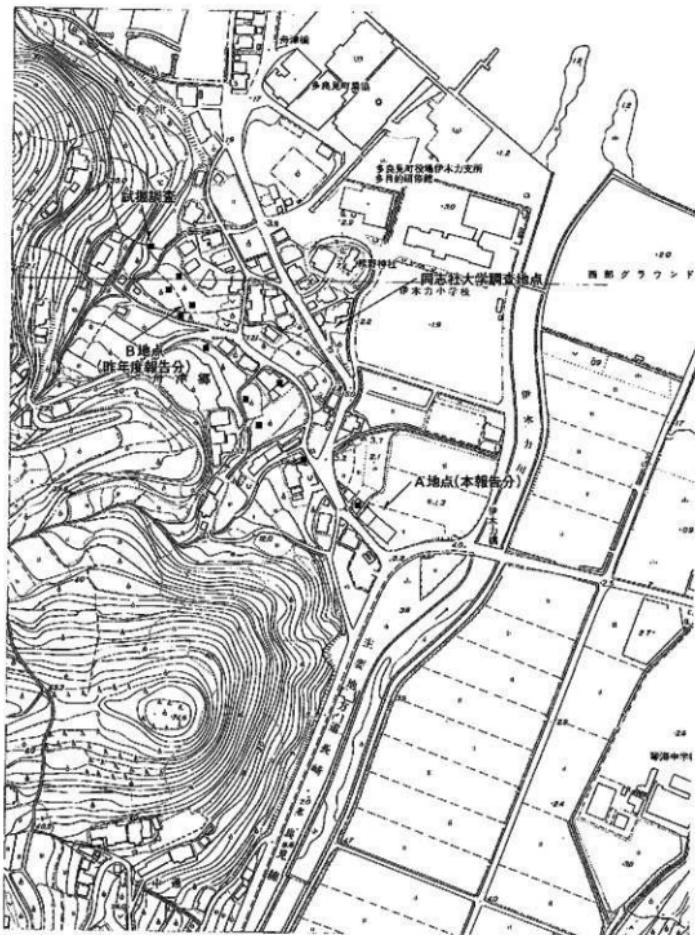
### 1. 調査の経緯

伊木力地区の本格的な調査は、昭和46年の伊木力川遺跡の調査にはじまる。この調査では縄文晩期～弥生後期の土器片のほかに須恵器等も出土している。ただし、総体的にその量は少數であり、報告者は「この区域が遺跡の中心地ではないことを物語る」としている。調査地点は沖積平野のほぼ中央に位置し、伊木力川の氾濫によって遺物は運び込まれたものと考えられている。従って遺跡の本体がこの地区のどこに存在するかが当面の懸案事項となっていた。昭和59・60年に伊木力小学校の通学道路敷設に伴い同志社大学考古学研究室が試掘を経て本調査を実施している。この調査では丸舟舟や前期に伴う桃の核が出土するなど新しい発見が相次ぎ、話題を呼んだ。遺物も轟式土器、曾畠式土器を中心とする前期と、縄文後期初頭～後葉を中心とする土器が数万点出土している。これに伴い石器も多数出土しており、それぞれに詳細な分析がなされている。土器については、X層が縄文早期、VII層では轟式土器、VII層では曾畠式が出土しており、ほぼ単純層として認定しているが、VI層以後については混在して遺物が出土するとしている。ただし、V層からは龜大な量の遺物が出土しており一部晩期土器、弥生土器を含むとするが、ほぼ縄文時代の後期を主体としている。縄文式土器に対しては第1群から10群までに分類し、詳細な報告がなされており、石器についても層位別に器種、母岩別に分類して、それぞれの特徴が導き出されている。この調査により、前回の調査で知られていなかった伊木力地区における縄文時代前期を中心とする、一大遺跡の存在が知られるとともに、弥生式土器や土師器、中世の陶磁器の出土によって、この地区的歴史が連続と統一していたことを実証し、長崎県内においても特筆すべき遺跡であることが理解された。

平成5年には伊木力地区周辺の道路拡幅工事が計画され、長崎県教育委員会により、再度同志社大学調査区周辺における調査が行われることとなり、遺跡がどのような拡がりをもつかが大きな焦点となった。調査は一般国道207号特殊改良工事によって当該遺跡がかかる可能性が高いことから、平成5年11月29日～12月7日に事前に範囲確認調査を実施したことからはじまる。テストピット（以下TP）11箇所を設定し、TP11において縄文前期の曾畠式土器に伴って石器類が出土し、TP1でも同様な出土状況が得られた。TP8は調査区西端の谷間になったところで先の地区とは場所を異とするが、ここでは弥生時代～中世の遺物が多く検出された。この結果から、TP1・11を中心とするA地区と、TP8を中心とするB地区について本調査を実施することになった。

本調査は平成6年8月22日～12月7日に実施した。範囲確認調査時に設定したA・B地区のうち、B地区より調査を実施し、弥生時代後期と中世の遺物が多量に出土した。A地区では、縄文前期の包含層があり、曾畠式土器・轟B式土器に伴って、石器、石製玉、網代編物、植物遺体などが出土した。また、調査区の東側では、標高0m前後の泥炭質土層を掘り込んだドングリ貯蔵穴が16基検出された。貯蔵穴についてはさらに東側に拡がることが予想されたため調査を来年度に延長することになった。1996年の調査分については『伊木力遺跡』Iとして弥生土器・古式土師器・中世の遺物について概に

報告されている。この中で弥生土器は、後期後葉から終末期が主体であり、少量の布留式古段階の土器を下限とし、この時期でのこの地区は一旦居住域として廃絶するとされている。その後においては中世の遺物をもって再度この区域による人的活動が認められるのである。中世の遺物については、Ⅰ期（12世紀前半）、Ⅱ期（12世紀中葉～後葉）、Ⅲ期（13世紀初頭～14世紀代）として報告されており伊木力氏との関係が指摘されている。

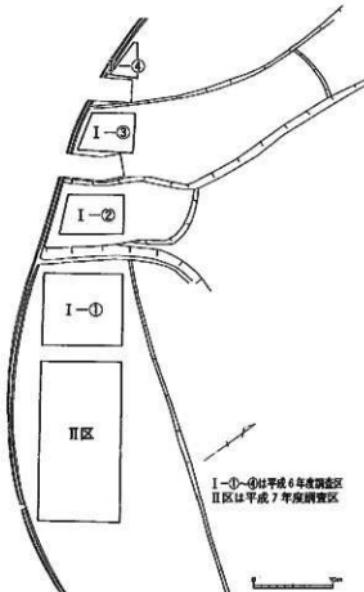


第3図 伊木力遺跡調査地点

## 平成 7 年度の調査

平成 6 年度に調査した部分（I 区）の南側に、南北 20m、東西 10m の調査区を設定して調査をおこなった。II 区については、昨年の調査からドングリ貯蔵穴が検出される可能性が十分に考えられるため、最初に調査区南側の状況からみていいくこととした。調査区の南側では表土除去後に疊層が確認され、その疊層は、深さ 2.5m 程に達し、遺跡東側を流れる伊木力川の氾濫による堆積物と判断された。この疊層は、調査区南側三分の一ほどを占拠し、その北側に遺物包含層が確認されたため、調査の主体を II 区北側においた。北側の調査では疊層が主体であり、その間に土器が入り込んだ状況であった。

疊層は約 2m の厚さをもち、その間に 3 層の後期初頭を主体とする土器群、5 層の曾根式土器を主体とする土器群、6 層の轟 B 式土器の単純層が認められた。これらの層は土石流であり、互いに切るように堆積している。また 3 層下部で 5 層を掘り込んだドングリ貯蔵穴 3 基が、6 層では 8 層を掘り込んだドングリ貯蔵穴 6 基が確認された。6 基は緩斜面状に形成されており、この付近までが遺跡の範囲であることが確認された。



第 4 図 A 地点グリッド配置図

## 参考文献

- ・藤田和裕・正林謹編 1974 『伊木力川遺跡』  
多良見町文化財調査報告書第 1 集
- ・多良見町教育委員会・同志社大学考古学研究室編 1985 『伊木力・熊野神社遺跡』
- ・多良見町教育委員会・同志社大学考古学研究室 1986 『伊木力遺跡』(第 2 次発掘調査)
- ・多良見町教育委員会・同志社大学考古学研究室 1990 『伊木力遺跡』(多良見町文化財調査報告書第 7 集)
- 1996 『伊木力遺跡 I』(長崎県文化財調査報告書第 126 集) 長崎県教育委員会

### III. 層序

#### 1. 層序 (第5図)

層位は基本的に8層に分類できる。遺物は概ね、3層が縄文後期初頭、4・5層が前期の曾畠式土器、6層では前期轟B式土器を包含する層位として捉えられる。各層位は、土石流により形成されたものが大部分を占める。以下各層の説明を述べる。

- 1 a層 暗褐色粘質土層 (表土層) 近世以降の水田面である。
- 1 b層 黄褐色混疊粘質土層 やや粗い黄褐色土をマトリックスとし、5~20cm大の水磨礫を多く含む。
- 1 c層 暗褐色混疊粘土層 (水田床土)
- 2 a層 暗褐色混疊土層 (中世・縄文後期土器を含む)
  - 3~5cm大の比較的小さな円疊を多く含む。縛まりが強く、乾燥すると固くなる。中世、縄文など各期の遺物を含み、包含層の時期の特定はできない。
- 2 b層 暗褐色土層 (中世の遺物含む)
  - 縛まり、粘性とも弱く、木葉・小枝などの植物遺体を多く含むが疊は含まない。中世埋土層。
- 2 c層 縄文後期の包含層 (3 a, 3 b層) を浸食した疊層。大小さまざまな円疊を含むが、マトリックスは砂質で縛まりは弱い。植物遺体 (主に小枝) を多く含む。
- 3 a層 暗褐色混疊砂質土層 (縄文後期包含層)
  - 細粒砂をマトリックスとする円疊層で、疊の外皮が風化して砂になっているものと思われる。疊は水に漬かると酸化鉄が滲みだし、外見は橙褐色を呈するようになるが、精査時には暗灰褐色砂層にややカラフルな疊が混じりあったような様相を呈する。マトリックスには植物遺体の細片を多く含む。土石流堆積物。
- 3 b層 暗黒褐色混疊土層 (縄文後期包含層)
  - 基本的に3 a層に酷似するが、植物遺体の量が多いために含水率が高く、ヨロヨロした感じを受ける。水に漬かると疊の表面が錆い黄褐色を呈するため、識別が容易になる。ただし発掘時は湧水でドロドロになるため、3 a層との分層は困難であるが、標高0.5~0.6m前後のレベルで分層できそうである。土石流堆積物。
- 4 層 混疊暗灰褐色土層 (曾畠式土器包含層)
  - この層は、北側1区に薄く堆積するもので、北側区の2 a層と5層との境界にある。
- 5 層 暗茶褐色混疊土層 (曾畠式土器包含層)
  - 暗茶褐色の粘質土をマトリックスとする疊層。2 a層との境界には30cm大の円疊を多く含む。この疊は淡青緑色の結晶凝灰岩で、玉葱状に風化剝離し、その岩片が破碎された状態でザザラの青灰色砂を多く含んでいる。全体に植物遺体片を多く含み、疊に貼り付いていることもある。I区からII区にかけて存在するが、II区では北側に5m程残るだけである。

本来II区全体に抵がっていたものと思われるが、3層の土石流によって切られている。

#### 6 層 暗褐色泥礫土層（轟B式土器包含層）

ほとんど疊層といってよいほどマトリックスは少ない。本來は大疊であったものが風化により破碎されており、マトリックス中には植物遺体を多く含む。破碎面には酸化鉄（橙褐色）の付着が著しい。大石の間にはマトリックスが多く、その中に遺物を含んでいる。出土する土器は轟B式土器のみである。マトリックスは凝灰岩の風化砂が粘土化したもので、暗褐色～暗灰褐色を呈する。水分を多く含んでいたためか、やわらかく、締まりが弱い。ドングリの貯蔵穴は、この層の下部から掘り込まれている。

#### 6 a 層 黒褐色腐植土層

木葉を主体とし、小枝などを含む腐植土層。木葉は、ほぼ水平に重なり合うように堆積していることから、水溜まり状の静水域での水成堆積層と思われる。

#### 6 b 層 暗褐色泥礫土層

6層に酷似するが、6層に比べて疊がやや大きく、量も少ない。遺物は黒曜石剝片・碎片を少量含むのみで形成時期は特定できない。

#### 6 c 層 暗褐色砂質土層～黒褐色土層（轟B式土器包含層）

暗褐色砂質土層を基調とするが、下半には黒褐色ブロック（泥炭化した腐植土層）を部分的に含むため、色調的には混在した状況を呈する。全体的には砂質土層であるが、径10mm前後の小疊を多く含んでいる。本層の上部（標高マイナス20cm前後のレベル）からは、轟B式土器に伴う動物遺体（頸骨・その他）が出土した。伊木川が蛇行し、後に三日月湖状に取り残された部分が湖沼となって残ったものと思われる。6層の傾斜面が湖沼との境でこの面から土器や動物遺体が投げ込まれたことが考えられる。

#### 6 d 層 6層に比べて原形を保つ疊が多いために分離したが、全体の層相は6層と大差なく、文化遺物も轟B式土器を主体とする。6層と同一層に認定すべきかもしれない。

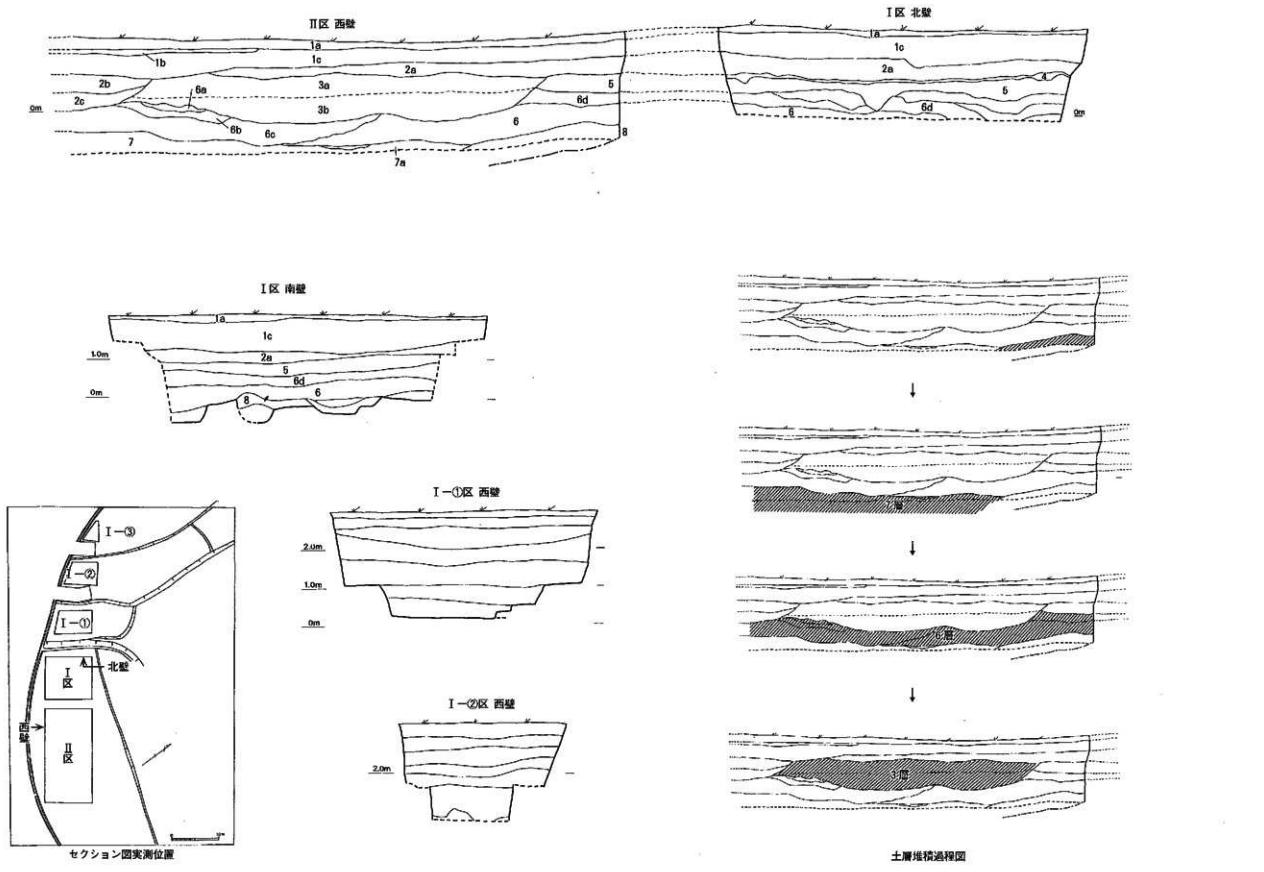
#### 7 層 暗褐色泥礫砂質土層

径20cm前後の水崩疊を主体とする疊層。8層（シルト層）を切る形で堆積している。轟B式土器のみを包含する点では6層・6c層と共通するが、6層に比べて破片が小さく、また磨滅しているものが目立つ。繩文前期海進の開始期から極大期にかけての堆積層と考えられる。

#### 7 a 層 暗褐色腐植土層

6層と7層の間に介在するレンズ状堆積の腐植土層。外見は6a層に近似する層で、木葉の堆積が著しい。掘り出した段階では茶褐色を呈するが、外気に触ると黒褐色に変色する。文化遺物は含まない。

#### 8 層 暗紫灰色シルト層僅かに紫がかった色のシルト層。ヴユルム氷期の堆積物の可能性もある。遺物・疊ともに含まない。本層は6層中央から北側にかけて立ち上がる。ドングリの貯蔵穴はこのシルト層を掘り込んでいる。



第5図 伊木力造跡調査区土層図 (S = 1 / 2)

## 2. 層位の構成について（第5図）

基本的には、堆積の新しいものから順に1層～8層まで層位番号を付した。今回の調査では8層のシルト層が一番下位にあった。このシルト層は北側に高くなりながら傾斜しており、この層に7層の縄文海進期の堆積物が載るように堆積している。その後6d層をも含めた6層が堆積、6層の堆積物は疊層であり、層厚としては1m以上ある。その中に轟B式土器が上位から下位まで出土するなど、一気に堆積した状況を呈する。状況的に6層は、土石流による堆積物と思われる。貯蔵穴は6層の下位から掘り込まれ、8層のシルト層まで達しているが、この土石流によって貯蔵穴はバック状態で残存したのであろう。ただし、この時の土石流により、貯蔵穴の上部は削平されたことも考慮しなければならない。6c層は植物質の強い泥炭層で、轟B式土器・イノシシの骨などが出土している。6c層は6層上に載っており、6層形成後に伊木川の氾濫等によって、湖沼化した部分と考えられる。この湖沼に前期の縄文人が獸骨や土器片を投げ入れたと考えられる。6d層は、基本的に6層に通ずるが、この層は本来まだ南側に延びていたと思われ、その上層の5層とともに3a・b層によって切られている。この3層も土石流でこの層位に縄文後期初頭を中心とする土器が含まれていた。土石流は調査区の北西側から流れ込んだものと判断され、U字状に延びて6d層・5層を切っている。2b・2c層は3層を切る小河岸段丘であり、中世の遺物を含む層である。

このように、今回報告の伊木力遺跡の層位は土石流による影響が強く、それを裏付けるかのようにそれぞれの層の遺物は、ほぼ同一時期のものを包含している。

今回の調査区は、土石流の堆積物で遺跡の本体は調査区の北西側にあったことが予想される。遺跡の本体そのものについても、土石流によって崩壊した可能性が高い。このことは同志社大学調査地点についても同様の傾向をもっており、この付近が縄文前期～後期にかけて何回かの土石流被害を被っていたことが理解される。従って、遺物そのものは包含層出土のものであって、生活址そのものからではない。このことをふまえて遺物についても考察していくかなければならないと考える。包含層としては、6層は轟式土器群の一括単純層、5層は曾畠式土器を主体とするが、轟式土器や後期初頭の土器なども一部包含しており、遺物において6層ほどの整然性はもない。3層についても後期初頭を主体とするが一部に他期の遺物の混入もみられる。しかし5・3層についてもほぼ曾畠式土器・後期初頭の文化層として捉えられるものとして、遺物の説明の項では主に6層轟式土器、5層曾畠式土器、3層後期初頭の土器を掲載し、説明を加えていくこととする。石器については6層だけが轟式土器単純層ということから、この層の石器群については轟B式土器に伴う石器群として、きわめて重要な位置付けが必要かと考える。

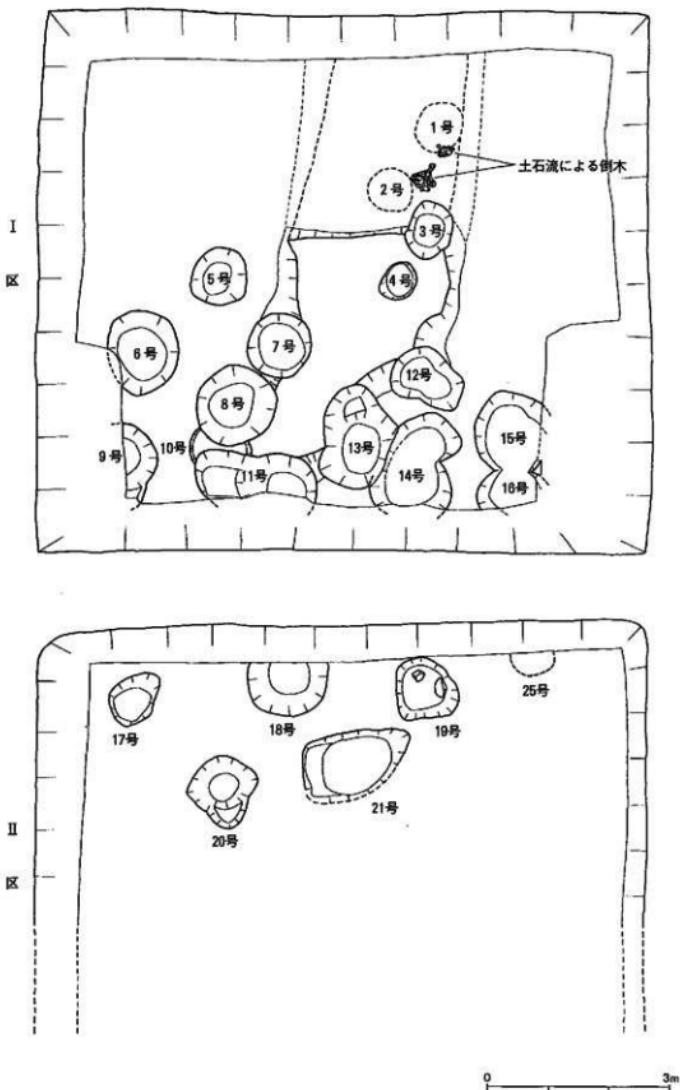
## IV. 遺構

### 1. ドングリ貯蔵穴 (第6～10図)

ドングリの貯蔵穴が平成6年の調査時に16基出土していたが、平成7年調査時にも6基出土し、縄文前期竪B式土器に伴う貯蔵穴は、全部で22基確認されたことになる。ただし、I区とII区は3m前後のベルトを残していることから、30基前後の貯蔵穴があったものと考えられる。また新たに縄文後期初頭と考えられる貯蔵穴も3基確認された。縄文前期の貯蔵穴については、8層のシルト層を掘り込んで築かれており、貯蔵穴の底面のレベルがI区で-30～-40cm、II区では深いところで-1.00mにある。これに対し、後期初頭の貯蔵穴では貯蔵穴の底面のレベルは+20cm前後を測り、あきらかに前期のものと比高差がある。前期の貯蔵穴については、I区からII区にかけての傾斜面に敷設していくことが考えられる。また8層のシルト層の上位の層については、土石流の堆積物であるとの判断を下しているが、このことから考えると8層は削平されたことを考慮しなければならず、貯蔵穴もその時点では上部が削られたと考えるべきであろう。後期初頭の貯蔵穴については、5層面を掘り込んでおり、前期のものに比べると浅いことが特徴である。25基の貯蔵穴内からは、表1に見られるように、土器片や黒曜石片、木片等が出土しており、土器片は微隆起線文を持つ竪B式土器が主体で、ここからも当遺跡の貯蔵穴が縄文前期のものであることが検証される。後期初頭の貯蔵穴についても滑石混入の土器が出土しており、5層曾畠式土器の包含層を掘り抜いていることや、充填土の3層が後期初頭の包含層であることなどから、後期初頭との時期決定をしたものである。

### 2. 検出の貯蔵穴について (第6図)

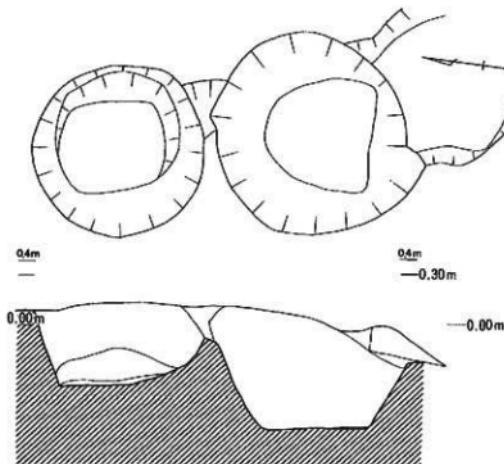
前期竪B式土器に伴うドングリ貯蔵穴がI区から16基、II区から6基、合計22基が検出されている。それぞれに北側から1号～25号まで番号を付した。第6図及び第10図から説明を加えていくこととする。1・2号貯蔵穴は貯蔵穴底面のみが残存した状態で検出された。近くにある木の株は土石流によって押し流された状況を呈す。周囲の波線部分は、I区中央に比高差20cmほどの高まりがあったものとして波線を入れている。I区の貯蔵穴群は、この高まりの傾斜面を中心に形成されているということが言えよう。土石流が流れる以前、I区中央部に見られる高まりがあったのか、あるいは土石流によって削平されたためにこの地形が生み出されたのかについては判断がつかない。7・8・10～13号貯蔵穴についてはこの高まりの周間に設営されている。基本的な形状は円形、橢円形を呈しているが、11・12号については段をもっており、II区の20号などと通ずるもので足場的な機能をもったと推察される。切り合い関係については10号が8・11号に切られ、16号は15号によって切られているなど廃棄されては別に作り直すという行為が頻繁に行われていたことが考えられよう。II区の貯蔵穴は、旧地形が南側に傾斜していることを反映し、I区よりもやや低い位置で設営されている。II区がこの地域での貯蔵穴設営にあたっての限界地点であることを示唆している。I区の貯蔵穴の底面の平均が標高48cmにあるのに対し、II区では-66.5cmで20cmほど低い位置にある。I区からIIにかけての緩斜面に貯蔵穴



第6図 I・II区検出の前期(縄文式土器)に伴うドングリ貯蔵穴

が形成され、さらに北東側に延びていくものと考えられる。後期初頭の貯蔵穴（22号～24号）についてはII区南側においてのみ検出した。直下で検出した前期の貯蔵穴が傾斜しながら消滅するのに対し、これらのものについては、ほぼ同一レベルにあり、さらに南側に延びて存在した可能性もある。なぜなら掘り込み面である5層が、3層という北西側からの土石流によって切られているからで、5層面は本来さきに南側に水平にのびていた可能性があるからである。前期轟B式土器の時期の貯蔵穴が22基確認されたのに対し、後期初頭のものが3基しか発見されなかつたのはこのような理由によるものと考えられる。また曾畠式土器の時期のドングリ貯蔵穴についても同様で、3層の土石流によって削り取られた可能性がたかい。長崎県内の貯蔵穴の在り方を見てみると、弥生後期まで確認されていることから、ドングリ貯蔵穴が各時代を通じて生活の一部として存在したことが理解でき、その条件を具備している場所については貯蔵穴を設置し、食生活の重要な部分を占めていたことが理解できる。

ドングリ貯蔵穴の構造については、第7・8・10図に8基について実測図を掲載し、これをもとに説明する。5号貯蔵穴は、途中に段差をもつもので、側断面の実測からも理解できるように逆台形を呈す。これは第7図の7、8号貯蔵穴、第10図の20号貯蔵穴などと同様で、底が深い一群である。これに対し、第10図の21・22のように底が浅く直径が大きいものがみられる。第10図の22・23・24号貯蔵穴は轟文後期のものであるが、轟B式土器の時期のものよりも、やや小型で底が浅いものが特徴的である。



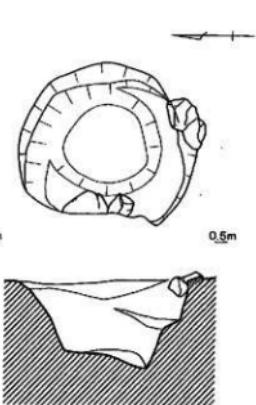
第7図 7号、8号貯蔵穴実測図 (1/30)

### 3. 長崎県内のドングリ貯蔵穴

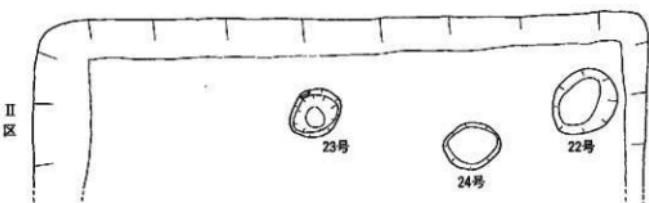
縄文時代早期から発見されている貯蔵穴は、縄文時代～弥生時代にかけて全国的にも多数発見されており、その研究も当時の食料獲得の方法、堅果類の加工技術などが検討されている。

長崎県でも近年、この種の貯蔵穴が幾つか確認されてきておりそれぞれに検討されている。時代的には本遺跡の縄文前期を最古として、弥生後期まで知られており、対馬のかしほの遺跡は近世の貯蔵穴ということで、ドングリの貯蔵方法が最近まで同じであったことが知られるなど、植物に対する貯蔵方法が最近まで延々と継承されていたことを実証した遺跡である。壱岐の名切遺跡では、縄文中期～晩期までの貯蔵穴が30基確認されている。貯蔵穴は基盤岩を掘り込んでおり、貯蔵穴底面の絶対高が高いもので2.08m、低いもので0.11mを測る。岩盤そのものが傾斜しており湧水を利用して貯蔵穴を造ったと考えられる。大村市黒丸遺跡は縄文晩期の遺跡であるが、66基のドングリ貯蔵穴が検出されており、晩期のものとしては最大級のものである。

これらのことから、縄文時代全般にわたって植物採集活動が当時において重要な食料獲得の手段であったことが理解できる。このことは、西北九州で縄文後期に漁撈文化が発達する時期においても、五島福江島の中島遺跡のように、ドングリ貯蔵穴が検出されることからも頷けよう。

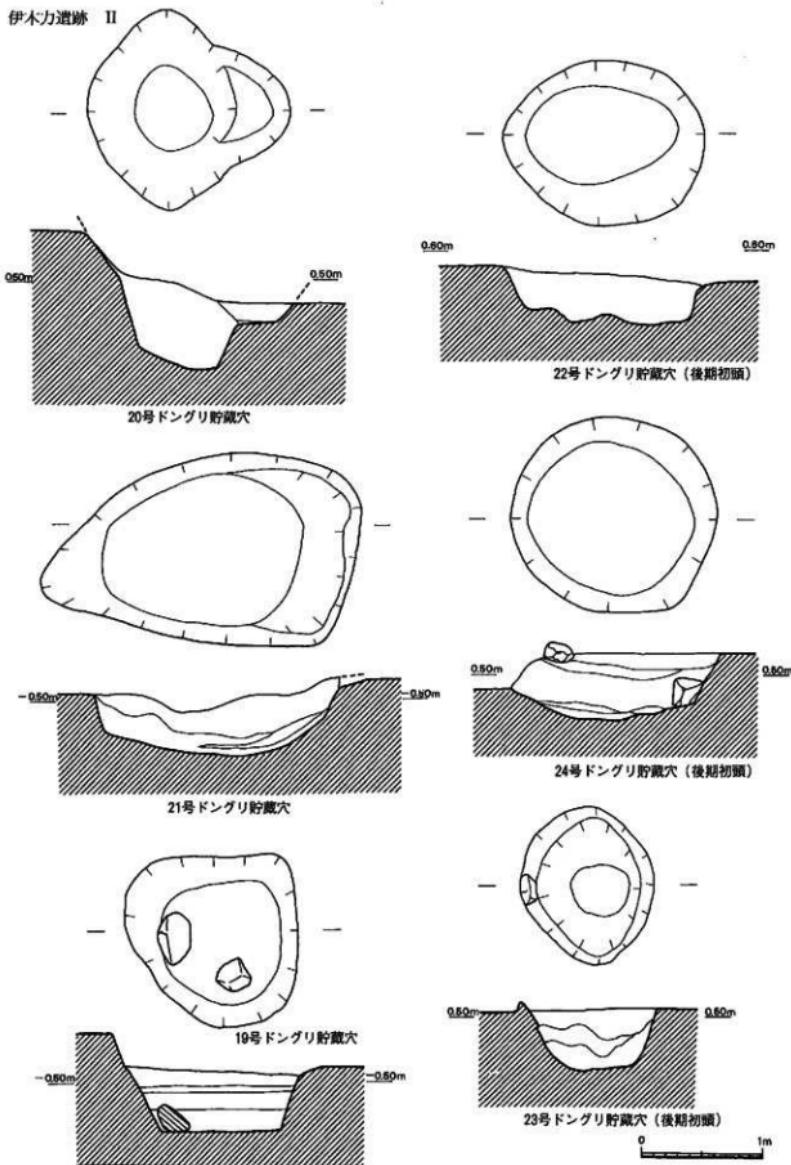


第8図 5号貯蔵穴実測図（1/30）



第9図 後期初頭のドングリ貯蔵穴

伊木力遺跡 II



第10図 II区検出のドングリ貯蔵穴実測図 (1 / 30)

表1 ドングリ貯蔵穴法量一覧表

貯蔵穴番号	長径(cm)	短径(cm)	貯蔵穴の深さ	上面のレベル	底面のレベル	出土遺物
1号	100	75	?	(-13.3)		土器片 黒曜石剣片
2号	70	70	?	(-12.8)		
3号	105	75	43.4	8.9	-34.5	
4号	70	53	27.9	19.9	-8.0	土器片 4点
5号	102	95	45.5	-2.3	-47.8	
6号	134	125	40.1	-5.1	-45.2	土器片14点 黒曜石片 7点
7号	112	105	52.8	13.9	-38.9	土器片 3点 黒曜石 2点 炭化物
8号	137	125	76.1	11.8	-64.3	土器片 8点
9号	115	(100)	42.2	-7.6	-49.8	土器片11点 黒曜石片 1点 木片 1
10号	—	(103)	20.8	-2.5	-23.3	土器片 7点 黒曜石片 7点 木片 1
11号	208	?	63.2	1.5	-61.7	土器片 4点
12号	170	125	85.4	24.9	-60.5	
13号	124	90	43.2	3.3	-39.9	土器片23点 黒曜石片 木片 3点
14号	(185)	(130)	73.5	5.2	-68.5	土器片25点 黒曜石14点
15号	(145)	(135)		-16.1	-58.8	土器片 6点 黒曜石片 9点
16号	?	?	85.5	19.6	-65.9	
17号	97	73		-40.0	-54.0	
18号						
19号	101	101	80.0	-40.7	-80.0	
20号	121	119	80.0	-22.0	-102.0	土器片 3点
21号	141	113	47.4	-33.0	-80.4	土器片 5点
22号	119	98	35.0	51.0	16.0	
23号	94	79	36.0	55.0	19.0	
24号	123	115	40.0	62.0	22.0	後期土器片 2点
25号	—	—	—	—	—	

\*上面のレベルについては一番高い所を、下面のレベルについては一番低い所を測定した。

出土遺物の項で、土器片としたものは森B式土器である。

## V. 遺 物

### 1. 繩文土器 (第11図～第22図)

出土した繩文土器を以下のように群別に分類し、出土層位ごとに説明を加える。なお、層位が異なっても同系統の土器の場合は一括した。また個々の土器の詳細については観察表(第2表)を参照されたい。

第I群土器 藤A式系土器

第II群土器 藤B式系土器「単純深鉢形」

第III群土器 藤B式系土器「屈曲・胸張型」

第IV群土器 その他の藤B式系土器

第V群土器 プロト曾畠式系土器

第VI群土器 水ノ江編年による曾畠I式土器およびその系統の土器

第VII群土器 水ノ江編年による曾畠II式土器およびその系統の土器

第VIII群土器 水ノ江編年による曾畠III式土器およびその系統の土器

第IX群土器 並木式系土器

第X群土器 阿高式系土器

第XI群土器 坂の下式系土器

第XII群土器 出水式系土器

第XIII群土器 御手洗A式系土器

第XIV群土器 型式不明土器

#### (1) ドングリ貯蔵穴出土土器 (第11図, 1~17)

ドングリ貯蔵穴から出土した土器はいずれも先に第II群土器とした藤B式系土器である。93点が出土したが、細片が多く図示できたのは17点であった。その多くは貼付隆帯の断面が丸みをおび、隆帯が凹凸をなし、途中で切れたりするものである。後述する本遺跡での藤B式系土器の分類に従えば第3類の土器群に相当する。しかし1・4・5・6の資料は隆帯の断面が三角形をなし、ナデ調整を多用するため、後述する分類に従えば第2類の土器群の特徴を示しており、古相を呈する。また2・10は第4段階の土器群である。

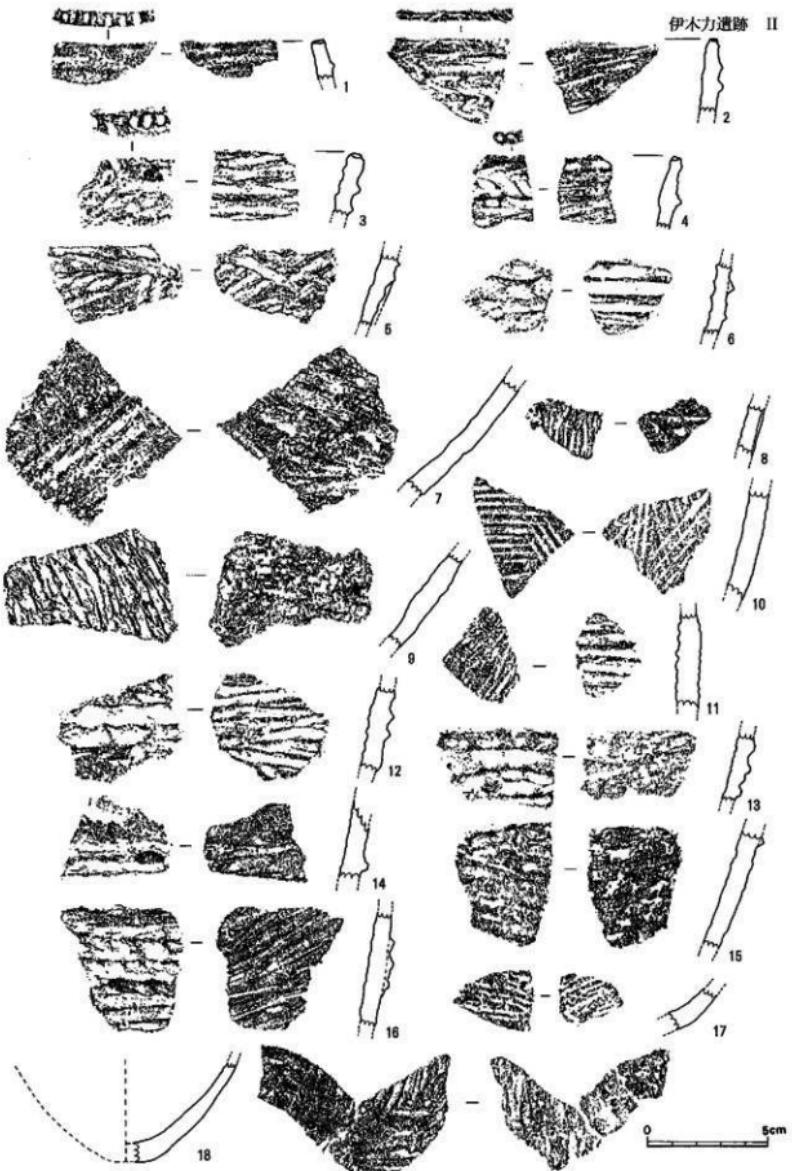
#### (2) 第6層出土繩文土器

##### ①第I群土器 (第11図, 18)

藤A式系土器を第I群土器とした。1点のみ出土した。内面は横位の貝殻条痕で調整されている。外面は縦に綾杉状の貝殻条痕が施されている。

##### ②第II群土器 (第12図～第15図)

藤B式系土器のうち器形が「単純な深鉢形」と思われるものを一括した。成形技法などにより第1類から第4類に分類できる。



第11図 ドングリ貯蔵穴出土土器 <18を除く> (S = 1 / 2)

## a 第1類（第12図、19~33）

口縁部下にミミズバレ状の隆帯が平行に貼付されるものである。隆帯の断面は三角形で、三角形の頂部は指頭でつまみ上げられ、その後、ナデ調整がわずかしかなされないため、稜の先端が尖って鋭く、隆帯の厚みや高さが十分ある一群である。隆帯の稜線は途中で切れることなく、ほぼ直線的に、かつ丁寧に貼付される。隆帯の数は5本以上で、ほとんどの資料で口唇部に刻目が施される。横走する隆帯の下位に斜行する隆帯を施す資料もある（第12図、29・32）。内面は貝殻条痕で調整されるものと、板状工具などによって調整されるものがある。25のみに結晶片岩の混入が認められる。

## b 第2類（第13図、34~53）

貼付隆帯がミミズバレ状で、隆帯の断面が三角形であることと、口唇部に刻目をもつことは第1類と共通するが、隆帯を貼付する際に、第1類よりも指でナデたり、工具でナデたりといった、ナデ調整の頻度が高い点が異なる。そのため、隆帯の稜の頂部がつぶれたり、また隆帯の高さと鋭さが失われてもいる。さらに第1類に比べ、隆帯の数も少なくなる傾向がある。

なお、図示した土器のなかには胎土に結晶片岩を含む資料はなかった。

## c 第3類（第14図、54~77）

ミミズバレ状の貼付隆帯の頂部に第1・2類のような明確な稜線がなくなり、隆帯の断面が丸みをおびるものである。隆帯の厚みや高さが減じるとともに、隆帯自体に顕著な凹凸が生じ、そのため隆帯が途中で切れる資料もある。口唇部に刻目はないか、あってもきわめて浅くなり、刺突によるものもみられる（第14図、55）。第1・2類に比べると明らかに成形技法の点で粗略化がうかがえる。59には胎土への結晶片岩の混入がみられる。

## d 第4類（第15図、78~86）

隆帯の数はさらに減じ、2本前後となる。隆帯の高さは低くなり、78・79・80のように貼付隆帯ではなくナデによって弱い隆帯を作出する資料もある。貼付隆帯もミミズバレ状の隆帯をもつもの（82・83・86）と「くっきりとした隆帯」をもつもの（84・85）に分かれる。いずれの資料も器壁が第1~3類に比べるとかなり薄く、焼成もよく、黄褐色や灰褐色を呈し、黒褐色を主体とする第1~3類とはずいぶんと趣が異なる。鉛重な第1~3類にくらべ、後続する曾焼式土器のようにパリッとした土器群である。

## ③ 第III群土器（第15図、87）

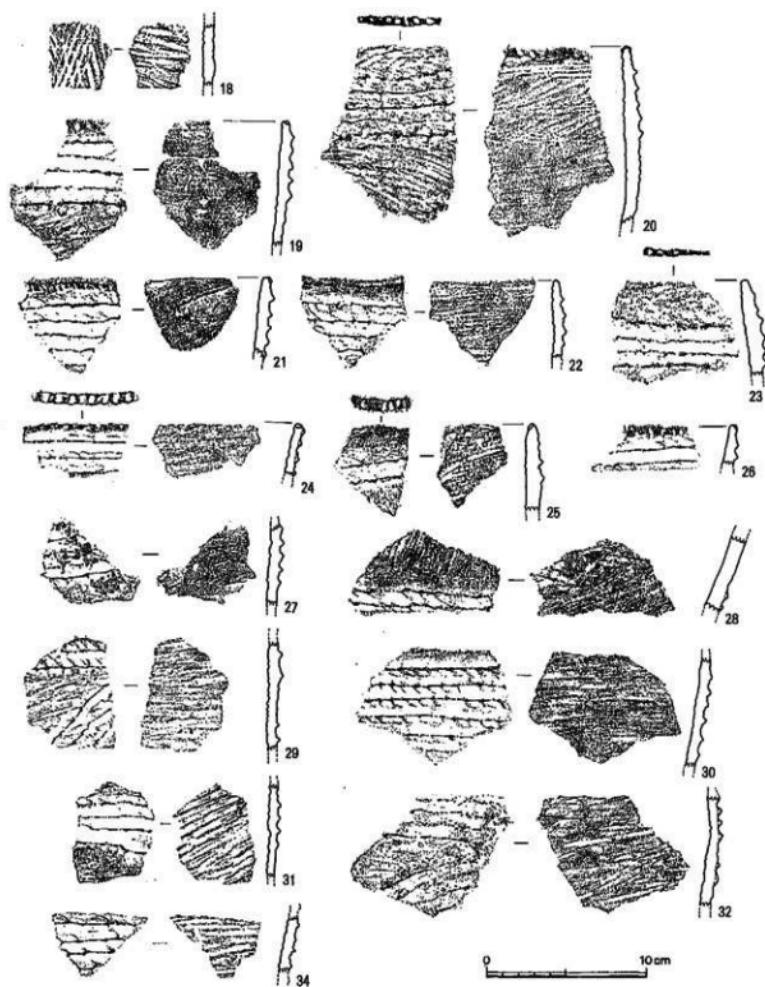
本遺跡より出土した「眉曲型」の轟B式系土器は確実な資料は1点のみであった。わずかに残存していた隆帯は断面が丸みをおびており、内外面の条痕も浅いところから、眉曲型でも新しい型式のものと判断した。

## ④ 第IV群土器（第15図、88~112）

器形が判然としない轟B式系土器を一括した。貼付隆帯の特徴より第1類から第4類に分類し、条痕地文のみのものを第5類、底部資料を第6類とした。

## a 第1類（第15図、88・89）

内面は条痕地で、外面には波状に隆帯を貼り付けるものである。隆帯の稜は丸くなっている。



第12図 第6層出土土器① ( $S = 1 / 3$ )

## b 第2類 (第15図, 90)

90は刻目のある貼付隆帯をもつものである。1点のみ出土した。口縁下に一条の刻目隆帯を巡らす。内外面は貝殻条痕がほどこされているが、ナデ消されている。今回の出土資料のなかでは刻目隆帯をもつものはきわめて少ない。

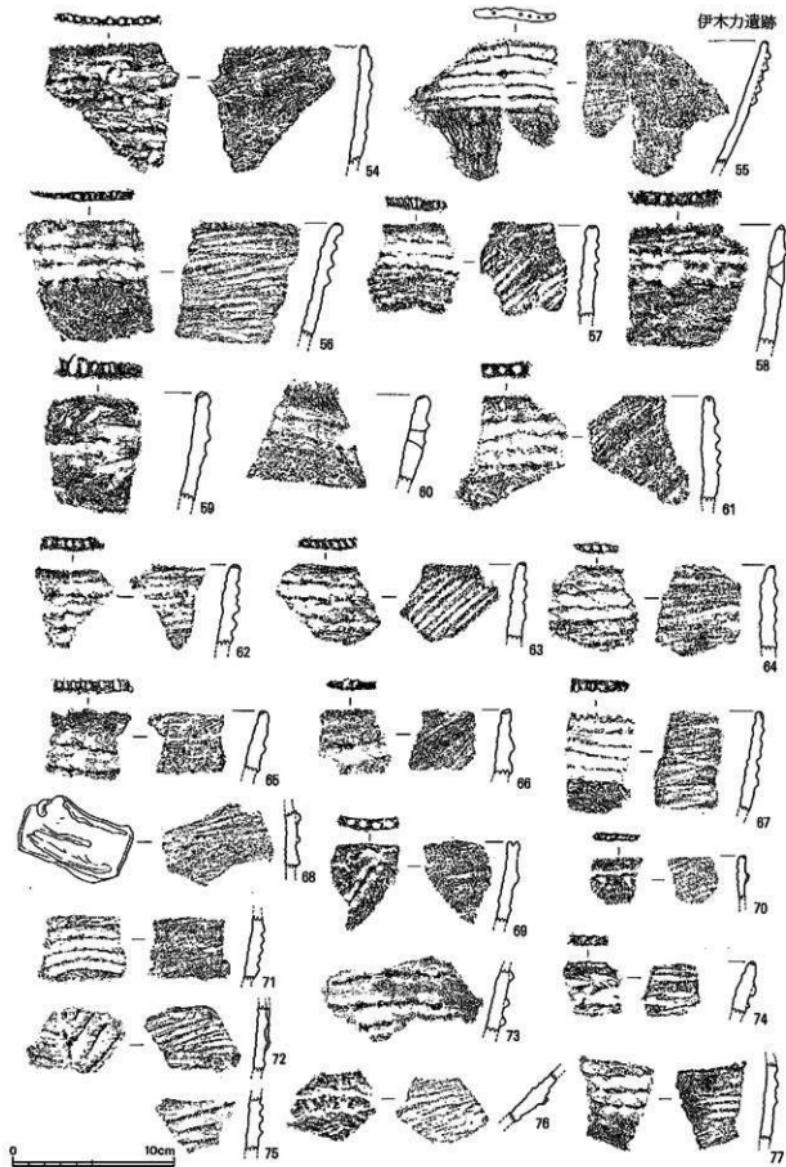
## c 第3類 (第15図, 91・92)

縦に貼付隆帯をもつものである。74は口縁部先端から数条の隆帯が垂下する。垂下隆帯は長いものと短いものがあり、変化をもたせている。内面には貝殻条痕が残る。77は縦に一条の垂下隆帯が施されたものである。本県南松浦郡頭ヶ島白浜遺跡出土の轟B式土器に類例がある（報告書では第9図、18）。鹿児島県出水市莊貝塚の第5類に該当する。外面には貝殻条痕が残るが、内面はナデによって消されている。

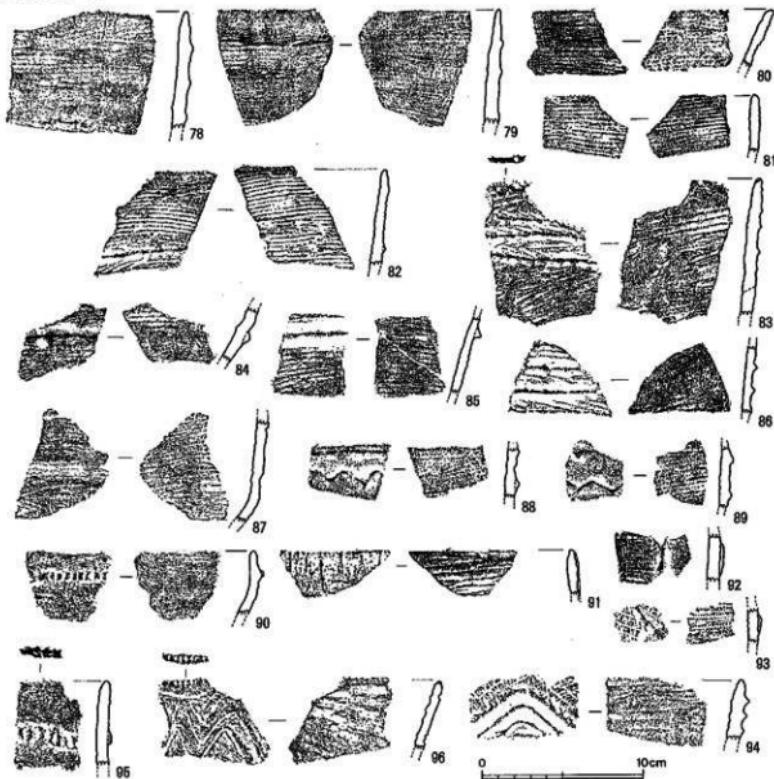


第13図 第6層出土土器② (S = 1 / 3)

伊木力遺跡 II



第14図 第6層出土土器③ (S = 1/3)

第15図 第8層出土土器④ ( $S = 1/3$ )

d 第4類 (第15図, 93・94)

ミミズバレ状隆帯を貼付したのちに斜行する平行沈線を引き、さらにそれらの平行沈線群に交わる斜行沈線を施し、結果として格子目の沈線となる資料である。93はミミズバレ隆帯が直線的なもとで、94は隆帯が曲線となるものである。

e 第5類 (第16図, 97・109)

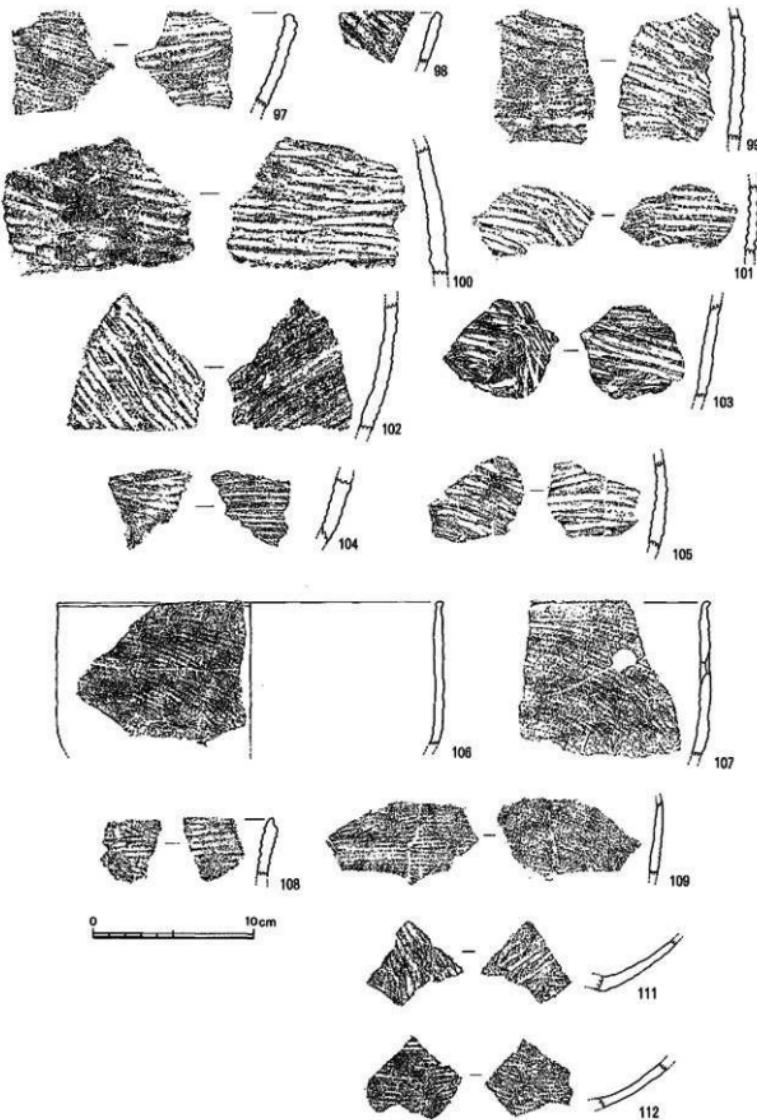
内外面は条痕を地文としているが、それ以外は無文の上器を一括した。

f 第6類 (第16図, 110~112)

底部および底部付近の資料を一括した。

⑥第XIII群土器 (第15図, 95・96)

95は口唇部に刻目をもつ資料である。内外面はナデられているため、条痕調整の跡が不明である。



第16図 第6層出土土器⑤ (S = 1 / 3)

そのため轟B式系土器に分類することが躊躇される資料である。型式不明土器とした。

96は内面に条痕を施し、外面は口唇部に刻日をもち、さらに貝殻腹縁による波状の沈線文を施すものである。施文単位は1つである。南九州の寒ノ神式土器などの影響をうけた資料とも考えられるが、型式不明土器とした。

(3) 第5層出土土器

①第V群土器（第17図、113～117）

第5層出土土器のうちプロト曾畠式系土器と思われる土器群を第V群として一括した。

a 第1類（第17図、113・114・116・117）

細沈線を施す土器である。117は横位の細沈線と×形の細沈線が施される。113は貝殻腹縁によって沈線を施すものである。114・116は横位の浅い細沈線を施す。113・114・116は滑石を含むが、117は滑石を含まない。

b 第2類（第17図、115）

弧線文をもつ土器である。115は3本単位の弧線を施す。

②第VI群土器（第17図、118～120）

水ノ江編年による曾畠I式土器およびその系統の土器を第VI群土器として一括した。直線文様帯による区画をおこない、次に刺突文・複合鋸歯文等による文様の充填という手法をとる一群である。曾畠I式の古段階か新段階かの区別は口縁部が欠失するため判然としないが、120は縦位の施文を施すため、水ノ江の文様分類によるB類と認めら、曾畠I式新段階と判断する。

③第VII群土器（第17図）

水ノ江編年による曾畠II式土器およびその系統の土器を一括した。直線文様帯による区画→文様充填の施文方法から全体の文様が口縁部・胴部・底部の3つの文様帯に分かれる一群である。水ノ江の文様分類に従い、胴部に单一の文様が主に横方向に施されるA類と、胴部に縦位の区画が施されるB類と全体に单一の文様が施されるC類に分けた。判断できなかったものはD類とした。

【A類】(121・124・125・128・129・130・131・132・135)

【B類】(126・127・134・136・138・139・142・143・145・150・154・155)

【C類】(133・137・140・141・144・146・147・148・149・151・152・153)

【D類】(122・123)

このうち122・123・134は口縁部文様帶に刺突文を残すため曾畠II式古段階に位置づけられ152・153も胎土・調査などから曾畠II式古段階と判断した。

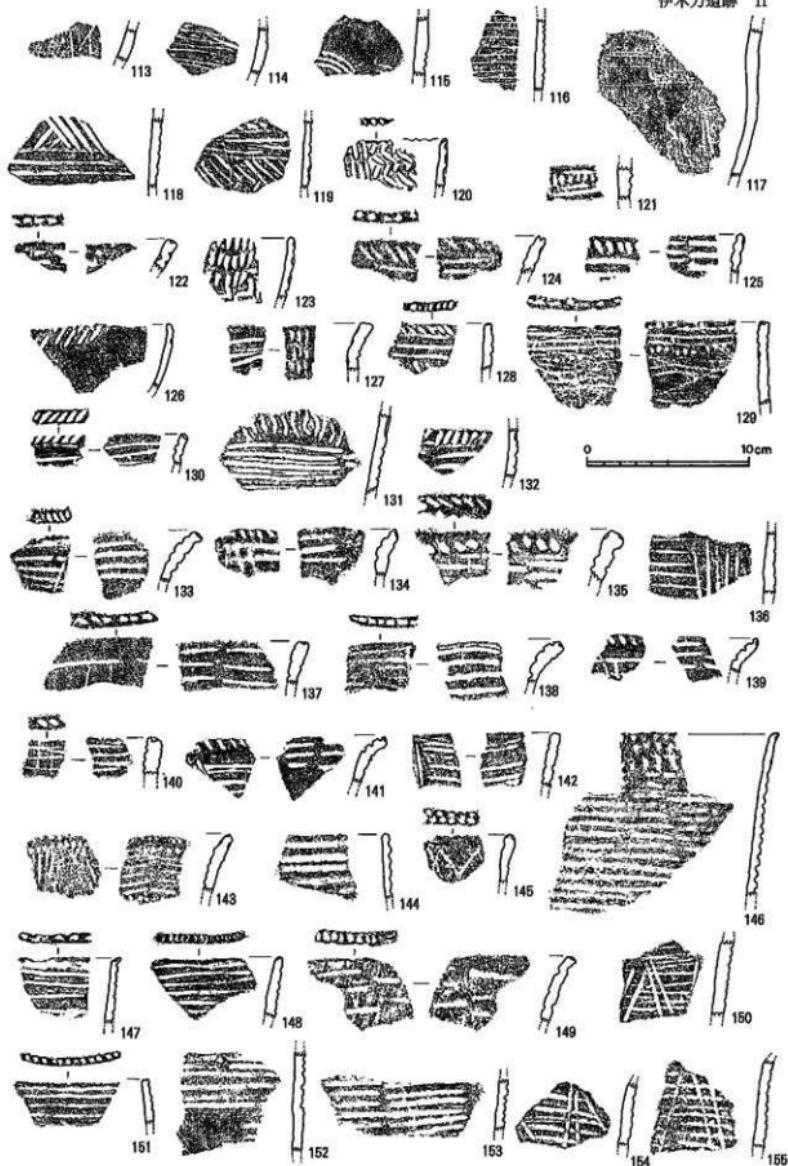
150・154・155は横位の沈線文が施された後に、口縁部付近に2本単位の山形文を施す一群である。

④第VIII群土器（第18図、156～162）

水ノ江編年による曾畠III式土器およびその系統の土器を一括した。第1類から第2類に細分される。

a 第1類（第18図、156～159）

文様が短沈線・刺突文・横位沈線文から構成されるものである。158と159は同一個体と考えられる。



第17図 第5層出土土器① (S = 1 / 3)



第18図 第5層出土土器② (S = 1/3)

156・157は長崎市深堀遺跡第VII群第3類土器に類例がある（報告書ではFig59の71・72）。

b 第2類（第18図、160～161）

胴部文様が斜位・縦位の沈線で構成されるものである。長崎市深堀遺跡第VII群第2類土器に類例がある（報告書ではFig57の37～41）。

c 第3類（第18図、162）

胴部文様が縦位の短沈線で構成されるものである。長崎市深堀遺跡第VII群第2類土器に類例がある（報告書ではFig57の25～27）。

(4) 第3層出土土器（第19図～第22図）

①第IX群土器（第19図、163～165）

並木式系土器を第IX群土器とした。図示できたのは1点のみである。口唇部に枝状突起をもち、突起頂部に刻目をもつ。口唇部にも2列の刺突文をもつ資料である。外面は押引文を施す。164と165は胎土などからこの群にいたが、細沈線を多用する資料である。165は凹線を施した後に細沈線を施したもので、押引文と細沈線文の違いはあるが並木式の範疇にいた。しかし類例には極めて乏しい資料である。164は凹線が明確ではないため、並木式とするには165以上に躊躇せざるをえない。胎土が165と同じ様な胎土であることや、口縁部の突起の形状などから本群にいたが、両者とも、継続的な検索が必要な土器である。いずれも胎土に滑石を含む。

②第X群土器（第19図、166～179）

阿高式系土器を一括して第X群とした。文様や施工技法などから第1類から第4類までに分類した。

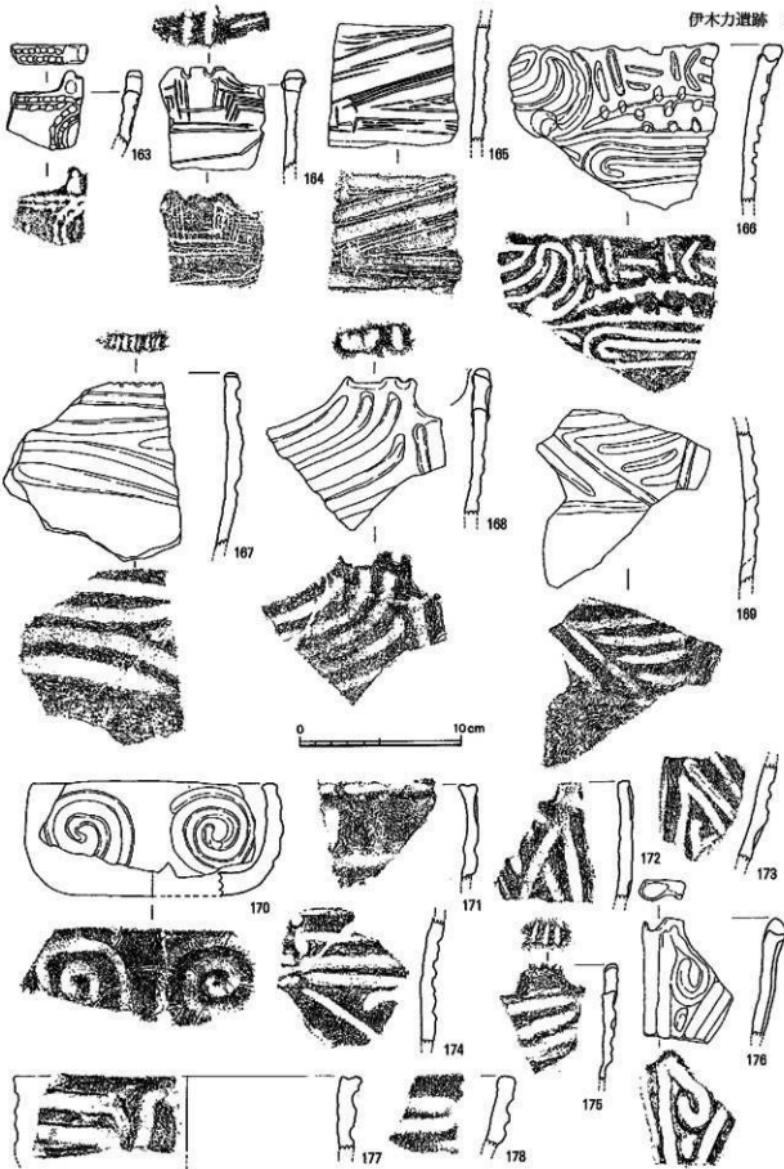
a 第1類（第19図、166）

166は整然とした入網文や凹点文・凹線文をもつものである。凹線は深く刻まれている。口唇部には凹点文を施すため口縁端は波状をなす。内面にはナデ消されず残った条痕がわずかにみられる。滑石を含み補修孔もある。

b 第2類（第19図、167）

凹線は幅広だが浅く、文様モチーフの中心は阿高式土器を特徴づける入組文ではなく、緩やかな曲線や流線が主体になるものである。口唇部には細かい刻目を施す。滑石を大量に含んでいる。

伊木力遺跡 II



第19図 第3層出土土器① (S = 1 / 3)

c 第3類 (第19図, 168~178)

凹線はb類に比べて幅が狭く、b類同様に浅い。文様は入組文や蕨手文・鉤状文などではなく単純な直線や曲線を主体とするものである。

d 第4類 (第20図, 179)

文様が口縁部に集約されるものである。179は口縁部と胴部の間に横位の沈線によって文様帯を作出し、凹点文や入組文を施したものである。

③第XI群土器 (第20図, 180~205)

坂の下系土器を一括して第XI群とし、第1類から第5類に分類した。

a 第1類 (第20図, 180~192)

口縁部に凹点文列を施した文様帯をもつ一群である。佐賀県西有田町坂の下遺跡における口縁部第1類土器 (180~191) と口縁部第2類土器 (192) に該当する。

b 第2類 (第20図, 193)

口縁部下に2本の沈線を施すものである。佐賀県西有田町坂の下遺跡における口縁部第8類土器に該当する。

c 第3類 (第20図, 194・195)

口唇部に凹点文を施し、口縁部外面には短い凹線を施すものである。佐賀県西有田町坂の下遺跡における口縁部第4類土器に該当する。

d 第4類 (第20図, 196~199)

浅い沈線を用いて多様な文様を施すものである。佐賀県西有田町坂の下遺跡における口縁部第5類土器に該当する。

e 第5類 (第20図, 200~205)

口唇部に凹点文を施すため、口縁部が波状になるものである。無文である。佐賀県西有田町坂の下遺跡における口縁部第9類土器に該当する。

④第XII群土器 (第21図, 210~212)

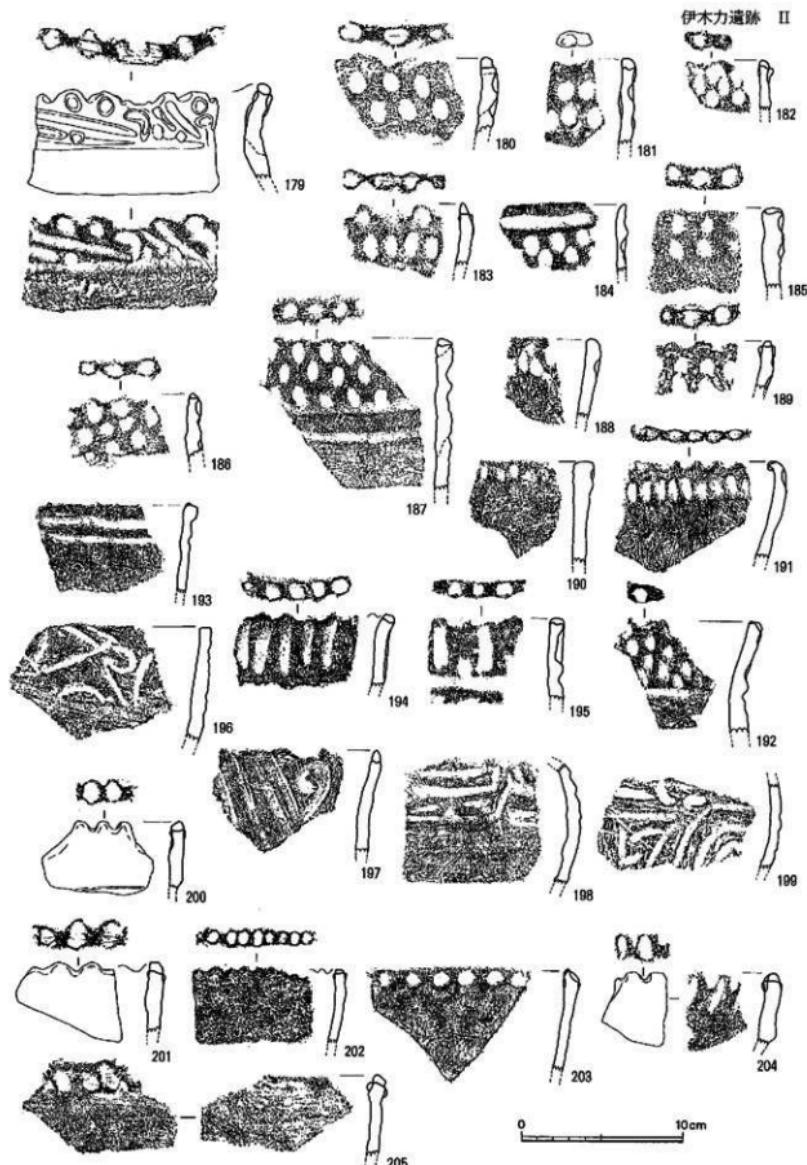
出水式系土器を一括して第XII群とした。いずれも口縁部に文様帯を作出し、斜行する細沈線を横に連続して施すことを指標とした。210は橋状把手の資料である。211は口縁部の肥厚によって、212は粘土の貼り付けによって文様帯を作出するものである。この三つの土器は色調に赤味が強く、210・212の胎土には結晶片岩がはいっている。

⑤第XIII群土器 (第21図, 208・209)

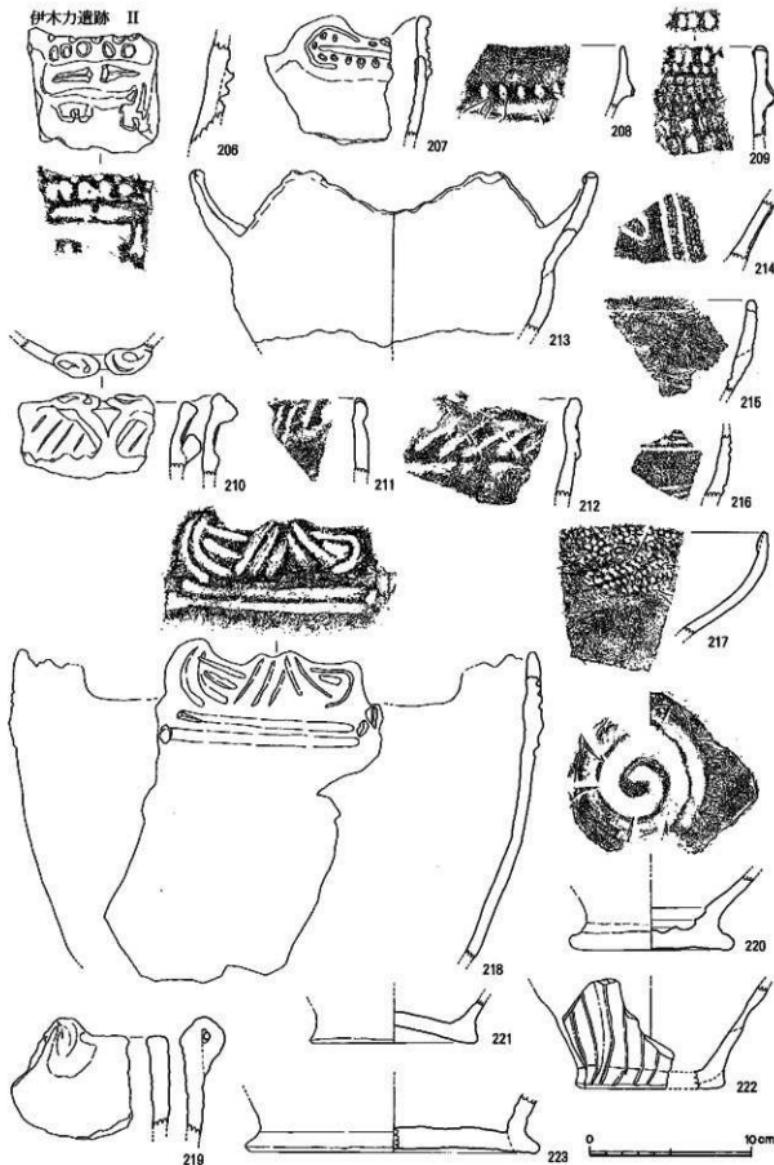
御手洗A式と認識した資料である。口縁部に一条の突帯をもち208は突带上に刺突文列を施し、209は突帶の上下にも刺突文を施している。208は滑石を含み、209は結晶片岩を含む。

⑥第XIV群土器

第3層より出土した土器のうち型式不明の土器群を一括する。後期阿高式系の土器を第1類とし、他の土器を第2類とした。



第20図 第3層出土土器② (S = 1 / 3)



第21図 第3層出土土器③ (S = 1 / 3)

## a 第1類 (第21図, 206・207・213・218)

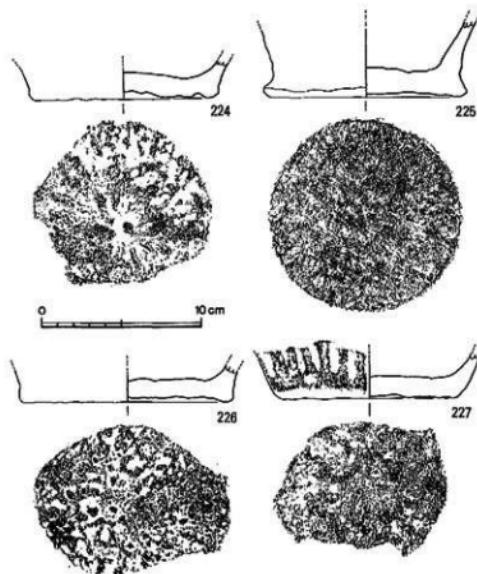
206は凹点文列を有し、その下に鋭い工具による短沈線さらにその下に太い隆帯を貼り付けるものである。胎土に滑石を含む。第2群土器（坂の下式系土器）に類似するが、異形の土器である。207は口縁部の突起片である。横位の沈線と弧状の沈線の間に刺突文を施す。213は無文の深鉢形土器の口縁部である。6個の山形突起をもつ上器に復元できる。滑石を大量に含み、内面には指頭による凹凸が残る。218は突起部分に、先端を鋭らせた工具で沈線文様を刻んでいる。突起の下部にはナデによる浅い沈線を2本施し、文様帶を作出している。下の2本の沈線の左右両端には刺突による窪みがある。

## b 第2類 (第21図, 214~217)

214と217は密な刺突文を施すものである。214は複数の沈線を施し、沈線間に細かく密な刺突文を充填する。底部に近い部分と思われるが、もしも文様となる刺突文が繩文であれば、福田K II式といえる資料である。胎土は淡黄褐色で滑石は含まない。217は口縁部内面に粘土を貼り付けることで肥厚させ、外側には細かく密な刺突文を施す。器形をキャリバー形とするには口縁部の開く角度が強い点に違和感をおぼれるが、復元できなかったものの、口径は大きいので、ここではキャリバー形としておく。215は無文の口縁部資料で、口縁部先端に粘土のつなぎ痕が残るものである。216は沈線のみの施文である。215・216ともに胎土・色調は214に類似している。

## ⑦底部 (第22図, 221~227)

第3層から出土した底部を一括した。221・223は上底のものである。220・222は平底である。220の内面は溝巻状に作り出されている。これは粘土の輪積痕ではなく装飾的な意匠である。222はヘラ状工具による深い沈線が施されており、坂の下式系土器の底部と思われる。224~227は底部に鯨の脊椎の圧痕が残るものである。225はナデによって、底部中央の圧痕は消されている。



第22図 第3層出土土器④ (S = 1/3)

表 2 土器觀察表



## 2. 石 器 (第23図～39図)

石器は石鏃・石斧・石匙・搔器・石核・楔形石器・ハンマーストーン・石皿・石錘等が多量に出土している。今回その多くを図化掲載したが、このほかにも網羅できなかった剝片石器類がある。石器の観察表では、黒曜石の石材については、大まかに3種類に分け、漆黒色黒曜石をA、灰青色黒曜石をBとして用いた。また、6層・5層・3層は基本的に土石流堆積物であり、一時期に納まる傾向にあるが、5層については、それぞれの上層部、下層部においては他の遺物を巻き込んでいる可能性があることを記しておく。

## (1) 6層出土の石器 (第23図～25図)

この層は、森B式土器の単純層である。土石流堆積物であるため、出土遺物を即全体の石器組成を反映するものとは考えにくい。ただし多量の石器が出土していることから、ある程度の傾向の予測はできるものと思われる。出土石器の器種としては、石鏃・石匙・石斧・楔形石器・ハンマーストーン・台石・石錘等で構成される。

## 石鏃 (第23図、1～23)

石鏃は23点図化した。比較的長身で、緻密な剝離を施したものと、基部が平基で厚みのあるものとが特徴的である。5・6のように側辺が大きな鋸歯状になるものが出土している。この石鏃については5層においても認められ、この手の石鏃が縄文前期ごろに位置付けられることが予想される。また厚みのある丸基、あるいは平基の石鏃はその重量や大きさにおいて他と異なる。特に23などは形態的には脚部を持ち、通常の石鏃と同様であるが、大きさ重量などは倍近い。機能的には鉈と考えたほうが無難であろう。石鉈は、つぐめの鼻遺跡で多量に出土しており、縄文早期後半から前期初頭に漁撈活動を生業とする集団が存在することが予想できる。本遺跡の資料についても前期前葉のものであり、引き続き石鉈を使用したものであろう。

## 石匙 (第24図、24～26)

5点出土している。すべて横型のもので、玄武岩、安山岩を素材としている。剝片は横長のものを使用しており、5層が縦型のものを共伴するのに対し、6層では縦型はみられなかった。

## 搔器 (第24図、27～29)

搔器類は多く出土しており、乳白色の安山岩が多用される。27などは、一つ一つの加工は粗く、急角度で刃部が作出されており、大きな鋸歯状を呈する。石匙の刃部とは異なることから、対象物の相違が考えられる。

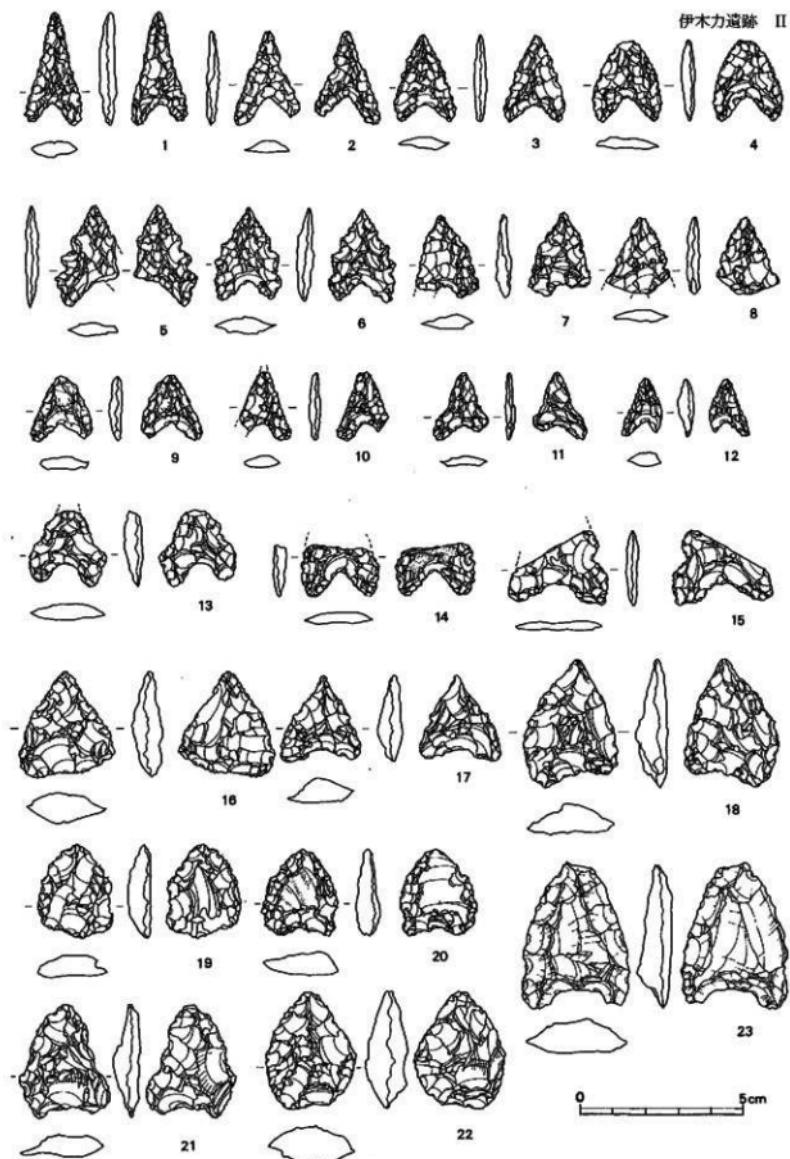
## 石槍 (第24図、32)

安山岩製で厚みがあり、基部は丸く作り出されている。漁撈用の石鉈との関連も考えなければならない資料であろう。

## 石核 (第24図、30・31)

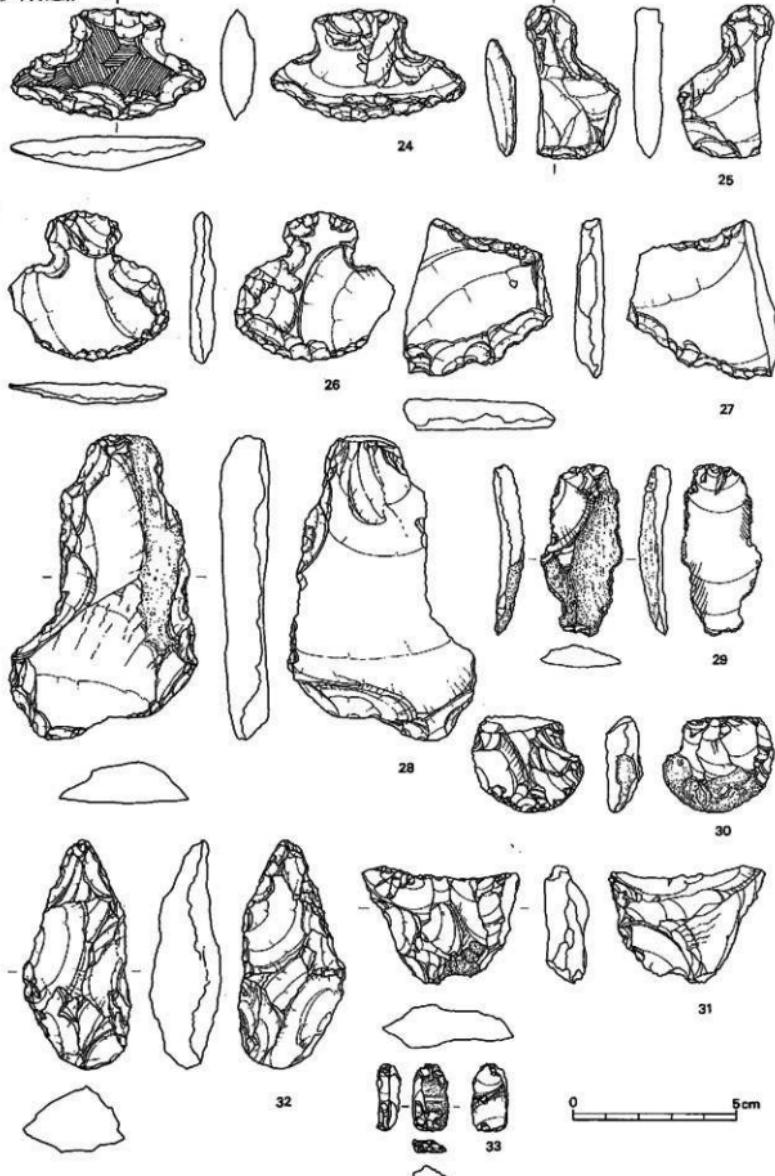
灰青色黒曜石を使用した石核が出土している。31については一回の正面からの打撃により单設打面を設定し、そこから前面に数条の剝離面を形成したものである。正面觀は逆三角形を呈し、5層出土

伊木力遺跡 II



第23図 6層出土の石器 (S = 2 / 3)

伊木力遺跡 II



第24図 6層出土の石器 (S = 2 / 3)

の92と同タイプのものである。5層に見られるような、多面体の石核の出土はない。

#### 楔形石器（第24図、33）

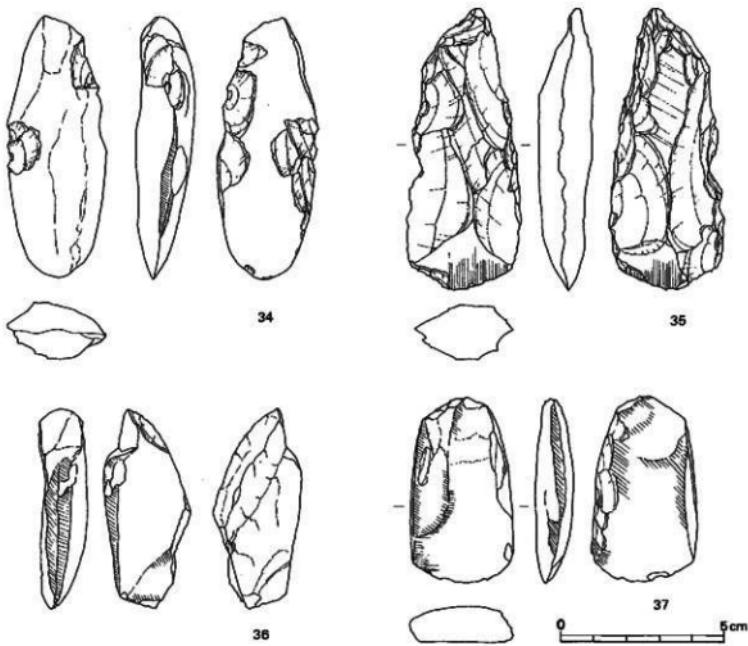
小形のものが2点出土している。漆黒色の黒曜石製で背面は自然面で覆われ、正面に上下からの剝離痕、側面にファシット状の剝離が観察される。

#### 石斧（第25図、34～37）

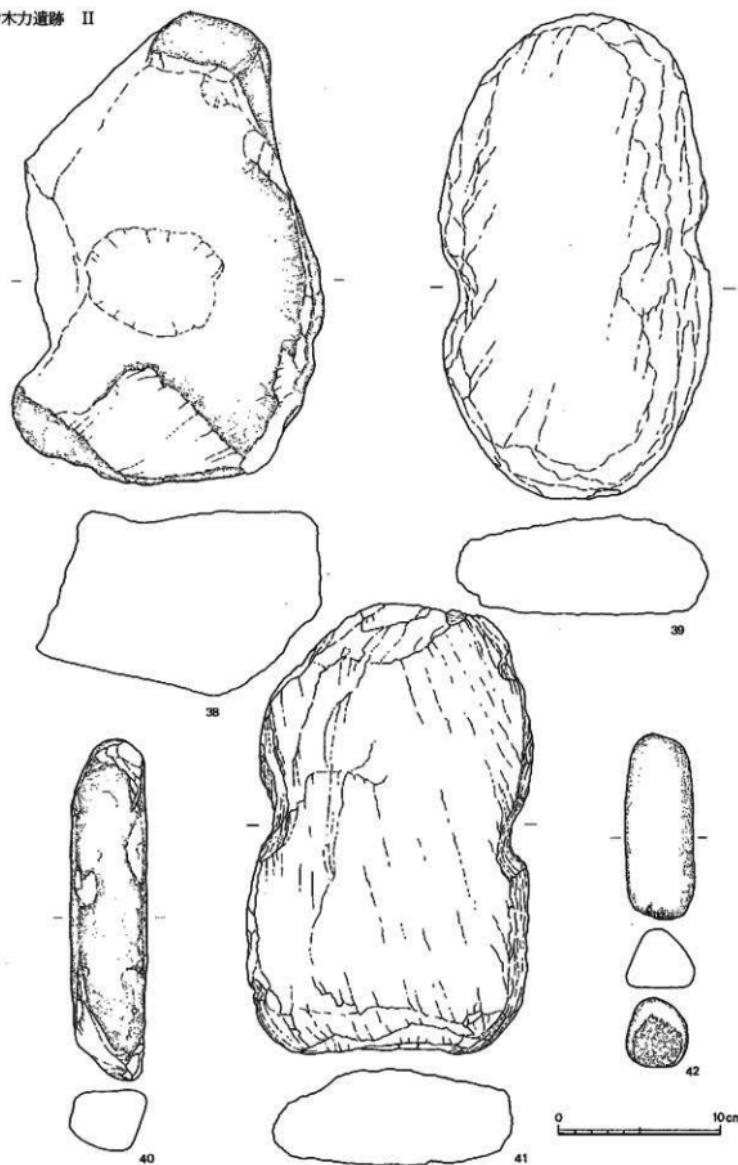
石斧は、6点出土した。すべて小形のものであり、ノミ状の機能をもつものと想われる。34については、ほぼ原形の長楕円形の礫の側面に数回の剝離を施し、側面と刃部の一部を磨く程度で終わっている。刃部は丸ノミ状を呈する。35は粗く周辺加工を施した後、刃部と腹部の一部のみを研磨している。37は完形であるが、全長5.6cmと非常に小形のものである。ほぼ全面を研磨し、片刃状を呈す。今回の調査では6層出土の石斧はすべて小形のものばかりで、石質も玄武岩・頁岩等を使用するなど、5層の在り方とは大きく相違する。

#### 台石・ハンマーストーン（第26図、38・40・42）

38・40は、6層下部でほぼ同一位置で検出されたものである。台石は中央部に径7cm程の窪み部を



第25図 6層出土の石器 (S = 2/3)



第26図 6層出土の石器 ( $S = 1/3$ )

もち、細かな敲打痕からなっている。一緒に検出されたハンマーは頁岩製で両端に、敲打による剝落痕が見られる。ドングリの加工に使用したものであろうか。42は両端が敲打等によって丸く潰れたもので、使川痕からみれば40のものとは使用方法が相違するようである。

#### 石錐（第26図、39・41）

超大型石錐と呼ばれる非常に大きく、重量がある石錐が出土している。図化した2点は結晶片岩製のもので、他に玄武岩製のものなどが出土している。

#### (2) 5層出土の石器（第27図～35図）

5層は曾畠式土器を含む層であるが、上部に後期初頭の土器も含む。この層も土石流の堆積物であり、生活址そのものというより原位置から流されたものとして理解する必要がある。

#### 石錐（第27図、43～63）

6層の石錐に比べ、やや小形になる傾向にある。形態的には6層のやや分厚い丸基の石錐状の大形石錐が5層では出土がないこと、5層の平基で三角形を呈する石錐が6層では出土がないことが挙げられる。また主要剝離面を一部残す石錐が出土することも5層の特徴であろう。

#### 石匙（第27・28図、64～71）

安山岩・玄武岩を素材とする。64～67は薄手の安山岩の剝片を素材としたもので、加工そのものも、周縁を加工するのみで素材面を多く残すことを特徴とする。65はつまみ部を三角形状に加工しており、つまみ部に特徴を持つ。68については磨製石斧等を再加工したもので、周縁に丁寧な2次加工を施し、つまみ部は斜軸である。69～71は縦型のものをあげた。69は横長剝片を素材とし、つまみ部は細く作り出している。70・71は安山岩のやや分厚い縦長剝片を素材としている。

#### 楔形石器・彫器（第29図、73～77）

薄みの小型の楔形石器が3点、やや厚みがあり正面観が方形状の彫器2点がある。彫器は上下の打面部も方形状であり、側面にファシットを数条いれている。刃部縁辺には細かな使用痕が観察できる。

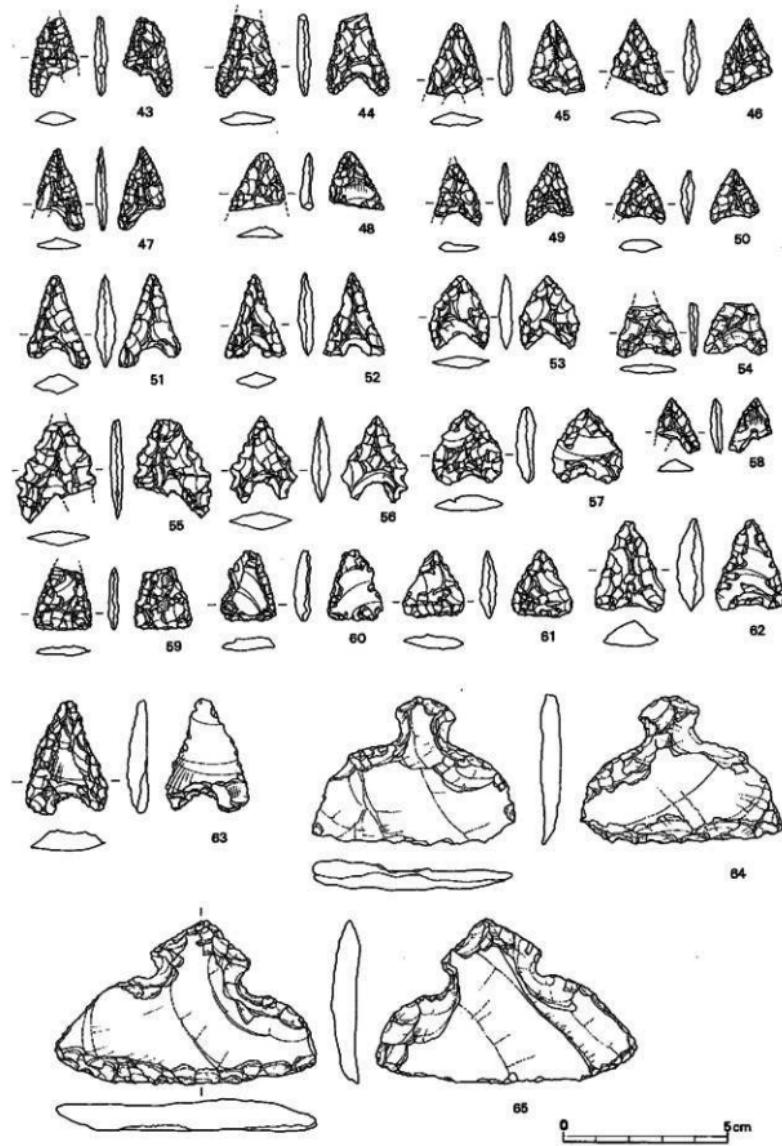
#### その他の石器（第29図・30図、72・78～86）

72は尖頭状に作り出したもので、断面が台形状を呈する。先端部に自然面を残しており、この部分には使用痕と思われる、磨滅した部分が見られる。このことから考えると錐状に回転して使用したものであろう。78・80は安山岩製の尖頭状礫器。中央に厚みのある剝片の一端を加工して尖頭部を作り出している。79・81は縦長剝片の末端を加工した石錐で、81は先端部に磨滅痕を観察することができる。82については整った縦長剝片を使用しており、素材の黒曜石も腰岳産と思われる良質のもので、剝離面の観察からも後期に発達する鉈桶型の石核から剝離された剝片の可能性が高い。このような剝片は、5層中では他に看取ることができない、また後期初頭を主体とする3層においてもこの手の剝片は少ない。83・86は安山岩製の摺器で5層では多量に出土している。

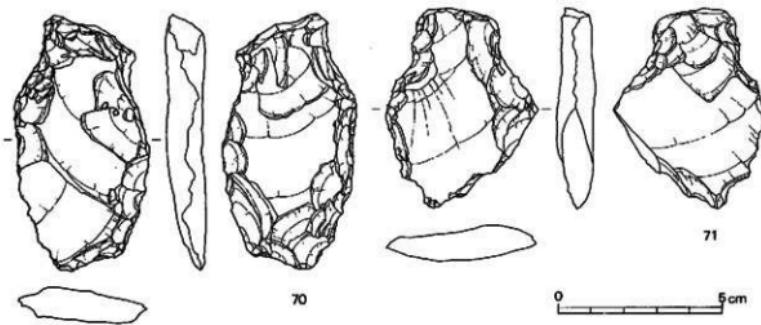
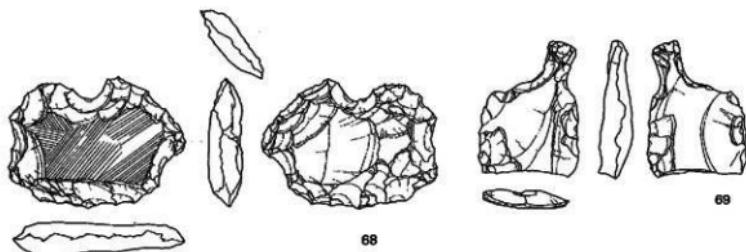
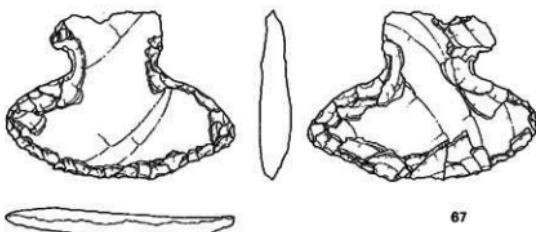
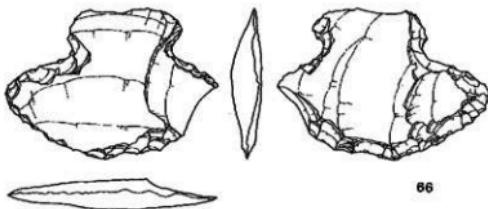
#### 石核（第31図、87～93）

小型の88～90の資料と中型のものとがあり、打面調整をおこなうものが多い。87は打面調整、側面調整をおこなった後に前面における剝片剝離をおこなうもので、背面にのみ自然面を残す。88は自然

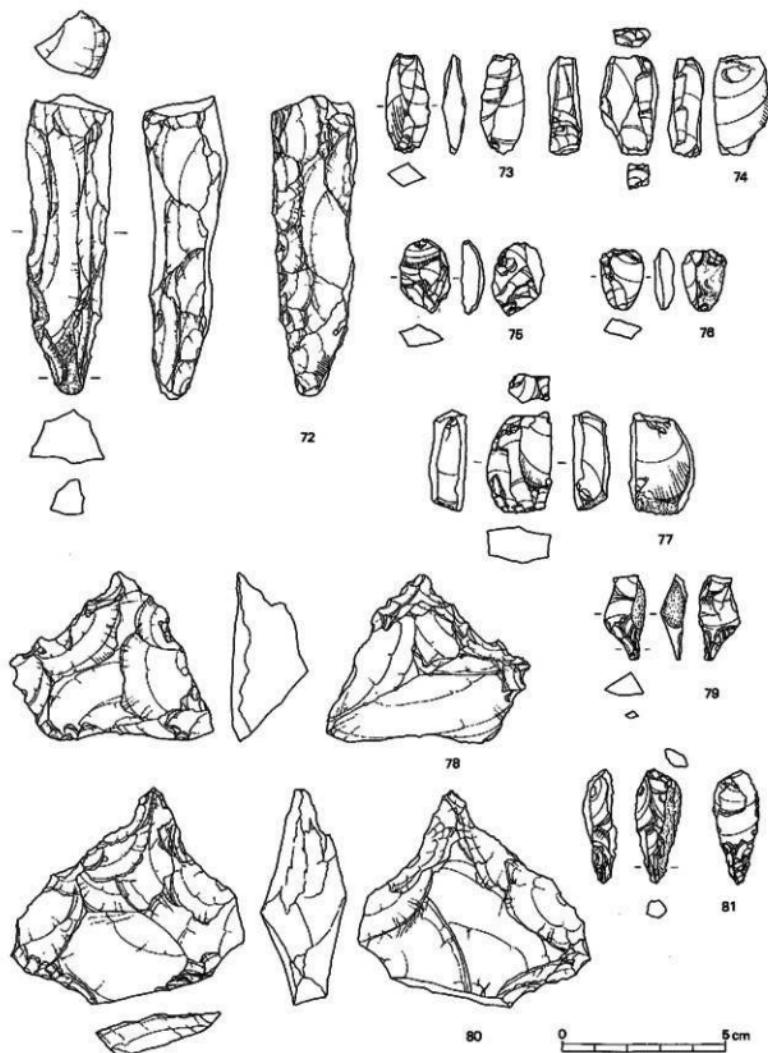
伊木力遺跡 II



第27図 5層出土の石器 ( $S = 2 / 3$ )



第28図 5層出土の石器 (S = 2 / 3)

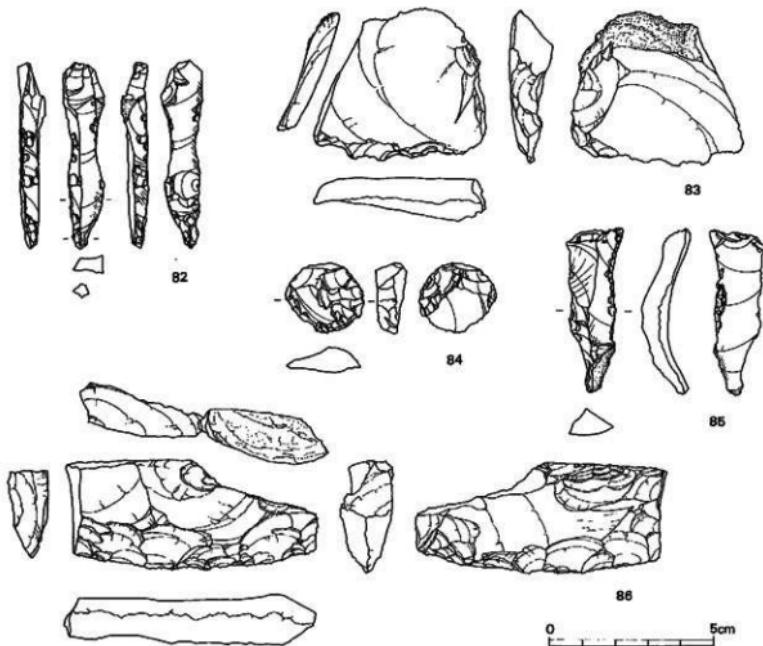


第28図 5層出土の石器 ( $S = 2/3$ )

面を打面として利用している。剝離作業面はほぼ三角形をしており、剝離面からは非常に小型の剥片を剝離したことが考えられる。このような小型の石核は89・90も同じであるが、89・90は一回の剝離によって打面を作出しており、背面にも自然面を残すことで88とは相違する。

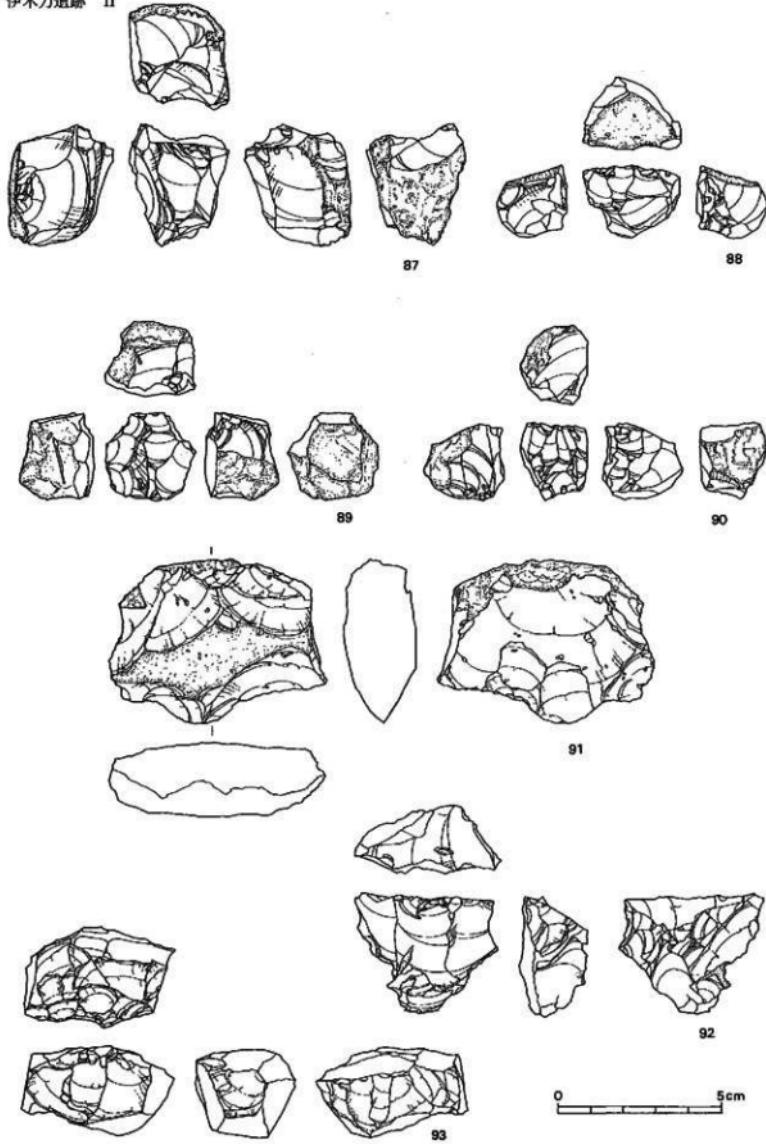
#### 石斧（第32図・33図、94～105）

蛇紋岩製の石斧8点、頁岩製2点、泥灰岩製1点、砂岩1点である。6層出土のものとは様相をこととし、大形の石斧がその主体となる。94は板状の蛇紋岩を素材とし、刃部が基部よりも広くちょうどシャモジ状を呈する。両面及び側面に丁寧な研磨を施すが、一部は素材面をのこす。刃部は両刃である。95は分厚い方柱状の石斧の基部で、器体中央より欠損する。96は円盤状の大形のものではほぼ全面研磨している。もとの形状はさらに大形であったと思われ、側面を再加工した形跡がある。98は片刃のもので、被熱している。同志社大学報告の石斧についてもV層出土の石斧に被熱したものが見受けられる。100は方柱状の石ノミ形の石斧で片刃のものである。101は大形のものであるが、刃先は片刃となる。裏側は平坦に仕上げられ、表面は緩いカーブを描き、鋭角に作り出されている。103は泥灰岩製で比較的軟質の石材を使用。表裏面ともに節理面を残し、両側面に粗い加工を施している。104と

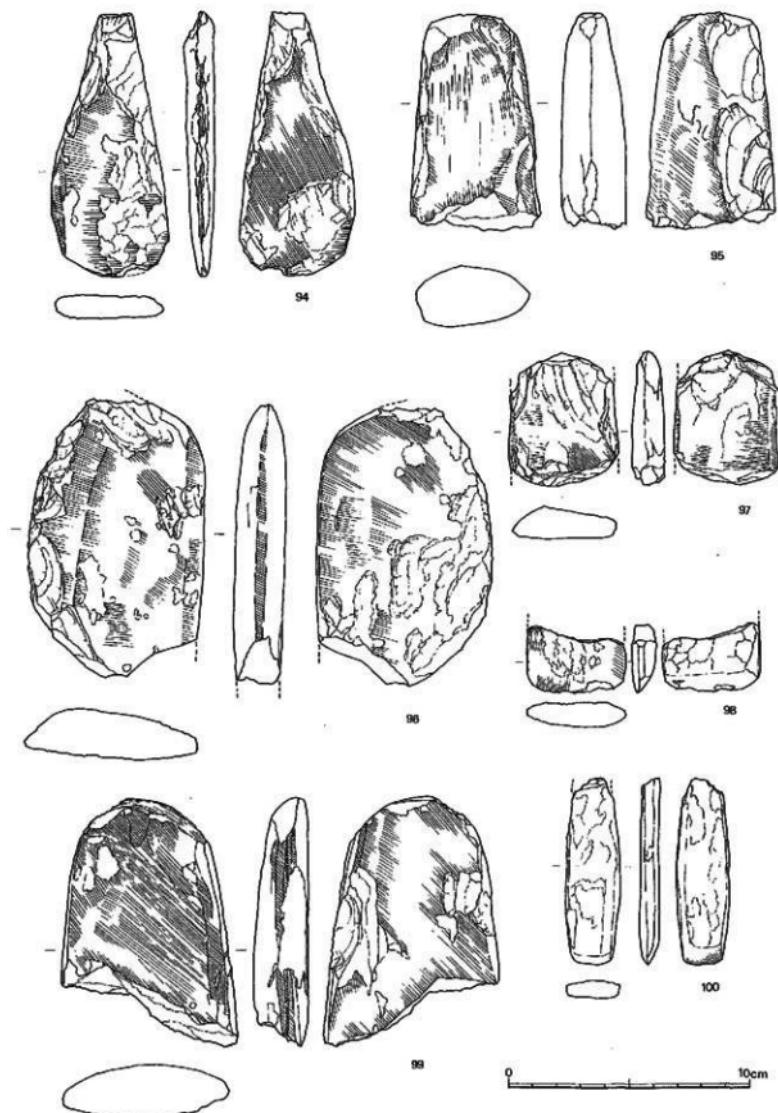


第30図 5層出土の石器 (S = 2 / 3)

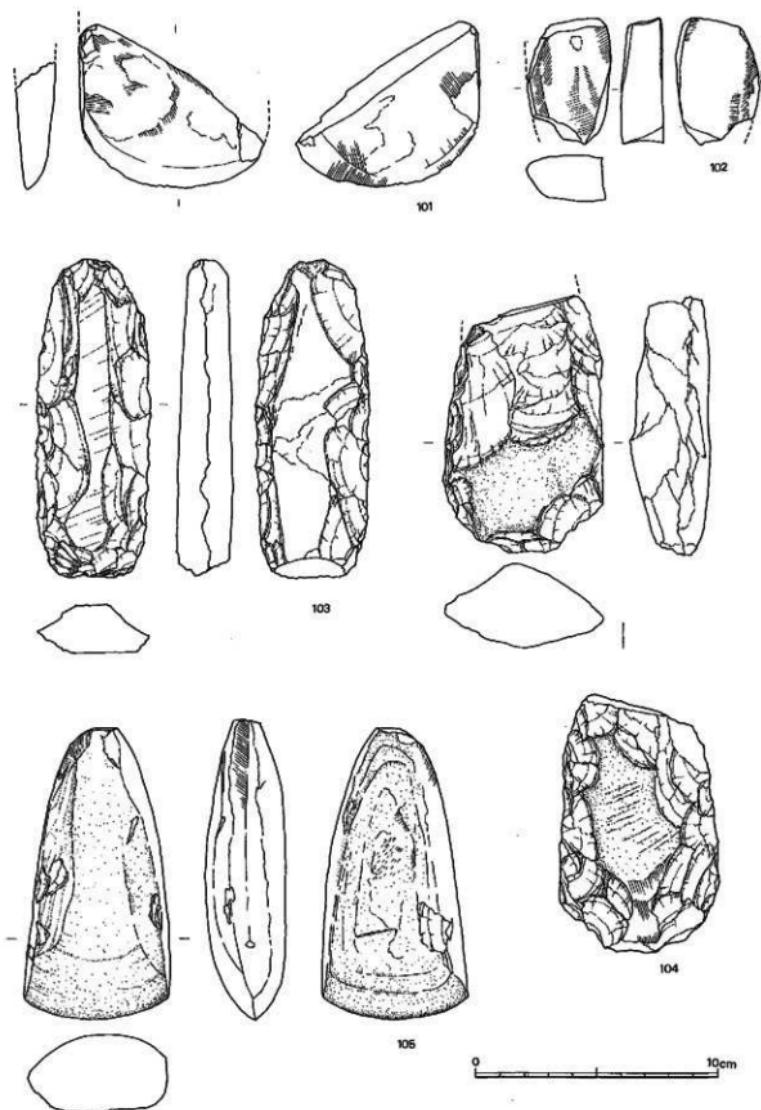
伊木力遺跡 II



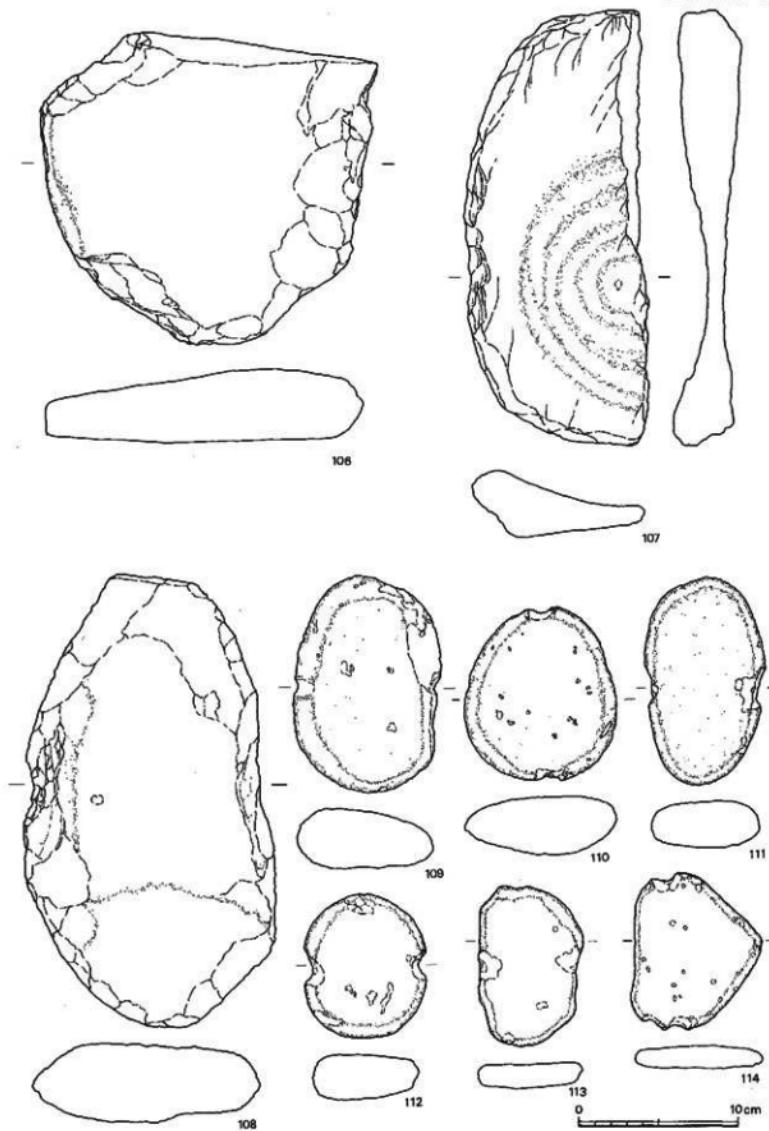
第31図 5層出土の石器 (S = 2 / 3)



第32図 5層出土の石器 ( $S = 1/2$ )



第33図 5層出土の石器 ( $S = 1/2$ )



第34図 5層出土の石器 (106~108 S = 1/4, 109~114 S = 1/3)

同様に未成品の可能性もある。105は頁岩製で短冊形で両刃である。全面を研磨しているが全体的に丸く仕上げてある。これら4、5層出土の石斧は、石材として蛇紋岩を多く使用する傾向にあり、大形の石斧と小形のノミ状石斧とのセットからなるのであろう。

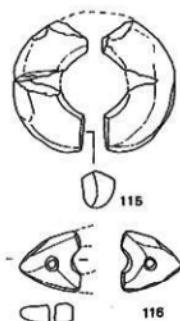
## 石皿（第34図、108～107）

結晶片岩製の大形のもので、中央部はかなり窪んでおり使い込んでいる。5層ではこの他に結晶片岩製のものがもう一点出土している。4、5層は曾根式土器の包含層であり、今回の調査では検出できなかったが、ドングリなどの植物加工との関連で捉えられる遺物だけに、6層を掘り込む貯蔵穴があつた可能性を示唆する遺物といえよう。

## 石錘（第34図、108～114）

超大型石錘と小型のものが出土している。超大型石錘は安山岩を素材としており、小型のものについては砂岩等を多用している。特に4、5層では他の層に比べ石錘が多いようである。

## 装飾品（第35図、115・116）



玦状耳飾りと大珠が1点づつ出土している。玦状耳飾は蛇紋岩製であるが、蛇紋岩の中でも軟質のもので、白っぽい。2点出土したが同一のものと判断できる。外径が約5.2cm、内径約2.1cm程のものと推定され、厚さがほぼ1.0cmを測る。内側と外側に研磨による稜線が看取される。玦状耳飾としては円形に近く、厚みがある。116は、もとは図の波線で示した様に大形の大珠であったと考えられるが、中央部で欠損したものと思われ、欠損部を研磨し中央に穴を穿って再生している。石材は硬質の蛇紋岩を使用している。

第35図 装飾品 (S = 2/3)

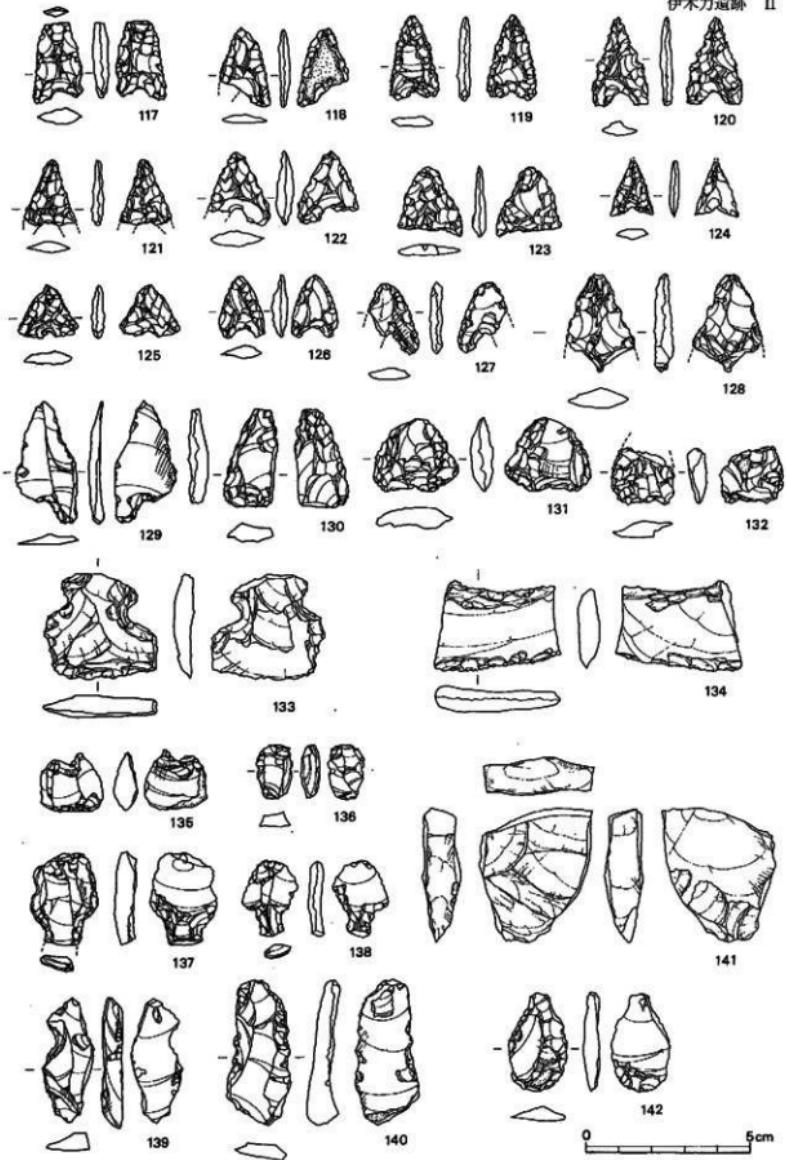
## (3) 3層出土の石器（第36図～39図）

3層も5・6層と同様に土石流の堆積物で、5・6層を切るように堆積している。土器は後期初頭のものを主体としている。

## 石鎌（第36図、117～132）

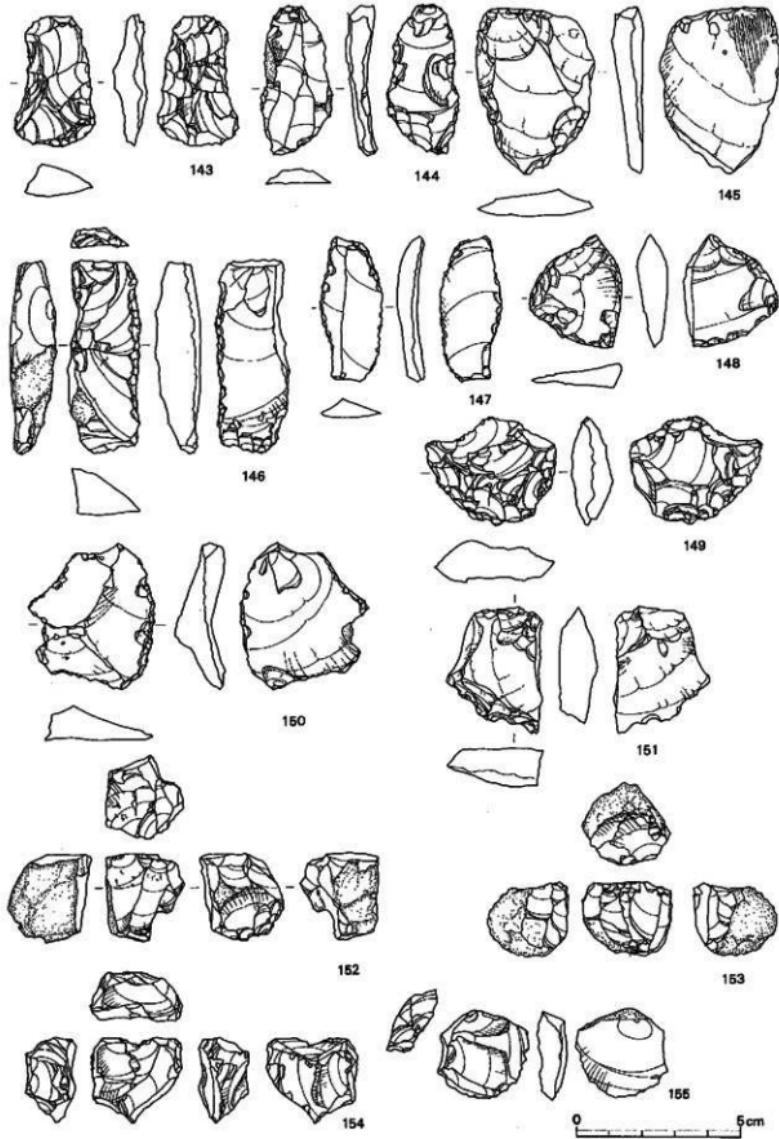
石鎌の出土点数は少なく、形態的にもさまざまである。五島の殿崎遺跡第二次調査区では南福寺式出水式土器を主体とするが、石鎌については大・中・小、あたかもセット関係があるかのように出土している。殿崎遺跡にみられるような石鎌も本遺跡ではみられないようである。このことは土石流によって流されてきた遺物に偏在性があったことが予想される。また剝片鎌が一点のみ出土しているが主体的なものかどうかはその時期的背景を考えると疑問の域をでない。

伊木力遺跡 II

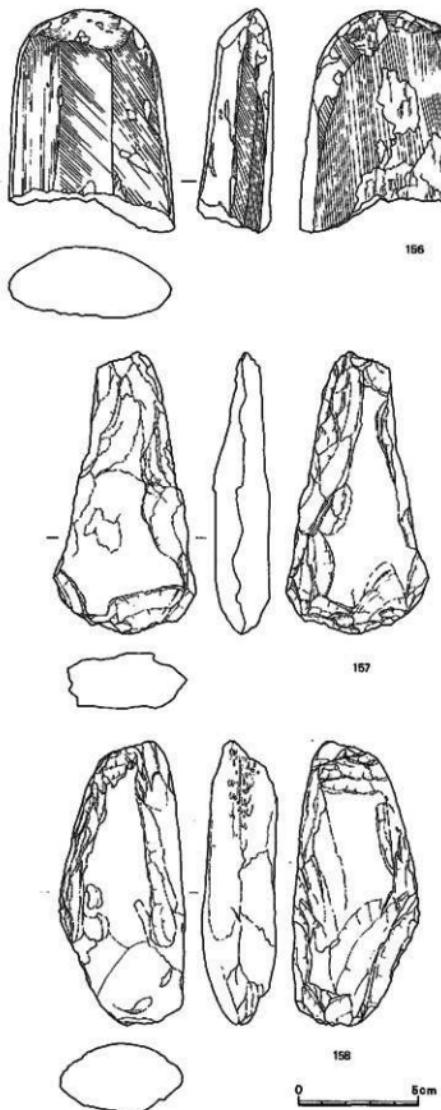


第36図 3層出土の石器 (S = 2 / 3)

伊木力遺跡 II



第37図 3層出土の石器 (S = 2 / 3)



第38図 3層出土の石器 (S = 1/2)

## 石匙 (第36図, 133・134)

2点出土している。133について  
は欠損品であり、明確ではないが、  
薄い横長剝片を素材としており6  
層、5層から出土のものより刃部  
と背の幅が小さい。この時期につ  
いては、石匙が少なくなる傾向に  
あるようだ。

## 楔形石器 (第36図, 135・136)

つまみ形石器 (第36図, 137・  
138)

つまみ形石器は、剝片鍛を作る  
過程で残されたものとして捉えら  
れ鍔崎・北久根式土器ころに発達  
するものとされる。3層は後期初  
頭に位置付けられることから、そ  
れ以降の時期のものが混在してい  
る可能性がある。

その他の石器 (第36図・37図,  
141~151)

削器・撃器が多量に出土してい  
る。139・139については剝片の側  
面に切断面があり、切断面のエッ  
ジに細かい使用痕が認められるこ  
とから彫器とした。139~148は剝  
片の側面に刃部を設ける撃器ある  
いは削器である。

## 石核 (第37図, 152~155)

打面調整を行った小形のものが  
主体を占める。背面に自然面があ  
り、打面調整は1~2回の剥離に  
よって構成される。155は打面再生  
剝片であろう。これらの石核は6  
層にも認められ、ある期間を通じ

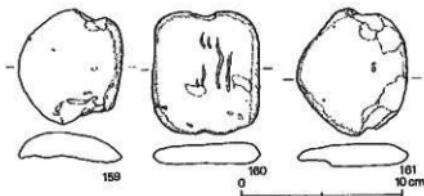
てこのような小形の石核が使用されたものであろう。

石斧（第38図、156～158）

3点とも素材は蛇紋岩である。156は厚みがあり研磨により刃が明確に作り出されている。5層出土の曾畠式土器に伴う一群のものと酷似する。157・158は蛇紋岩であるが白く渦りやや軟質のものを素材としている。表面の剥落も激しいことからも蛇紋岩の中でも4、5層の素材とは相違する。

石錐（第39図、159～161）

3点圓化した。すべて小型のもので超大型石錐は出土していないが、他の後期初頭の遺跡からは出土例が知られており、この時期の石器群が海洋的なものを多く含むとの相まって石錐もいろいろな形態のものが使用されているようである。



第39図 3層出土の石器（1/3）

【伊木力遺跡の6層から3層の石器について】

6層は轟B式土器を主体とする層、5層が曾畠式土器、3層が後期初頭の南禪寺式・出水式・坂の下式土器などが出土している。このことから各層位の石器群に変化が見られることが予想されたが、5・3層は上下の土器が若干混じることもあり、石器群の変遷を明確に捉えるまでは至らなかった。ただ個々の遺物については今後の検討を要するが、いくらか捉えることができるものとし、特徴的なものを表3にまとめてみた。これについて前回の同志社大学が調査した地区との比較の中で検討をしていくこととする。

石錐については6層～3層に大きな変化を捉えることは出来ないが、6層では大形の石錐が出土している。いわゆる鋸歯錐とは相違するが、大きなえぐりを持って鋸歯状に加工した石錐（第23図、5・6）が特徴的であり、5層出土のもの（第27図、55・56）とも併せて考えると縄文前期のに帰属する可能性を持つ。また6層出土の大形の石錐と思われる石器は、他の層では検出されていない。6層の石器説明のなかでも石錐として説明し、つぐめの鼻遺跡で早期後半から前期前葉に比定されている大形石錐が若干変容しながらも轟B式土器まで引き継がれる可能性が考えられる。同志社大学調査地点ではⅦ(a・b)層が轟B式土器の層位となっているが、石錐については2点の出土しかなくその他の石器についても少量の出土で、比較の対象にはならない。

石斧は6層では小形のノミ状の石斧のみで構成される。また、石材に蛇紋岩を使用しないことが5層と相違する。蛇紋岩の石材を使用した石斧は、長崎県では前期には確実に出現しており、轟B式土器に伴うことは十分考慮しなければならない。5層の曾畠式土器主体に伴う石斧は、大形の蛇紋岩製の石斧と小形のノミ状石斧がセットで出土する。このセット関係は佐賀県菜畠遺跡、前回の同志社大学の曾畠の単純層でも確認されており、曾畠式土器の時期における大きな特徴である。このことにつ

表3 伊木力遺跡層位別石器組成表

狩獵・漁労具 (石鏃・石槍)	工具 (石錐・形器)	伐採具 (石錐)	石核	その他 (石墨・合石・石盾、尖頭状石器・つまみ型石器)
▲▲▲	▲▲	▲▲	▲▲▲	▲▲▲
▲▲▲	▲▲	▲▲	▲▲▲	▲▲▲
▲▲▲	▲▲	▲▲	▲▲▲	▲▲▲
● ● ●				

いては本遺跡でも追認されたことになる。なお、小型のノミ状の石斧が前期、轟B式土器の時期から出土することについては、前回の調査では確認されておらず、すでにこの時期に出現することは一つの成果であろう。

石匙は6層から3層にかけて横形の石匙が出土しているが、縦形のものについては4、5層の曾畠式土器を主体とする時期からしか検出されていない。出土量については、5・6層では安定しているが、3層では貧弱なものしか出土がない。スクレイパー類については各層かなりの出土をみせるが、石匙については3層に希薄であることが言えよう。後述するが、後期初頭以後の石匙については、早期、前期より出土総数としては少なくなる傾向にある。このことは、堅果類採集の発達と、漁獵活動主体との差がそこにあると考えられる。堅果類採集に際して石匙の結びつきが強いと考えられないだろうか。

石鍬については、6～3層まで出土するが、同志社大学報告分と同様に、曾畠式土器に伴う石鍬については、大形のものが多量に出土する。今回の調査ではこの超大形石鍬の出土が轟B式土器の段階からすでに出現していることがわかった。

その他の石器として3層のつまみ形石器の出土については3層にのみ出土している。後述するが、この石器については剝片鐵との関連から、3層で主体である後期初頭以後に発達するものと考えられるが、後期初頭においてもすでに剝片鐵は出現することから矛盾はないであろう。楔形石器は5層で顯著であり、ドリル・石錐なども5層においてその数が多い。

石核は6層では中形の剝片を剥離する石核があるが、その他のものについては内容を把握することはできなかった。3・5層の石核は小形の石核で共通する。共に単設打面を形成し、背面に自然面を残す。このような石核については、同志社大学報告ではⅣ層曾畠式土器単純層から本遺跡と同様なサイコロ状の石核が出土しており、この時期の特徴を表している。

以上、3～6層の石器群についてその機能ごとにその変化を簡単に説明したが、それぞれの石器組成がそのままそれぞれの文化層を反映しているものとは考えにくい。ひとつには包含層が土石流堆積物で遺跡の中心ではないことを考慮しなければならない。石器組成については、まとめ再度項を起こしたい。

#### 参考文献

- 橋 昌信 1979 「石鍬」『史学論叢』10 別府大学史学研究会
- 正林 譲編 1986 「つぐめのはな遺跡」『長崎県埋蔵文化財調査集報』IX 長崎県文化財調査報告書 第82集 長崎県教育委員会
- 多良見町教育委員会・同志社大学考古学研究室編 1990 『伊木力遺跡』
- 渡邊康行 1992 一石器群の石材利川について—『弘法原遺跡』 長崎県香春町教育委員会

表4-① 石器計測表

No.	図版番号	層	長さ	幅	厚さ	重量	石材	No.	図版番号	層	長さ	幅	厚さ	重量	石材
1	第23図	6	3.4	1.7	0.5	1.4	a	59	第27図	5	1.9	1.8	0.2	1.0	a
2	〃	6	2.8	2.0	0.4	0.7	a	60	〃	5	2.1	1.6	0.4	1.5	a
3	〃	6	2.7	1.9	0.4	0.8	a	61	〃	5	2.1	1.8	0.5	1.3	a
4	〃	6	2.5	2.1	0.3	1.2	a	62	〃	5	2.8	2.1	0.8	3.7	a
5	〃	6	3.2	1.9	0.4	1.2	b	63	〃	5	3.5	2.5	0.5	3.9	a
6	〃	6	2.8	2.1	0.5	1.5	g	64	〃	5	4.5	6.2	0.8	19.4	c
7	〃	6	2.6	1.8	0.5	1.1	a	65	〃	5	5.0	8.0	1.0	30.5	c
8	〃	6	2.3	2.0	0.3	0.9	a	66	第28図	5	4.5	6.5	0.9	24.1	c
9	〃	6	2.0	1.8	0.4	0.7	d	67	〃	5	5.1	7.0	0.8	26.3	c
10	〃	6	2.1	1.6	0.4	0.4	b	68	〃	5	4.0	5.5	1.0	25.0	d
11	〃	6	2.1	1.7	0.3	0.7	b	69	〃	5	4.1	3.0	0.6	11.7	c
12	〃	6	1.8	1.2	0.5	0.4	a	70	〃	5	7.8	4.0	1.1	41.0	c
13	〃	6	2.4	2.4	0.5	1.6	b	71	〃	5	6.1	4.7	1.2	30.2	c
14	〃	6	1.5	2.4	0.4	0.8	b	72	第29図	5	9.3	2.6	1.6	61.7	c
15	〃	6	2.3	3.1	0.3	1.3	b	73	〃	5	3.1	1.3	0.6	2.0	a
16	〃	6	3.3	2.9	0.9	5.7	b	74	〃	5	3.0	1.8	1.0	6.2	a
17	〃	6	2.7	2.5	0.7	2.5	b	75	〃	5	2.2	1.6	0.6	2.0	a
18	〃	6	3.9	2.9	1.0	7.1	a	76	〃	5	1.9	1.3	0.6	1.4	a
19	〃	6	2.9	2.3	0.7	3.8	b	77	〃	5	2.6	2.0	1.1	9.1	b
20	〃	6	2.6	2.4	0.7	3.4	a	78	〃	5	5.2	6.3	2.3	47.1	c
21	〃	6	3.5	2.7	0.7	4.4	b	79	〃	5	2.6	1.3	0.7	1.6	b
22	〃	6	3.6	2.7	1.2	9.0	a	80	〃	5	6.7	7.2	2.6	74.5	c
23	〃	6	4.5	3.3	1.1	13.0	c	81	〃	5	3.5	1.4	0.9	3.5	b
24	第24図	6	3.4	5.9	1.0	17.6	c	82	第30図	5	5.7	1.3	0.5	4.6	a
25	〃	6	4.7	2.9	1.0	11.5	c	83	〃	5	5.3	4.7	1.3	27.5	c
26	〃	6	4.5	5.0	0.7	11.4	c	84	〃	5	2.2	2.3	1.0	4.3	a
27	〃	6	4.9	4.6	0.9	21.6	c	85	〃	5	5.0	1.7	0.8	4.8	a
28	〃	6	9.3	6.8	1.4	73.1	c	86	〃	5	3.3	7.7	1.5	40.2	c
29	〃	6	5.2	2.5	0.7	6.5	a	87	第31図	5	3.7	3.1	3.2	29.9	a
30	〃	6	2.9	3.4	1.2	8.6	b	88	〃	5	2.2	3.0	2.2	12.2	b
31	〃	6	3.6	4.8	0.9	38.4	b	89	〃	5	2.7	2.8	2.2	17.0	b
32	〃	6	7.0	3.3	2.0	17.9	c	90	〃	5	2.3	2.0	2.4	11.9	b
33	〃	6	2.0	1.1	0.5	1.2	a	91	〃	5	5.0	6.7	2.2	87.4	c
34	第25図	6	8.0	3.1	1.7	47.2	d	92	〃	5	3.6	4.4	2.1	22.7	a
35	〃	6	8.7	3.6	1.8	50.1	d	93	〃	5	2.9	4.8	3.0	41.1	c
36	〃	6	6.8	2.7	1.5	25.7	f	94	第32図	5	10.9	4.8	1.2	66.6	e
37	〃	6	5.6	3.1	1.0	28.4	d	95	〃	5	8.9	5.4	2.5	166.5	e
38	第26図	6	29.1	19.1	11.3	8360.0	d	96	〃	5	11.4	7.3	1.9	261.5	c
39	〃	6	29.9	16.7	6.1	4200.0	g	97	〃	5	5.5	4.5	1.4	45.9	e
40	〃	6	22.1	4.6	3.7	650.0	d	98	〃	5	2.7	4.1	1.0	12.7	d
41	〃	6	27.7	17.2	5.9	3960.0	g	99	〃	5	10.2	7.3	2.2	196.4	e
42	〃	6	11.4	4.1	3.6	290.0	f	100	〃	5	7.7	2.3	0.9	18.9	e
43	第27図	5	2.4	1.5	0.4	0.9	b	101	第33図	5	6.8	7.6	1.7	77.0	e
44	〃	5	2.5	1.9	0.4	1.4	b	102	〃	5	5.2	3.5	1.9	55.0	d
45	〃	5	2.2	1.7	0.4	1.1	b	103	〃	5	13.1	4.7	2.0	201.1	d
46	〃	5	2.3	1.7	0.4	1.0	a	104	〃	5	10.5	6.6	3.3	288.0	d
47	〃	5	2.4	1.5	0.3	0.7	a	105	〃	5	11.9	6.0	3.1	321.5	f
48	〃	5	1.8	1.6	0.3	0.7	a	106	第34図	5	25.9	27.8	6.1	6220.0	c
49	〃	5	2.9	1.4	0.3	0.5	b	107	〃	5	36.1	15.2	5.5	4480.0	g
50	〃	5	1.6	1.5	0.3	0.6	a	108	〃	5	28.0	15.5	4.9	3230.0	d
51	〃	5	2.8	1.9	0.6	1.5	b	109	〃	5	13.4	9.1	3.7	531.0	d
52	〃	5	2.5	1.8	0.4	1.2	b	110	〃	5	10.7	9.4	3.6	462.0	d
53	〃	5	2.3	1.8	0.3	1.2	b	111	〃	5	12.8	7.4	2.9	350.0	d
54	〃	5	1.5	1.8	0.3	0.6	c	112	〃	5	8.9	7.5	2.8	238.0	d
55	〃	5	3.1	2.5	0.4	1.9	a	113	〃	5	9.8	6.5	1.6	146.0	d
56	〃	5	2.7	2.1	0.5	1.6	b	114	〃	5	9.7	8.1	1.4	144.0	c
57	〃	5	2.3	2.1	0.4	2.2	a	115	第35図	5	4.1	2.2	1.1	11.9	e
58	〃	5	1.7	1.3	0.4	0.5	a	116	〃	5	1.9	1.8	0.6	2.8	e

表4-② 石器計測表

No.	図版番号	幅	長さ	厚さ	重量	石材	No.	図版番号	幅	長さ	厚さ	重量	石材		
117	第36図	3	2.4	1.5	0.5	b	139	第36図	3	3.8	1.6	0.7	3.8	a	
118	〃	3	2.4	1.6	0.3	1.0	140	〃	3	4.4	1.9	0.9	5.3	a	
119	〃	3	2.6	1.5	0.3	1.2	b	141	〃	3	4.1	3.5	1.2	23.4	c
120	〃	3	2.7	1.7	0.4	1.3	b	142	〃	3	3.0	1.7	0.4	2.5	b
121	〃	3	2.0	1.6	0.3	1.0	a	143	第37図	3	4.0	2.4	1.0	8.3	a
122	〃	3	2.2	1.9	0.5	1.2	b	144	〃	3	4.5	2.2	0.6	6.2	a
123	〃	3	2.1	2.0	0.3	1.0	a	145	〃	3	5.1	3.7	1.0	16.5	c
124	〃	3	1.7	1.3	0.2	0.4	b	146	〃	3	5.9	2.2	1.4	16.9	b
125	〃	3	1.8	1.6	0.4	0.8	b	147	〃	3	4.5	1.9	0.6	4.3	b
126	〃	3	1.9	1.4	0.3	0.8	b	148	〃	3	3.4	2.8	0.7	7.7	c
127	〃	3	2.2	1.6	0.3	0.8	a	149	〃	3	3.3	4.1	1.2	13.6	b
128	〃	3	3.0	2.1	0.6	2.5	a	150	〃	3	4.5	3.8	1.1	—	c
129	〃	3	3.8	1.9	0.3	1.9	a	151	〃	3	3.9	3.0	1.2	13.7	c
130	〃	3	3.0	1.6	0.5	2.9	b	152	〃	3	2.7	2.3	2.5	14.6	a
131	〃	3	2.3	2.6	0.6	3.5	b	153	〃	3	2.2	2.8	2.5	16.7	b
132	〃	3	1.6	1.9	0.5	1.8	b	154	〃	3	2.6	2.7	2.5	9.1	a
133	〃	3	3.2	3.5	0.7	7.6	c	155	〃	3	2.7	2.8	0.9	6.6	b
134	〃	3	2.8	3.8	0.8	8.0	c	156	第38図	3	9.2	6.9	2.9	196.5	e
135	〃	3	1.8	1.9	0.8	1.9	a	157	〃	3	11.7	5.9	2.3	157.7	e
136	〃	3	1.6	1.1	0.4	1.0	a	158	〃	3	11.8	5.2	2.9	218.6	e
137	〃	3	2.8	2.0	0.6	3.6	a	159	第39図	3	7.0	6.3	1.9	103.7	f
138	〃	3	2.3	1.8	0.4	1.3	a	160	〃	3	7.5	6.6	1.3	93.0	d
		3						161	〃	3	7.8	6.8	1.4	92.7	d

※石材については、a漆黒色墨暈石(腰岳産?)・b灰青色墨暈石(針尾島産?)・c安山岩・d頁岩・e蛇紋岩

〔砂岩・g結晶片岩〕

※長幅表については、図面の上下を長さとし、左右を幅として記載した。

## VI. まとめ

伊木力遺跡の調査は、大きく同志社大学の調査と今回報告分の地点に分けることができる。遺跡そのものは、同志社大学調査地点から今回調査地点までと、それより南側にまで広がる可能性があり、特に縄文前期の遺跡としては大規模なものであることが理解できた。また縄文前期轟B式土器から連続と遺跡が営まれていたことが理解できる。そのなかでも縄文前期轟B式土器の主体は今回報告分の調査地点、曾煙式土器については同志社大学調査地点まで広がりをもつようであるが、後期については初頭の阿高式系の土器については曾煙式土器と同様、広い範囲に分布するようであるが、それ以降については今回の調査地点では出土がなく、同志社大学調査地点でかなりの資料が検出されている。また弥生、土師器の出土はやや高台に占拠するなど時期によって生活の場が移動していることが明らかとなった。大村湾を望む縄文時代の遺跡のなかで、これほど大規模な遺跡は他に例がなく、外海に面した長崎県のなかでも遺跡の立地環境上、他の遺跡との比較検討が今後の重要な課題となる。

以下、土器・石器について今回調査した遺物について若干の考察をおこなうこととする。

### 1. 土器について

#### ① 伊木力遺跡出土の轟B式土器について

##### (1) はじめに

伊木力遺跡出土の轟B式土器を総括するにあたっては、最近進んでいる轟B式土器の研究成果に照らしながら、とくに型式分類を中心におこないたい。

近年の轟B式土器の研究には、山口信義（山口1987）・高橋信武（高橋1989）・宮本一夫（宮本1990）による熊本県宇土市轟貝塚出土資料を再検討したうえでの研究と、それらを踏まえた李相均による研究がある（李相均1994）。これらの一連の研究によって轟B式土器の分類や編年・系譜などといった問題が徐々に明らかにされてきている。<sup>(注1)</sup>

なお、今回の伊木力遺跡出土の轟B式土器は「単純な深鉢形」が主体で、「扁曲型」「胴張り型」の出土は極めて少なかったので、前者を中心に整理し、総括をしたい。また、近年問題となっているアカホヤ火山灰下の轟式系土器についても出土資料がないため検討しない。

##### (2) 轟B式土器の型式分類

「単純な深鉢形」の轟B式土器の型式学的研究成果を列記すると以下のようになろう。<sup>(注2)</sup>

(ア) ミミズバレ状隆帯から浦鉢型隆帯へと変化する。(田島・宮本)

(イ) 口唇部に刻目があるものから口唇部に刻目がないものへと変化する。(宮本)

(ウ) 隆帯の数が多いものから少ないものへと変化する。(李相均)

(エ) ミミズバレ状隆起帯からくっきりとした隆起帯へ変化する。(李相均)

(オ) 貝殻条痕の程度が強いものから弱いものへと変化する。(李相均)

以上のような型式変化の指標を参考として、今回の調査によって出土した轟B式土器を出土遺物の

項で記したことく4類に分類した。第1類は隆帯の断面が三角形でナデ調整が少ないため、断面三角形の隆帯の稜が鋭く、隆帯の高さも高いもの。第2類は第1類にくらべてナデ調整を多用するもので断面三角形の隆帯の頂部の鋭さが失われ、隆帯自体の高さも低く、隆帯の数も減るもの。第3類は貼付隆帯が蒲鉾型のもので隆帯に凹凸があり、部分的に隆帯が切れるなどするもの。第4類は貼付隆帯がミミズバレ状のものではなく、すっきりとした隆帯で隆帯の数もさらに少くなり、器壁はきわめて薄くなるものである。

この4つの型式がどのような前後関係をもつかということであるが、第1類と第2類が時間差であるのか、同時期の技法差であるかという点については、検証が不十分で前後関係を明らかにしえない。したがって、ここでは先の研究成果を援用して一応、第1類・第2類→第3類→第4類へと変化するのではないかという見通しを示しておきたい。

#### (3) 長崎県出土の轟B式土器

本県で「単純な深鉢形」の轟B式土器の資料がまとまって出土し、報告された遺跡はきわめて少ない。近年、轟B式土器は福江市堂崎遺跡（福江市教委1992）・南松浦郡有川町頭ヶ島白浜遺跡（有川町教委1996）でかなり知られるようになったが、これらの遺跡から出土する轟B式土器は「屈曲型」や「胴張り型」が主体である。したがって本遺跡のように「単純な深鉢形」の轟B式土器を主体とした遺跡は本県でも貴重な遺跡といえよう。

#### (4) ドングリ貯蔵穴より出土した轟B式土器

先述したように伊木力遺跡の轟B式土器は「単純な深鉢形」が多数を占め、「屈曲型」はわずかであり、「単純な深鉢形」のなかでも、いわゆるミミズバレ状隆起帯を施す資料がほとんどで、層位的な裏付けはないものの型式学的に第1類土器・第2類土器→第3類土器→第4類土器という変遷を予察した。このうちドングリ貯蔵穴出土の轟B式土器は若干の第2類土器と第3類土器を含みながらも、第3類土器を主体とする。このため今回出土したドングリ貯蔵穴の盛期が第3類土器の段階にあったとすることができよう。

#### (5) その他の

今回出土した轟B式土器には炭化物が付着した資料が多くみられた。なかには器壁と同程度の厚さをもつ炭化物が付着した資料もある。旺盛な煮沸活動が行われていたことがうかがわれる資料である。

また、先行する同志社大学の調査成果に比較して轟B式系土器の出土量が格段に多いことは注目される。轟B式土器段階の居住適地として、同志社大学が調査した地点より今回の調査地点がより適していたのであろう。この理由については、縄文前期海進の問題も含めた考古地理学的な検討が必要であろう。

#### ② 伊木力遺跡出土の曾畠式土器について

伊木力遺跡出土の曾畠式土器については先の同志社大学の調査において水ノ江和同が氏の編年観に基づき報告している。水ノ江は曾畠式土器の文様割付と文様充填の手法の変化を時間軸とし、充填施文の変化と様式を空間軸として曾畠式土器の編年を組み立てた。今回の報告にあたっては水ノ江編年

に依拠すべく出土資料を検討した。しかし氏の編年を十分に理解しないままに作業し、そのため氏の成果を十分反映しきれていないのではないかと危惧する。

今回出土した曾畠式土器は同志社大学調査地の出土量に比較すると少ないが、水ノ江編年の曾畠I式からIII式までが出土した。I式にあっては直線による文様区画→充填施文を忠実におこなう曾畠I式古段階の資料はなく、いずれも新段階のものと判断した。曾畠II式の段階では、口縁部の資料を見る限り、口縁部の「刺突文様帯を消失した」曾畠II式新段階の資料が若干多く出土しているようである。

#### ③ 伊木力遺跡出土の並木式・阿高式系土器について

並木式・阿高式土器は九州を代表する縄文土器としてつとに知られているが、その実態は不明な部分が多く、近年は編年的位置についても再検討の動きがある。伊木力遺跡では先行する同志社大学の調査報告において川崎保が、先行研究である田中良之の研究を検討しつつ自らの編年観を提示しているが、発掘調査では中期阿高式土器の出土はなかったようで、報告がない。本県における中期阿高式土器の出土量の稀少さがここでも窺われる。

今回の調査でも並木式・阿高式系土器の資料は少なかった。しかし第19図164・165のように、押引文を細沈線で代用したような並木式系の土器が出土していて注目される。

またひと目で阿高式土器とわかる資料がある反面、第19図167のように浅く、横に流れる凹線が主体で阿高式土器に特徴的な入組文をもたず、胎土も先行する並木式土器に近いものも見られ、阿高式とするには違和感をおぼえる資料も出土している。これらの資料は本県の並木式・阿高式系の土器については在地的な多様性があるのではないかという印象を強く与える。

また、中期の阿高式土器の出土は少ないが、後期阿高式系土器である坂の下式土器の出土が多い。これも本県の中期・後期遺跡出土土器の傾向と同じといえよう。

#### ④ 伊木力遺跡出土の瀬戸内系・南九州系土器について

今回の調査では地文に縄文を施した土器は確認できなかった。同志社大学の調査では量的には少ないものの、縄文を施す資料が出土しており、船元式土器およびその系統の土器と位置づけられ、第6群として報告されている。

長崎県の近年の調査でも南高来郡国見町百花台遺跡、南松浦郡有川町頭ヶ島白浜遺跡・同郡富江町宮下遺跡<sup>(4)</sup>で瀬戸内系土器がまとまって出土しているので、意外な感がある。しかしながら今回、第IV群土器として報告した第21図214・217の資料は器形や施文方法・胎土など、阿高式系土器とは明らかに異なる資料である。かといって縄文を刺突文で代用している感があり、瀬戸内系土器とも異なる、きわめて在地的な土器といえる。いずれにせよ本県の縄文中期から後期初頭の土器については、もう一度再検討する必要があると考えている。

#### 追記

伊木力遺跡出土土器の報告にあたっては渡邊康行氏の助力があった。記して感謝する。

## 【註】

註1 山口信義は「単純な底すぼまり」の土器をI類とII類に分類した。高橋信武は轟式土器を1式から5式に分類し、アカホヤ降灰層より上層から出土する「単純深鉢型」の轟B式土器を轟3式・4式・5式とした。3式は「隆起線」がミミズバレ状になるもの、4式は「隆起線」が指によって上下をナデつけるためにミミズバレ状をなすことではなく、5式の段階には野口・阿多タイプの沈線文系土器が出現するという。

宮本一夫は「単純な深鉢形」をI類として分類し、田島龍太が佐賀県唐津市菜畠遺跡の層位を根据に指摘した、隆帯の断面形が三角形のものが古く、蒲鉾状に突出するものが新しい様相を示すとした見解を支持した。口唇部の刻目の有無については「縄年学的には明確ではない」としながら、「隆帯の退化傾向の中にあっては、口唇刻みを施す土器は消失している」ことを根据に口唇部の刻目の有無から無への変化を「相対的にある程度想定してよいであろう」とした。

李相均は「単純な深鉢形」で隆起帯を横方向に貼り付けるものをA類とし、「ミミズバレ状の隆起帯を横方向に多条巡らす」ものをA1類とし、A1類と似るが、文様構成が多様となるA2a類、砲弾型器形に近いA2b類とに分類した。さらに「器面調整において貝殻による条痕の程度」が強いものから弱まるものへ変化すること、またミミズバレ状隆起帯が多条→5条になり、そしてミミズバレ状隆起帯が消滅し、「くっきりとした隆起帯が現れる」としA3aとA3bを設定した。さらに器形は明確ではないが縦隆起帯からなる一群を設定し、B類とした。李相均のA類は宮本のI類に相当し、器面調整において貝殻による条痕の程度が強いものから弱いものへ、ミミズバレ状隆起帯の多条のものから5条以内のものへ、さらにミミズバレ状隆起帯からくっきりとした隆起帯への変化を型式変化の指標としている。

註2 ただし、今回の調査では轟B式土器の器形について十分に検討できる資料にめぐまれなかつたため、土器の成形技法の変遷ということを唯一の分類の指標とせざるをえなかつた。

註3 現在、長崎県教育委員会において整理中で、近日報告書刊行予定である。

## 【引用・参考文献】

- 有川町教育委員会1996『頭ヶ島白浜遺跡』有川町文化財調査報告書第1集 長崎県有川町教育委員会
- 安楽勉・町田利幸1992『福江・堂崎遺跡』福江市文化財調査報告書第5集 福江市教育委員会
- 李相均1994『繩文前期前半期における轟B式土器群の様相』『東京大学文学部考古学研究紀要』第12号 東京大学文学部考古学研究室
- 池水寛治1979『莊貝塚・出水市文化財調査報告書1』出水市教育委員会
- 川崎保1990「7 阿高式系土器の縄年と伊木力遺跡第9群土器の評価」「伊木力遺跡 長崎県大村湾沿岸における縄文時代低湿地遺跡の調査」多良見町教育委員会 同志社大学考古学研究室
- 高橋信武1989「轟式土器再考」「考古学雑誌」第75巻第1号 日本考古学会
- 田島龍太1982「4 菜畠遺跡縄文時代前～中期の土器群の縄年と様相」「菜畠・唐津市文化財調査報告書5」唐津市教育委員会
- 徳永貞紹1993「(2)下層の遺構と遺物」「平原遺跡II 本川川防災調節池事業関係文化財調査報告書2」佐賀県文化財調査報告書 佐賀県教育委員会
- 徳永貞紹1994「並木式土器の成立とその前夜」「牟田裕二君追憶論集」牟田裕二君追悼論集刊行会
- 東和幸1994「春日式土器と並木式土器・阿高式土器」「南九州縄文通信」No.8 南九州縄文研究会
- 水ノ江和同1990a「6 西北九州の曾畠式土器」「伊木力遺跡 長崎県大村湾沿岸における縄文時代低湿地遺跡

の調査】多良見町教育委員会 同志社大学考古学研究室  
 水ノ江和同1990b「中・南九州の曾畠式土器」「肥後考古」第7号 肥後考古学会  
 宮本一夫1989「轟式土器様式」「縄文土器大観1」小学館  
 宮本一夫1990「轟式土器の再検討—京都大学文学部博物館収蔵資料を中心に—」「肥後考古」第7号 肥後考古学会  
 山口信義1987「薩摩文（轟B式）土器研究ノート」「研究紀要」創刊号 財団法人北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室  
 矢野健一1995「並木式・阿高式の編年観変更の意義」「日本考古学協会第61回総会研究発表要旨」日本考古学協会  
 渡邊康行1984「第III群土器について」「長崎市立深堀小学校校舎増築に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書」  
 長崎市教育委員会

## 2. 石器について

6・4、5・3層の石器については、ほぼ轟B式土器・曾畠式土器・南福寺、坂の下式土器を主体とする包含層で、石器についてもそれぞれの時期の様相をある程度示すものとして取り上げた。4、5層については、曾畠式土器を主体とするが、轟B式土器も含んでおり、これが即4、5層の石器組成を反映するかについては疑問の域をでない。6層については轟B式土器の単純層、3層についても縄文後期を主体とするのであるが、土石流堆積物であり、生活址から運ばれてきた遺物であるため、当時の石器組成の一断片を表すにすぎないと考えられる。そこで県内で比較的良好な形で残存する遺跡の石器群をみるとことによって伊木力遺跡の石器組成を再度検討する材料としてみたい。ただし、時期的には、轟B式土器・曾畠式土器を出土する遺跡で石器群を把握している例は少ないため、ここでは縄文前期の石器については、今回の調査で気づいた面を取り上げ、本遺跡3層に比定される後期については、県内で良好な遺跡がいくらか存在するため、この時期について検討することとする。後期の遺跡で比較の対象としたものについては、海岸部と内陸部の遺跡では石器組成に変化があることを考慮し、伊木力遺跡と同様に海岸部に隣接する遺跡について後期を3時期に分割して取りあげ、表5にまとめてみた。表作製に関しては『徳藏谷遺跡』(3)－徳藏谷遺跡の編年的位置図(田島、1996)を参考として作製した。

### 【縄文前期の石器について】

先に述べたように、前期については九州各県において多くの資料が提示され研究されているが、石器については同志社大学報告分の「伊木力遺跡」のⅣ層轟B式土器、VII層曾畠式土器の単純層に負うところが大きい。しかし、前期の土器の研究に比べ、石器研究は立ち遅れていることはいなめない事実である。従って、ここでは石器組成全体というより、本遺跡の石器の中で気づいた点を列挙することにしたい。

今回調査分で轟B式土器、及び曾畠式土器に伴う石匙が3層におけるものより多く看取され、特に曾畠式土器に伴うものについては数量的に3層を圧倒する。この傾向は後期に石匙が少ないと示

峻した橋の見解に沿うようである。県内の遺跡で石匙が出土するのは早期後葉以後であり、早期には石匙が多量に出土することが知られる。早期の遺跡の分布については轟B式土器・曾畠式土器を出土する遺跡が海岸部により近いところに占據するのに対し、早期後葉の遺跡はやや高地に位置する。いわゆる狩猟採集経済に依拠する姿が浮き上がってくる。石匙の使用方法については、動物の解体や毛皮をなめすなどといわれているが、この石匙の伝統は、次の前期の時期までは続いているようである。

素材としては、薄手の縦長剝片を使用し、縦型と横型の2種が存在する。

#### 【県内の縄文時代後期の石器群について】(表5)

縄文後期の時期区分については、南福寺式土器・坂の下式土器・出水式土器などを主体とする一群、鐘崎式土器・北久根山式土器を主体とする一群、三万田式土器を主体とする一群として石器組成を捉えるものとする。九州の中期～後期、ひいては晩期に関する時期区分については、現在混沌とした状況にあり、いままでの編年観そのものについても見直しの段階にきているようである。ここでは土器論にまで話を展開する時間も筆者の力量もないため、それぞれの土器型式を主体に長崎県内で石器が比較的まとまって出土した遺跡について、その石器群の特徴を捉えていくこととする。

#### 【南福寺式土器・坂の下式土器を主体とする段階】

この時期の遺跡としては、殿崎遺跡第二次調査区をあげた。遺跡は北松浦郡小値賀町に所在し、昭和57・58年に実施され、それぞれ第一次調査・二次調査として発掘調査が行われている。第二次調査区では若干鐘崎式土器が出土しているものの、南福寺式土器が主体ではほぼこの時期のものとして捉えて差し支えないものと思われる。

狩猟・漁撈具の中で石鏃の特徴として、報告書のなかでも触れているように石鏃が大・中・小セット関係を持つかのように存在し、丁寧な二次加工を施した鉛歯縁鏃が主体を占める。剝片鏃も少量ながら認められる。石鏃も多量に出土しており、鉛歯を持つ石鏃と石鏃がその技術的なものから考えても伴うことは容易に察せられよう。狩猟・漁撈具として、黒曜石製の鉛歯を持つ石鏃・石鏃・石鉈をセットとして持つのがこの時期の特徴である。このようなセット関係は佐賀県德蔵谷遺跡でも看取されるためこの時期の（特に海岸部の遺跡）特徴として捉えることは可能であろう。

伐採具としては、小形のノミ状石斧と大形石斧がセット関係を持つようである。

剝片剝離技術については、剝片を見る限りにおいては、縦長剝片の数が多く、剝片の剝離面が交互に剝離した痕跡を持つ物があり、鈴桶型刃器技法（以下鈴桶技法）との関連が考えられる。鈴桶技法そのものについては剝片鏃との関連から次の段階の鐘崎式土器・北久根山式土器の時期に発達するものと考えられるが、殿崎遺跡第二調査区の石鏃などを見る限りにおいてはかなり規格性があるものが揃っており、素材剝片も定形的なものが要求されたと考えられ、整った縦長剝片が必要であったと思われる。このために鈴桶型刃器技法（以下鈴桶技法）がこの時期に看取されるのであろう。

#### 【鐘崎式・北久根山式土器を主体とする段階】

この時期の遺跡としては、殿崎遺跡第一調査区・対馬の佐賀貝塚をあげた。殿崎遺跡第一調査区については南福寺式土器を若干含むが、ほとんどが鐘崎式土器で占められる。佐賀貝塚についても同様

で、鐘崎式土器を主体とする遺跡である。佐賀貝塚は、骨角器・石斧が大量に出土しており、その遺跡の特異性については他に例がない。この期の狩猟・漁撈具については剝片鐵でほぼ占められる。前段階に比べ通常の石鐵の出土は少なくなり、佐賀貝塚では石鉛状の大形剝片鐵も出土するなど、剝片鐵に依存する率が高くなる。石鉛については、大形の定形的な安山岩製のものの出土が減少する。この状況だけを見てみると、安山岩製の大形石鉛は、この時期になると減少あるいは大形剝片鐵に取って変わるものと考えられる。剝片鐵の製作に深く係わるとされるつまみ形石器も多量に出土する。

剝片剝離技術については、剝片上にみられる旧剝離面が上下から入るものが多くなる。石鐵についても通常の二次加工面に覆われるタイプのものは減少し、剝片鐵が主体となる。一方、石鉛の出土がやや減少する傾向にある。鈴桶技法の発展期として捉えられるものであろう。

#### 【三万田式土器を主体とする段階】

この時期については県内では良好な遺跡は少ない。南高来郡国見町所在の役遺跡、同じく飯盛町所在の下ノ釜貝塚と、三万田式土器に続くとされる御領式土器を出土する南高来郡南串山町所在の国崎遺跡をあげた。後遺跡を除く2遺跡については、調査面積が狭いため石器は剝片、十字形石器等しかみられないが、西平式土器と三万田式土器を主体とする役遺跡では、これに疊石錐が多量に出土するなど、漁業に対しても依存している状況が知られる。また剝片においてはなお鈴桶技法の影響がみられることから、三万田式土器の段階までこの手の剝片剝離技法が残る可能性が考えられる。現在調査中である南高来郡有明町の大野原遺跡では、大量の三万田式土器とともに縦長剝片が多量に出土しており、鈴桶技法の伝統が引き続き残ることが予想され今後の報告に期待される。扁平打製石斧の出土についてもこの段階には確実であり、西平式土器の段階まで遡れるようである。

以上のことからすれば、県内の南福寺式土器～北久根山式土器にかけての石器群は、石鉛や石鉛など漁撈的な色彩が強い石器が多く、三万田式土器の出現とともに農業的な関連性を含んでくる可能性が高いようである。三万田式土器は、熊本県などの内陸部の遺跡に見られるように土偶や、十字形石器、扁平打製石斧の出土などそれまでにみられなかった物の出現から、新たな生業形態の出現との関連の中で発生したものと考えられる。このような様相は県内ではすでに西平式土器において看取できるものであり、鐘崎式土器・北久根山式土器の分布と西平式土器の分布、さらに三万田式土器の分布を重ね合わせることで、繩文後期の漁撈形態と、徐々に農耕的な色合いをもつ遺跡の分布が相違するのではないかという漠然とした考えを持っている。先の扁平打製石斧については、吉留（1993）によれば、北部九州ではすでに北久根山式土器の段階から出土するということである。県内では現在のところ北久根山式土器の段階では看取できず、次の西平式土器の段階まで待たねばならない。このことは、扁平打製石斧の西進性ということからも頷けることである。県内の後期の海岸部の遺跡の分布を概観すると、坂の下式土器から北久根山式土器の分布は重なる傾向にある。このことについては、すでに高野（1986）の論考中で「……鐘ヶ崎式、北久根山式を伴う遺跡は、前記南福寺式、山水式土器が出土する遺跡とほぼ重複する傾向をもつ。これは……阿高式系土器から磨消繩文系土器への推移が比較的自然に行われたことを示していよう」との指摘がなされている。県内の南福寺式土器～北久根

表 5 県内の縄文後期の石器群の変遷

山式土器の時期の遺跡立地が海岸部に多いことと相まって、石器群においても個々の盛衰はあるものの、漁撈活動との関係なしには語れない石器の出土など、縄文時代の各期の中でも特にこの時期における漁業に対する結びつきの強さが独特の文化を育んだのであろうと思われる。また、先述したごとく、三万田式土器の分布については、県内では島原半島で主体的に分布するものと考えている。このことは、島原半島の地形（微高丘陵、平野部が多い）が先の遺跡の地形とかなり相違することによるものだろう。また、これを繋ぐ形で西平式土器が海岸部の遺跡において散見されるが、三万田式土器との分布域の方がより強い結びつきをもつようである。今回西平式土器の石器群について触れていないのは、県内における西平式土器に伴う石器群が明確でないことが挙げられる。ただ、深堀遺跡の報告の中では、すでに十字型石器がみられ、剝片においては縦長剥片が看取されるなど、先に挙げた鍬崎式土器・北久根山式土器の石器群の様相と、次の三万田式土器の石器群の様相を併せ持った文化がそこに介在するようである。いずれにせよ剝片剥離技術については鍬桶技法によるものか否かの検討は今後必要となろうが、縦長剥片を主体とする技術は三万田式土器までは伝統的に残されていたものと考える。

長崎県という地形的にはほぼ海に面した地域において発達する縄文後期の漁撈文化は、島原半島という地形的に微高丘陵や平野部が占める割合が多い地域においては発達せず、次の西平式土器や三万田式土器の時期に急速に大遺跡が営まれるようになる。今後この点については、分布論、石器組成などについて再度検証していく必要がある。伊木力遺跡の場合大村湾の最奥部ということで、内湾性の独特的な文化をもつことも予想されるが、このような内湾性の縄文後期遺跡は県内では報告例が少ない。これに対し、県内の南福寺式土器～北久根山式土器を主体とする遺跡は、外海に面した漁撈文化であるといえる。今後南福寺式土器以降の時期の石器文化をさらに詳細に検討することが縄文後期における漁撈文化の盛衰を考えるうえで重要になろう。

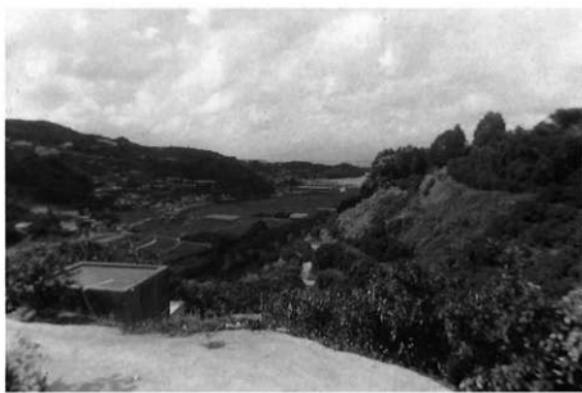
#### 参考文献

- 賀川光夫・他 1967『深堀遺跡』人類学考古学研究報告一号
- 橋 崑信 1976「石銛—西北九州における縄文時代の石器研究 二」『史学論叢』10 別府大学史学研究会
- 秀島貞廉・山本愛三他 1984『有喜貝塚』諫早市文化財調査報告書第5集
- 高野晋司・福田一志他 1986『殿崎遺跡』長崎県文化財調査報告書第83集
- 福江市教育委員会 1987『中島遺跡』福江市文化財調査報告書第3集
- 山崎純男 1988「西北九州漁撈文化の特性」『季刊考古学』第25号 雄山閣出版
- 正林謹編 1989『佐賀貝塚』峰町文化財調査報告書第9集
- 多良見町・同志社大学考古古学研究室編 1990『伊木力遺跡』多良見町文化財調査報告書第7集
- 吉留秀敏 1993「縄文時代後期から晩期の石器技術総体の変化とその評価」『古文化談叢』第30集(上)
- 古文化談叢発刊20周年・小田富士雄代表選賀記念論集 九州古文化研究会

伊木力遺跡 II

- 吉田正和 1994『大久保遺跡』熊本県文化財調査報告 第143集 熊本県教育委員会  
村川逸朗 1995『下釜石棺群・下ノ釜貝塚』飯盛町埋蔵文化財調査報告書第2集  
古門雅高 1995『国崎遺跡』II 南串山町文化財調査報告書第3集  
田島龍太 1996『徳蔵谷遺跡』(3) 唐津市文化財調査報告書第68集 唐津市教育委員会

# 図 版

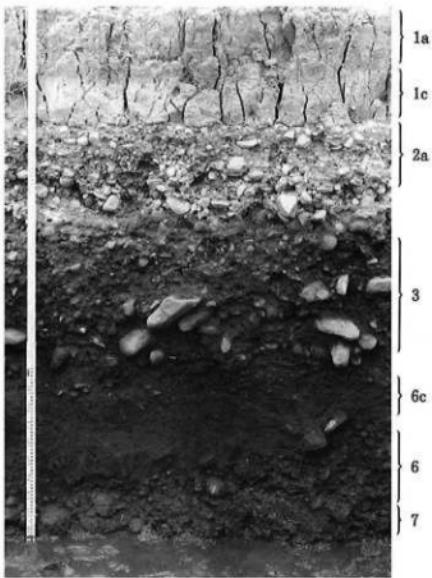


調査区遠景

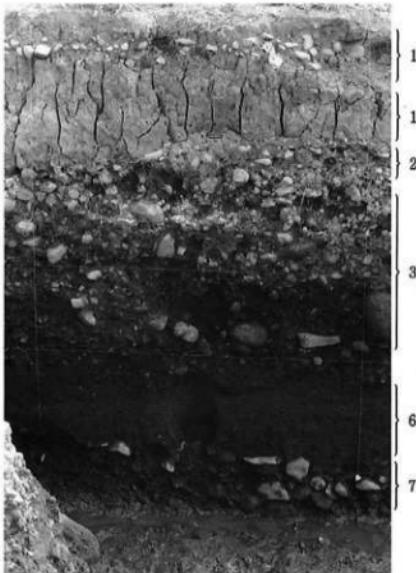


II区表土剥ぎ

図版1 調査区遠近景



II区 南側セクション



図版2 II区セクション



土石流による倒木



調査風景



I区西壁



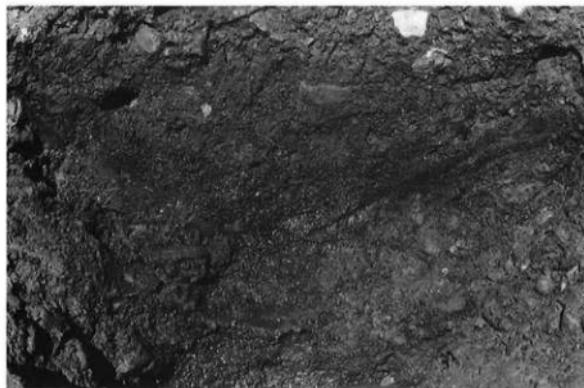
I区貯藏穴出土状況

図版3 I区ドングリ貯藏穴出土状況



24号は後期初頭  
18・20号は前期

II区貯蔵穴検出状況

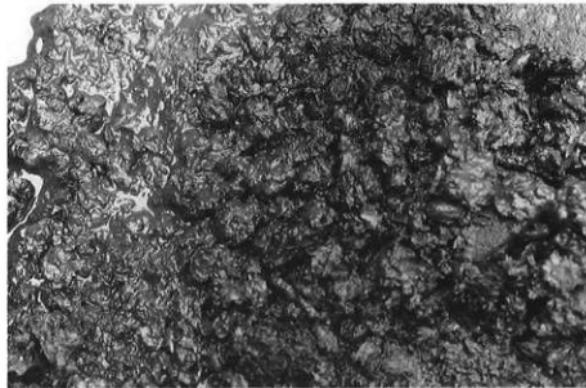


貯蔵穴のセクション

図版4 II区 ドングリ貯蔵穴検出状況



ドングリ貯蔵穴  
上面の検出



上面における  
ドングリ集積状況



図版5 ドングリ貯蔵穴検出状況



22号貯蔵穴



23号貯蔵穴

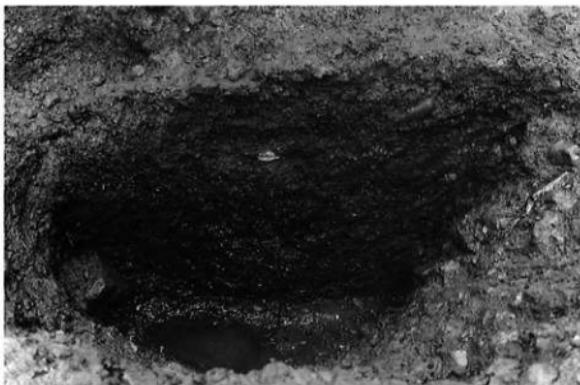


24号貯蔵穴

図版 6 22, 23, 24号 ドングリ貯蔵穴 (縄文後期)



17号貯蔵穴



18号貯蔵穴



19号貯蔵穴

図版7 17, 18, 19号 ドングリ貯蔵穴 (森口式土器)



20号貯蔵穴



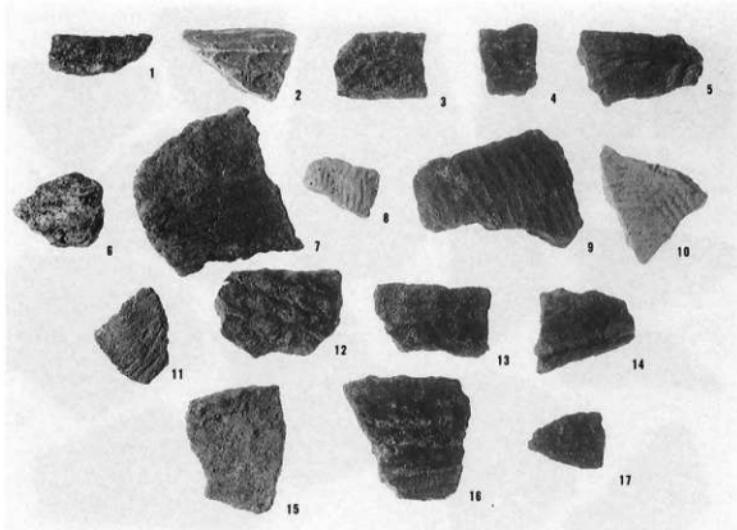
21号貯蔵穴



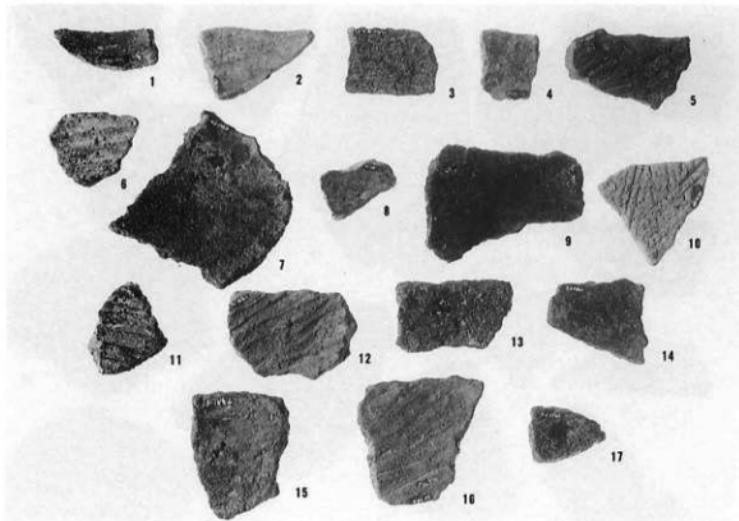
25号貯蔵穴

図版 8 20, 21, 25号 ドングリ貯蔵穴 (縄B式土器)

外 面

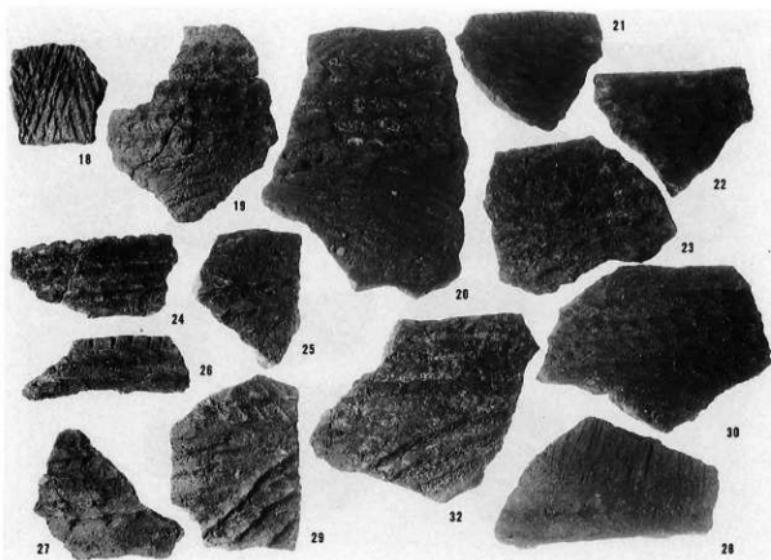


内 面

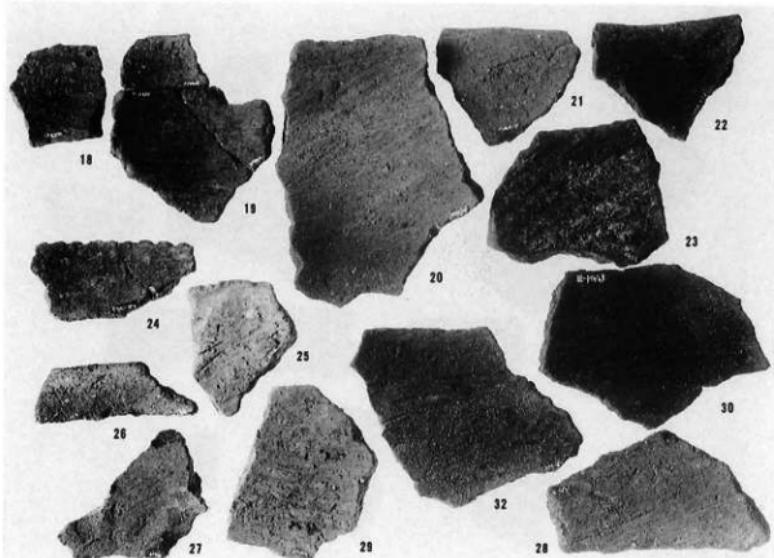


図版 9 ドングリ貯蔵穴出土土器

外 面

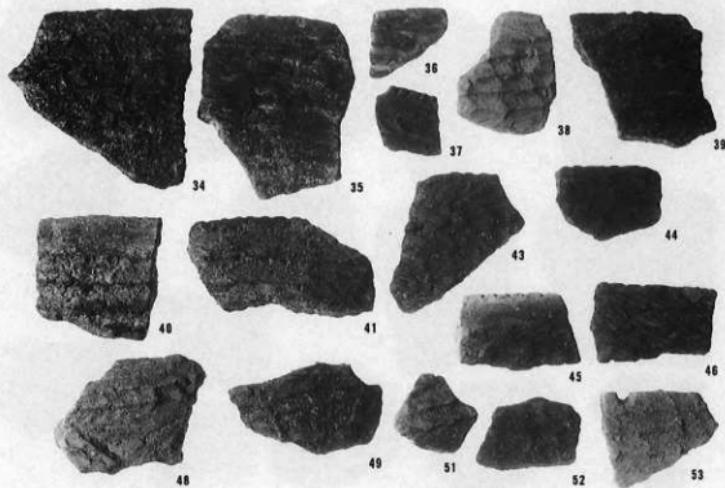


内 面

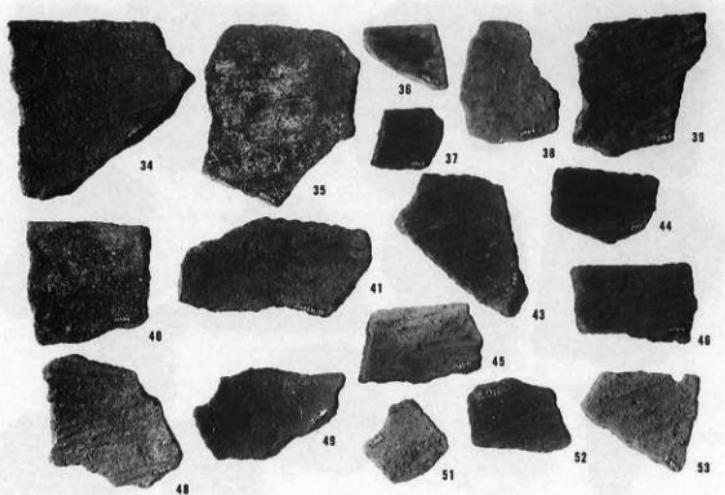


図版10 6層出土土器 森日式土器第1類

外 面

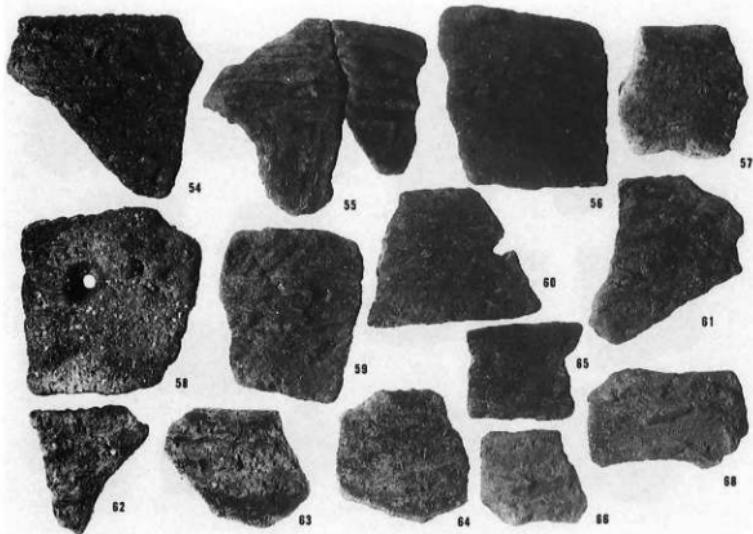


内 面

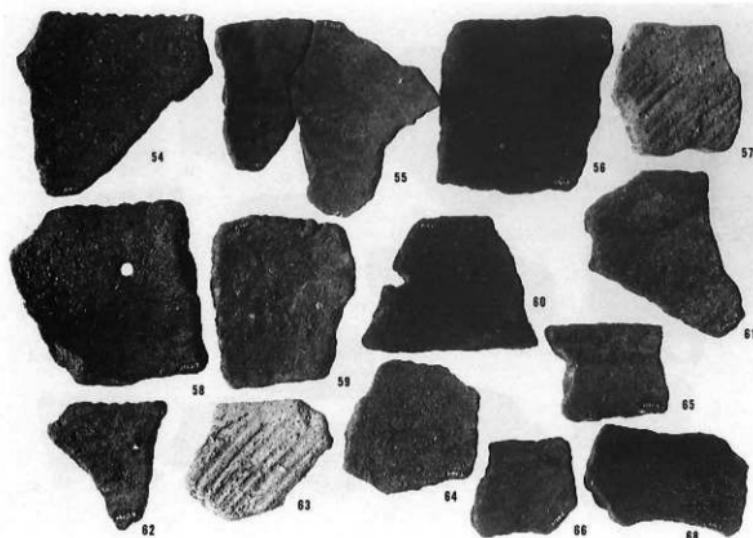


図版11 6層出土土器 森日式土器第2類

外 面

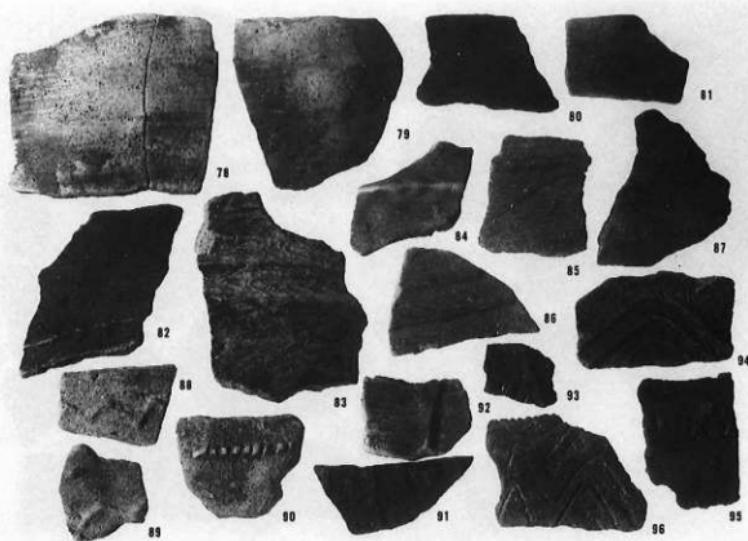


内 面

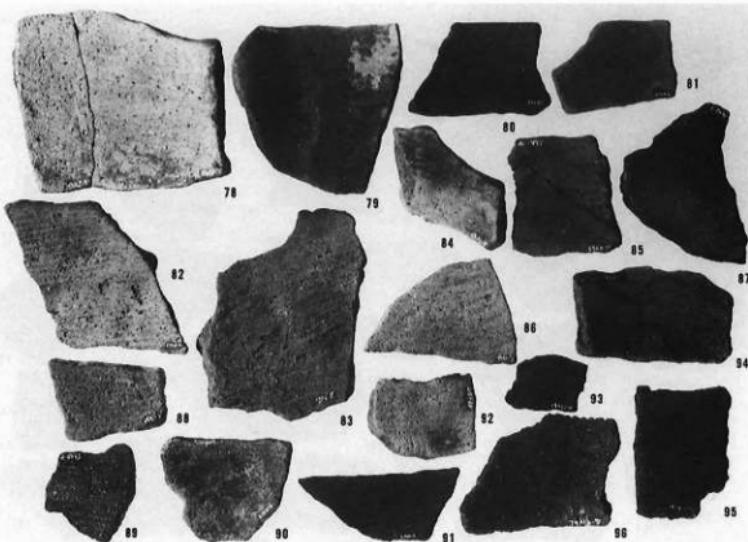


圖版12 6層出土土器 畠口式土器第3類

外 面

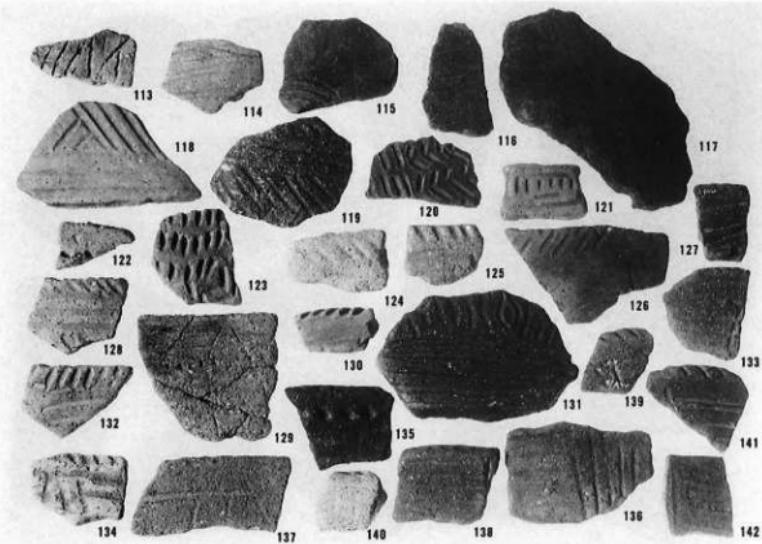


内 面

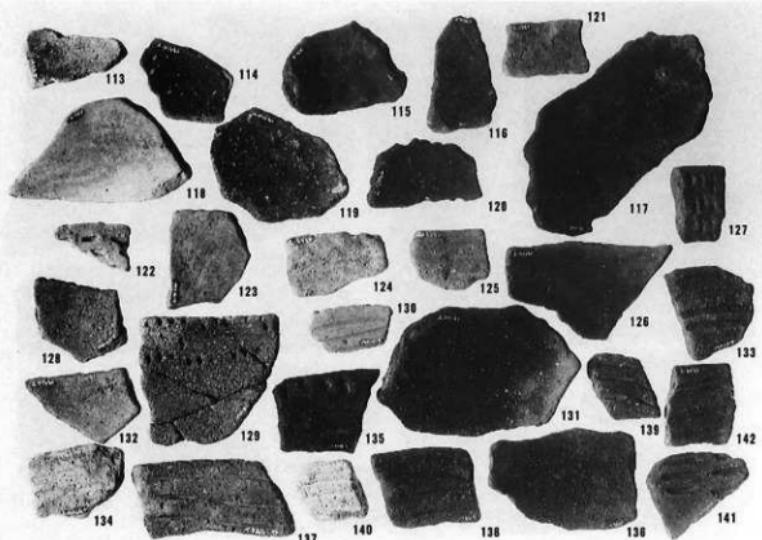


図版13 6層出土土器 磁石式土器第4類

外 面

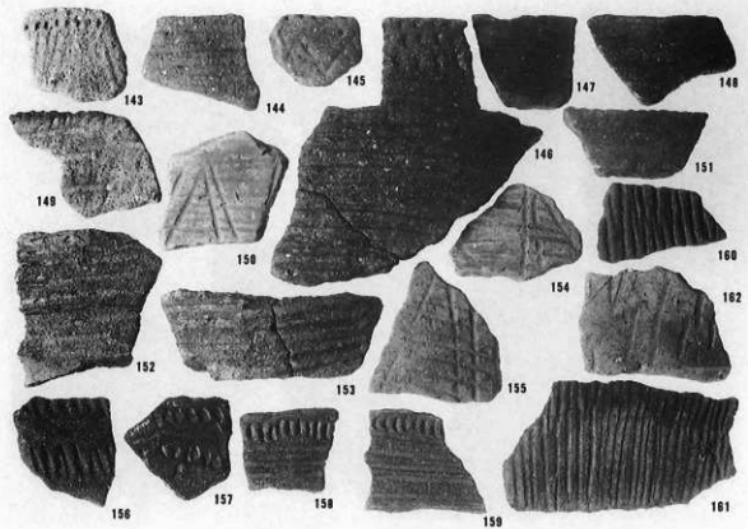


内 面

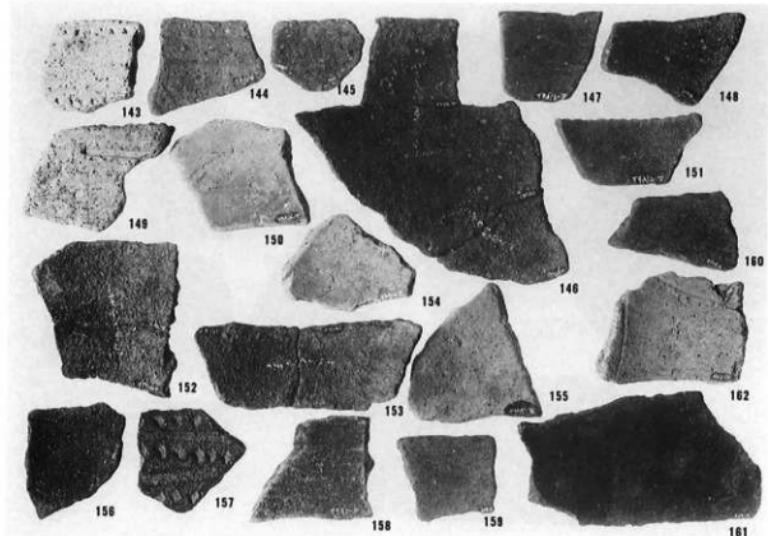


図版14 5層出土土器

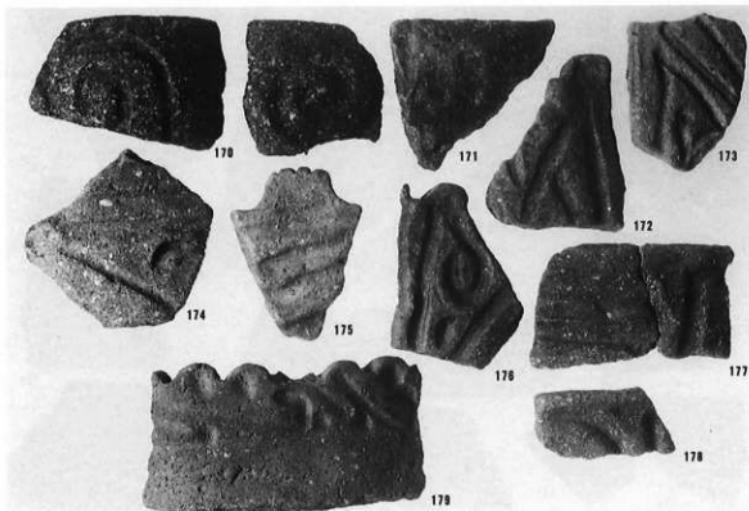
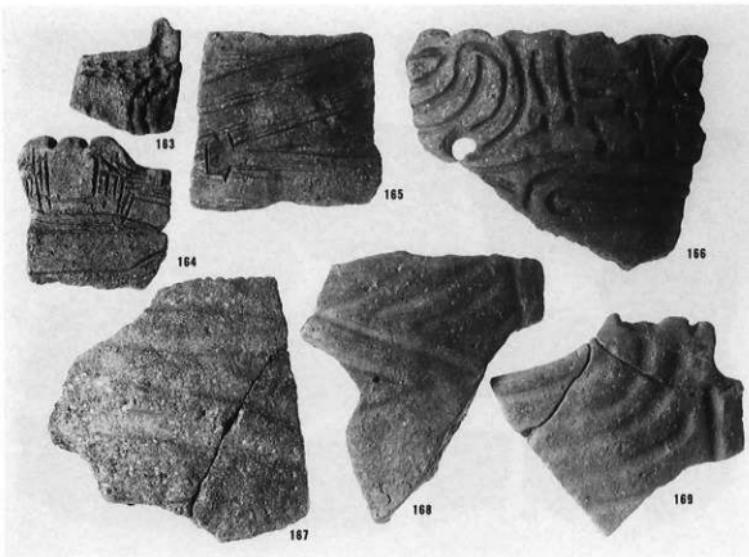
外 面



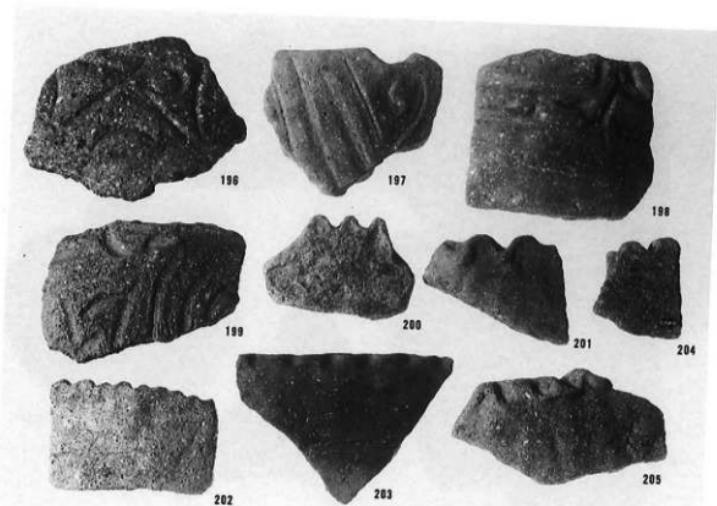
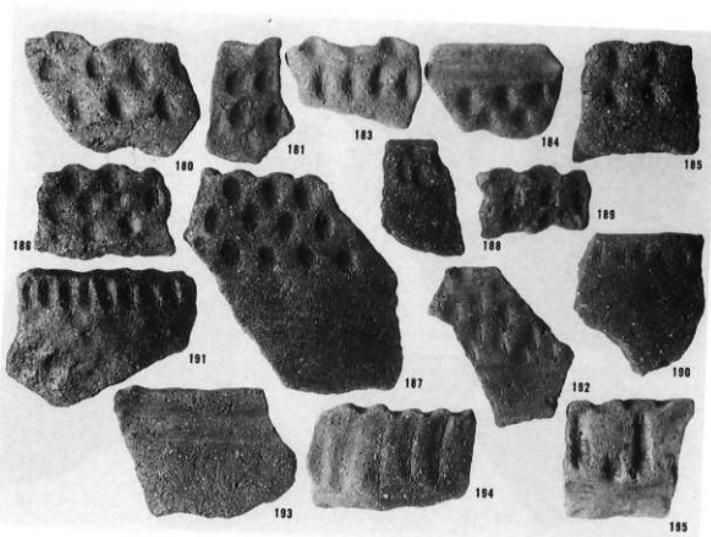
内 面



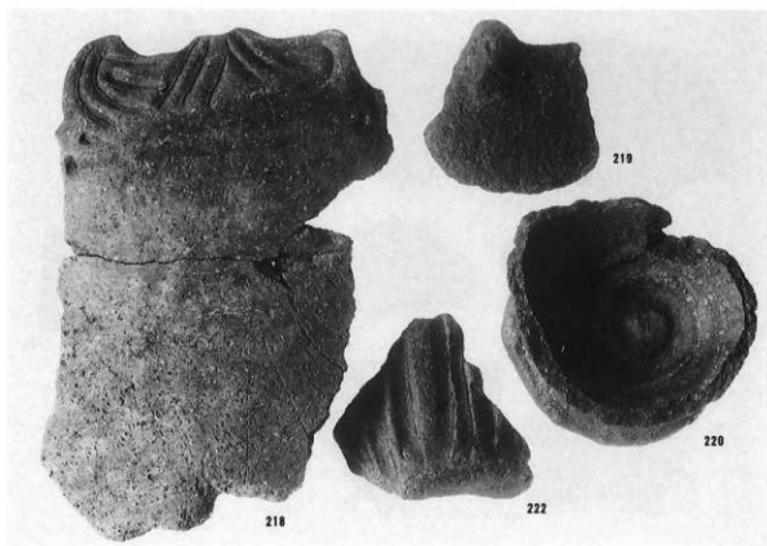
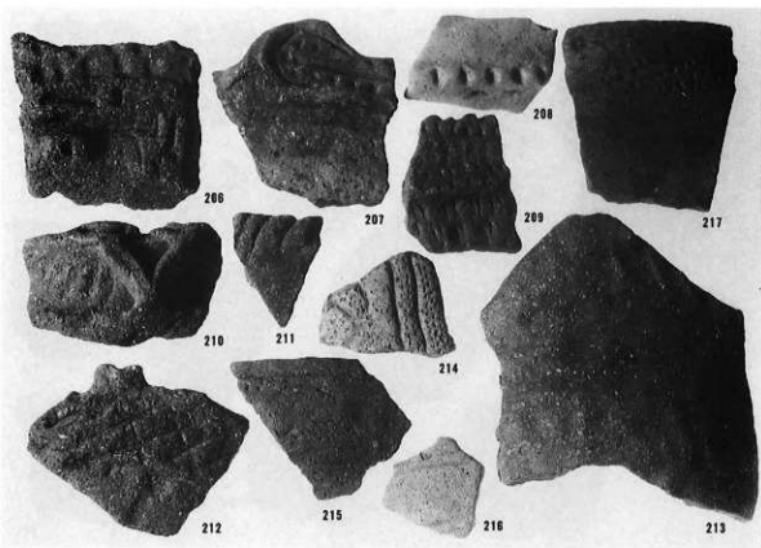
図版15 5層出土土器



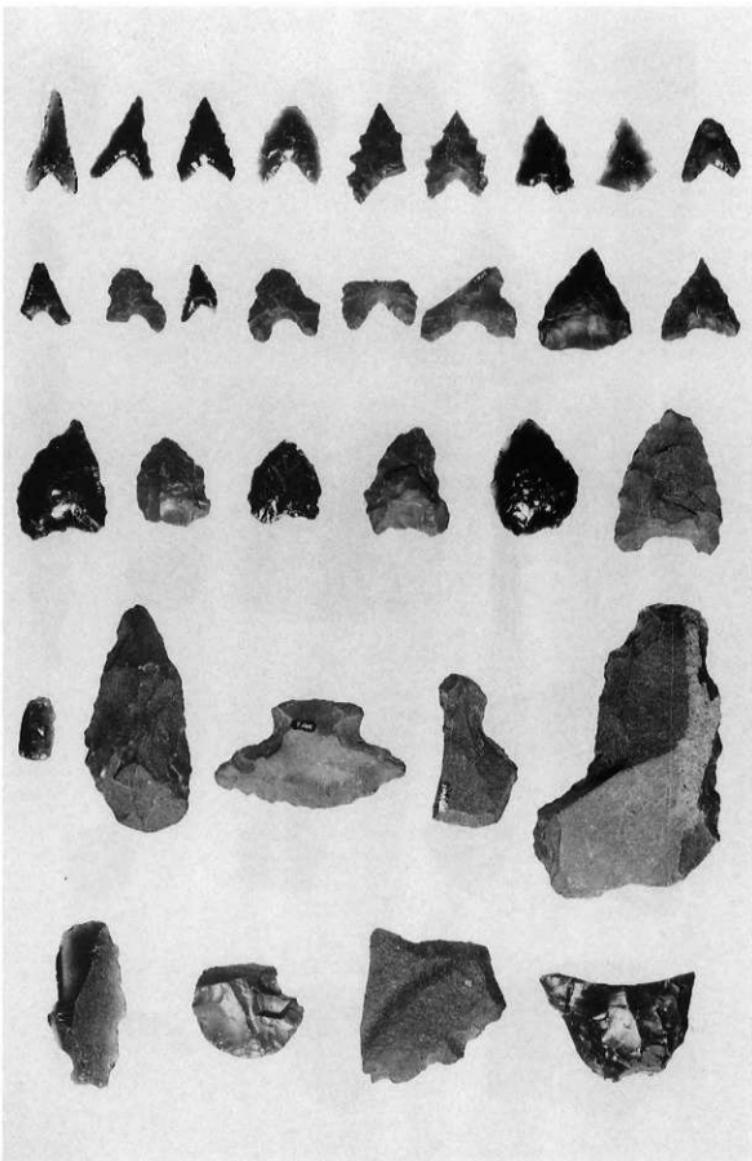
图版16 3层出土土器



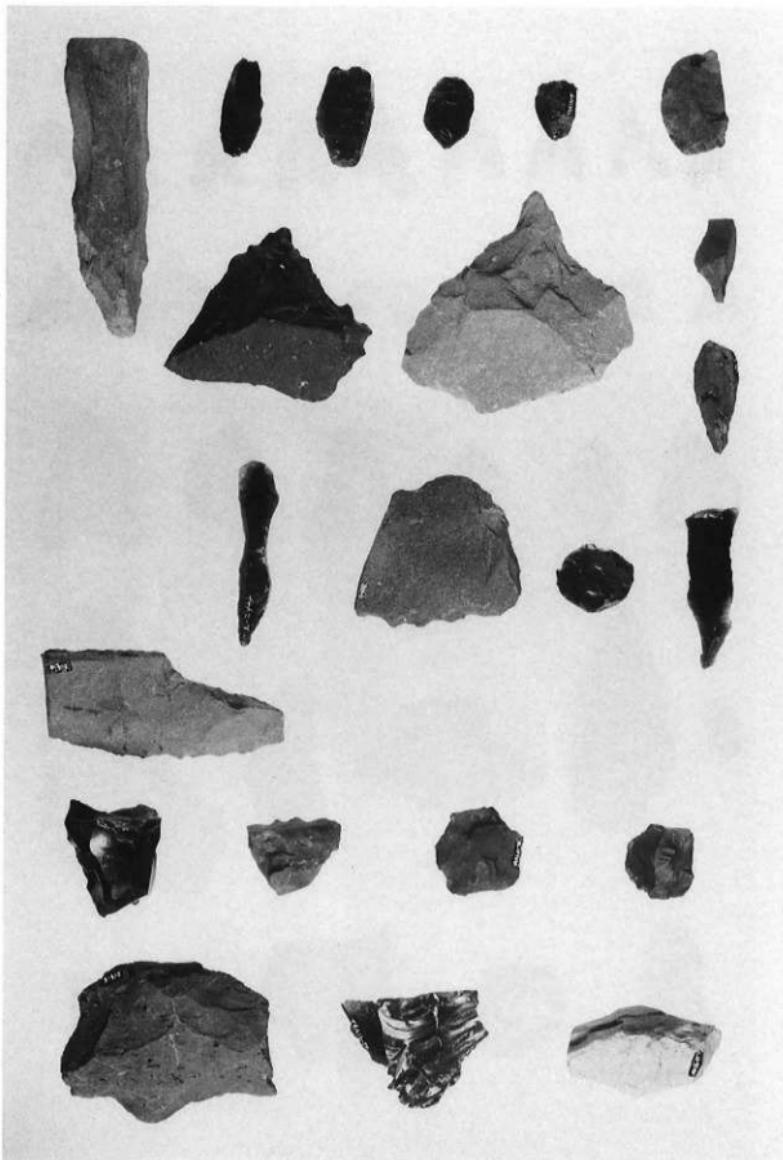
圖版17 3層出土土器



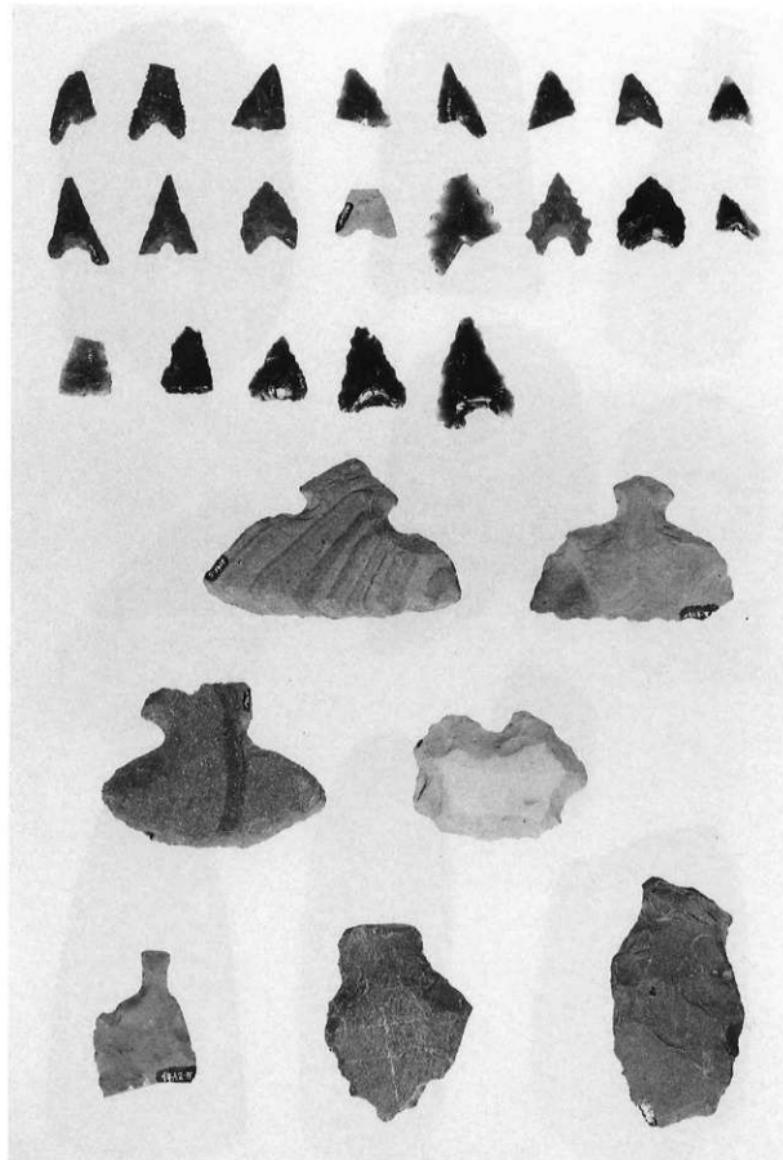
図版18 3層出土土器



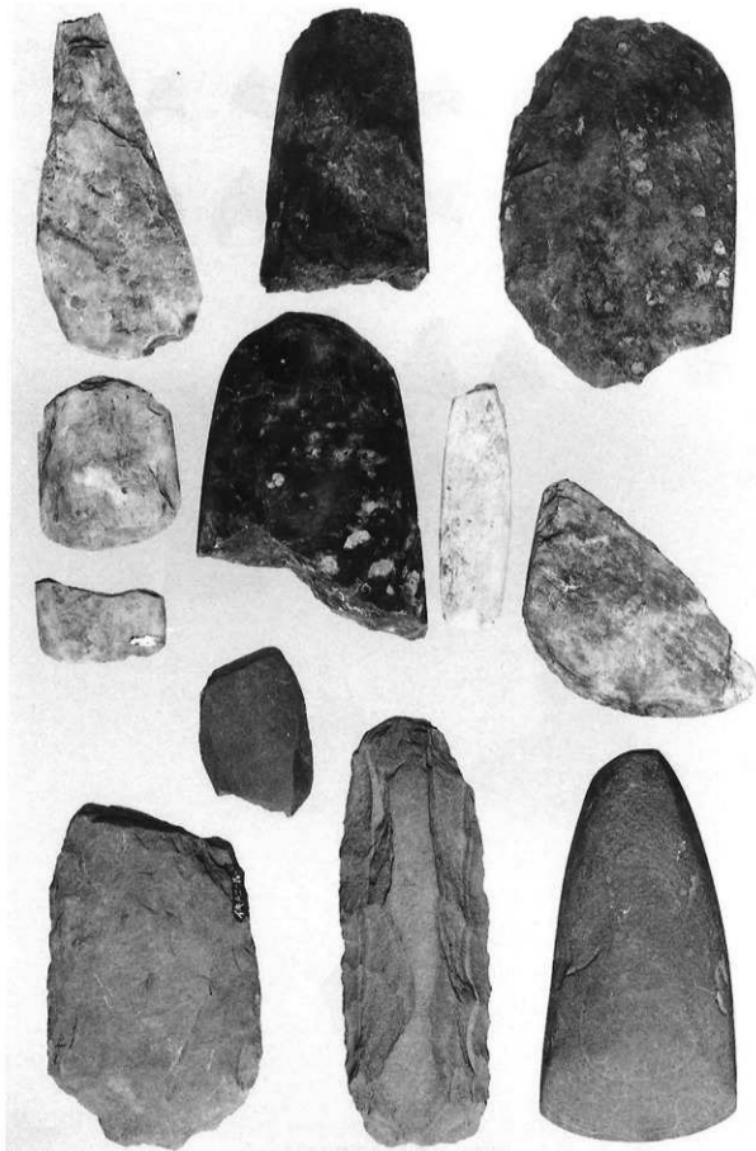
図版19 6層出土の石器（2/3）



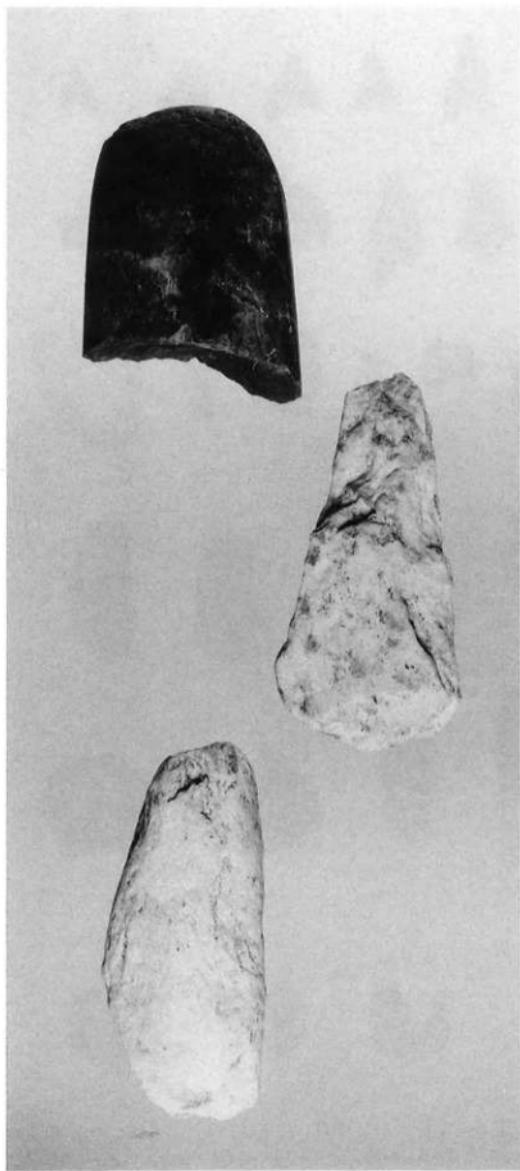
図版20 6層出土の石器（2/3）



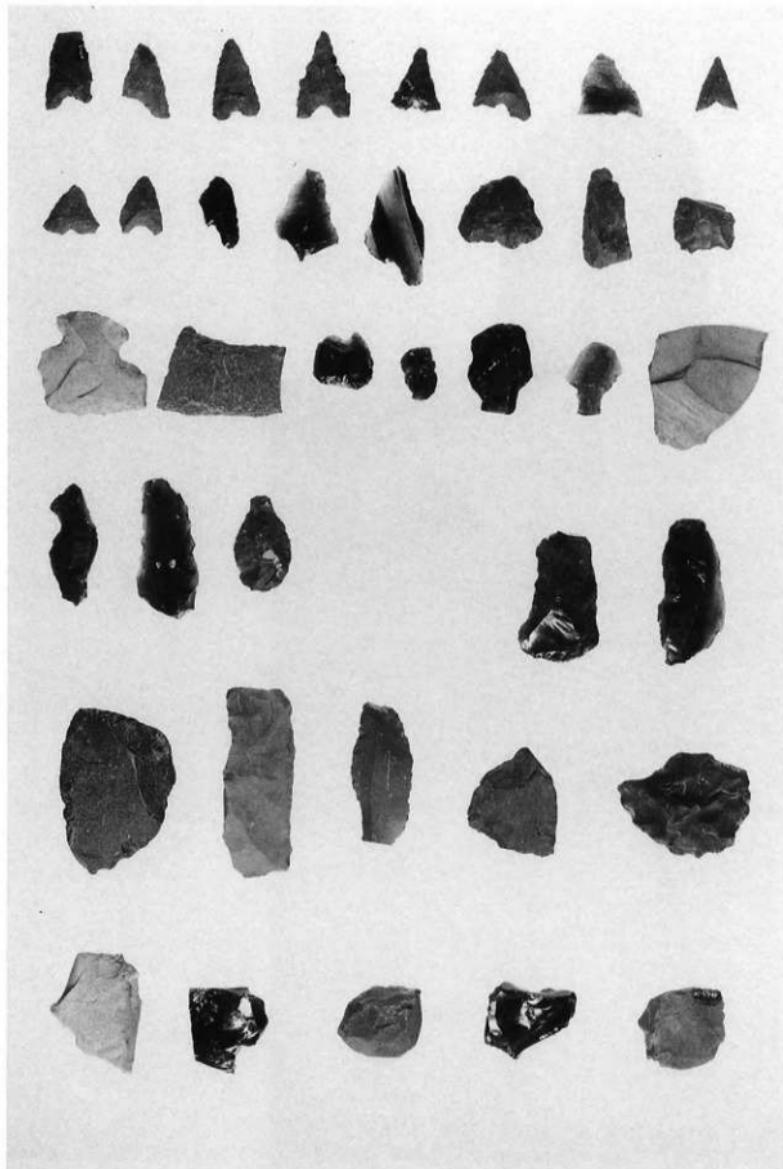
図版21 5層出土の石器 (2/3)



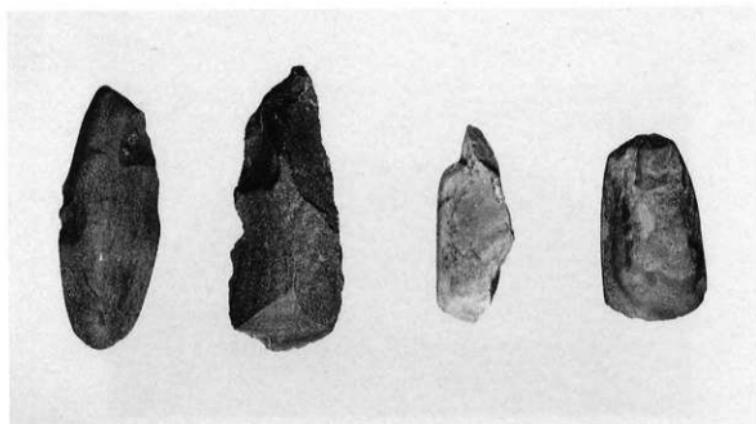
図版22 5層出土の石器 (2/3)



図版23 5層出土の石器 (2/3)



図版24 3層出土の石器 (2/3)



石斧（2/3）

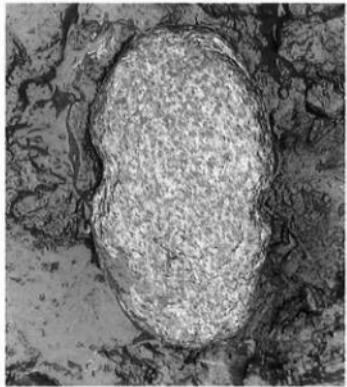


超大型砾石錐（1/4）

図版25 6層出土の石斧と超大型砾石錐



図版26 5層出土の石皿と超大型砾石錐（1/4）



图版27 造物出土状况

## 報告書抄録

ふりがな	いきりきいせき						
書名	伊木力遺跡						
副書名							
巻次	II						
シリーズ名	長崎県文化財調査報告書						
シリーズ番号	第134号						
編著者名	福田一志・古門雅高						
編集機関	長崎県教育委員会						
所在地	〒850 長崎県長崎市江戸町2-13 TEL 095-826-5010						
発行年月日	西暦1997年3月31日						

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド		北 緯	東 經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
伊木力遺跡	西彼杵郡 長与町舟津郷	42307	14-4	32°51'17"	129°55'43"	19931129 19931207 19940822 19941207 19950712 19950926	641m <sup>2</sup> (試掘) 43m <sup>2</sup> 本調査 398m <sup>2</sup> 本調査 200m <sup>2</sup>	道路建設

所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
伊木力遺跡	遺物包含地	縄文時代	ドングリ貯蔵穴	縄文時代の土器 石器	縄文時代前期壺式土器に伴うドングリ貯蔵穴22基出土

長崎県文化財調査報告書 第134集

伊木力遺跡II

平成9年3月31日

発行 長崎県教育委員会

長崎市江戸町2-13

印刷 佛昭和堂印刷

『伊木力遺跡Ⅱ』長崎県文化財調査報告書 第134集 正誤表

- ①18頁 28行目 (誤) ①第I群土器 (第11図18) → (正) ①第I群土器 (第12図18)
- ②19頁 第11図 (誤) 18 → (正) 110  
(誤) <18を除く> → (正) <110を除く>
- ③24頁 7行目 (誤) f 第6類 (第16図110~112) → (正) f 第6類 (第11図110, 第16図111, 112)